

川柳塔

昭和四十一年一月九日第三種郵便物認可
平成十七年十一月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷九四二号



● 日川協加盟

No. 942

第11回川柳塔まつり特集

十一月号

年賀広告募集

本誌一月号に掲載する年賀広告を募集いたします。同人・誌友ならびに各句会（川柳会）のアピール及び誌上名刺交換の場として、積極的にご利用をお願いする次第です。広告のスペースと掲載料は、左記のとおりですので、お申込みのほど、よろしくお願い申し上げます。

★個人 一口1/2頁 二、〇〇〇円

1/6頁 三、〇〇〇円

（氏名・住所・電話番号など掲載）

★団体 次の四種といたします。

①1/3頁 六、〇〇〇円 ③2/3頁 一二、〇〇〇円

②半頁 九、〇〇〇円 ④一頁 一八、〇〇〇円

▼原稿締切 11月23日

〒545-0005 大阪市阿倍野区三木町二一〇一六

ウエムラ第2ビル 202号室

TEL 06-6629-6914

川柳塔社

大阪川柳大会（11月19日）10月号掲載の締め切り時間が間違っていました。12時30分ですのでご注意ください。

★新年号特集★

川柳塔社同人参加（一人一句）

「私の一句」

■今年中に発表された句に限りです。
■締切 11月23日（本社事務所宛）

お知らせ

寒い季節の本社句会の開催時間を、午後一時から五時までとします。締切りは二時半。

平成十七年（二〇〇五年）

十一月七日（月）アウイーナ大阪

十二月六日（火）アウイーナ大阪

平成十八年（二〇〇六年）

一月七日（土）アウイーナ大阪

二月七日（火）アウイーナ大阪

三月七日（火）アウイーナ大阪

潜在能力の発掘

河内 天笑

サラリーマン川柳の愛好者はいま百万とも二百万とも言われている。私達をつくる川柳と多少内容の違いはあつても「五・七・五」のリズムで川柳をつくる事に關してはみんな仲間だ。潜在的に川柳をつくる才能を持つ人は、何百万人と居るかも知れないと思えば嬉しくてわくわくする。ただし、いくら能力を持って居られても、その潜在能力を引き出す機会に恵まれなければ、才能は磨かれないし、ひよっとすれば埋もれたままで終わってしまう。それは実に勿体ない事だ。つまり潜在能力を発揮する機会に出会う事が先決問題となる。

私の場合はどうであつたかを一つの例として紹介しよう。脱サラ五年目で包装用紙製品を或る会社の現場へ毎日納品、月に一度事務所の会計課で集金。その時約束手形

とB4二つ折りのプリントを毎回貰つていた。これが社内川柳の発表誌であつた。

当時この会社には番傘川柳本社同人が三人と川柳塔社同人が一人居られ、社内川柳会には毎回(飯塚本聡夢氏を招聘されるなど熱を入れて居られた。昭和40年6月、納入業者二十社の代表と、この会社の役員数名とが夜行列車で山口県の萩へ旅行した際、最年少の私(当時31才)は、宿題を作句して居られた会計課長の木原氏と同席した。その時私も生まれてはじめて川柳なるものを作句した。(この時の経緯は「川柳塔」平成15年9月号「川柳との出会い」に詳細あり)。その後は一回だけ義理で社内川柳に顔を出したきりであつた。

萩旅行のちようど一年後、当時川柳塔社同人(飯新谷笑痴氏)にはつたり会い、ついで行つたところが堺若芽川柳会の六月例会。この夜何句か抜けて、川柳と抜きさしならぬご縁がはじまつた。つまり私の川柳的な潜在能力を出せる機会を授かつた訳だ。得意先に社内川柳があつた事、萩の旅行で木原連夢氏と同席した事、新谷笑痴氏を車に乗せた事がそれである。

皆様方もひとりひとり「川柳をしてみよう」と思うに至つた「決め手」があつたらう。自分だけが知っている「決め手」を掘り起こして友人、知人を川柳に誘つてみませんか。

川柳を始めるようになる積極的な例として

一、自ら新聞・雑誌の川柳欄へ投句
二、テレビ・ラジオの川柳から自分も作れると思つた

三、色紙や短冊を見て興味を持った

四、カルチャー教室のパンフ等で教室に参加

加

五、俳句や短歌の経験があつた

などが考えられるが、(四)の場合は生徒さん募集のパンフレットに出会う偶然性が必要なのです。このように積極的に参加される方達は別格として、最も川柳に誘ひ易いのは地域のサークルや小教室ではないだろうか。

三宅保州氏の熱意で出来上がった将に珠玉の如き「川柳しませんか」を友達に差し上げて、潜在能力を発揮する機会を与えてあげて下さい。



座右の句

寝転べば畳一帖ふさぐのみ

私の句

雨続くそばに池波正太郎

(路郎)

高橋宏臣

川柳塔 十一月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「大根干・美山」

■巻頭言 潜在能力の発掘	河内 天笑	(1)
仲間と共に	政岡 日枝子	(2)
川柳塔(同人吟)	河内 天笑	(4)
川柳塔の川柳讃歌 (11)	木津川 計	(53)
自選集		(54)
水煙抄	板尾 岳人選	(58)
愛染帖	新家 完司選	(79)
第11回 川柳塔まつり		(82)
同人総会・各賞表彰・記念句会・懇親宴		

仲間と共に

政岡 日枝子

今年になって二つの川柳教室に携わることになった。二年ほど前のこの欄に小さな小さな川柳勉強会のことを書いた。

それが二年ほどの間に少しずつ醸し出されて、山も動こうというもの、公民館活動として呱呱の声をあげたのである。

以前は歩行が多少困難であった女性が毎日少しずつ歩く。そうすると歩けるという気持ちがある。前向きになり自信に繋がる。

強い足には、冴えた頭脳が宿ると何かで読んだことがあるが、もう訪問川柳教室を開かなくても、外へ出かけることが出来るようになった。この姿勢が嬉しくて私も立ち上がった。「住吉川柳会」の誕生である。

ほどなく地区の老人会女性部の行事の一環として、こちらは全く初歩の人を対象とする川柳勉強会が生まれた。これも後から押され、前からひっぱられ、住む場所の色になるなら、と決心して引き受けることになった。

こちらは、人生の先輩達の中で埋没されそうになりながら、勉強、上達とは程遠く、茶話会に重点を置いているとしか言いようのない雰囲気の中で五・七・五の説明、「三才天の句と

俳風柳多留一篇研究 3

檸檬抄「洗う」……………仁部四郎・藤田泰子共選……………(96)

「霜」……………澤田和重選……………(98)

一路集「収穫」……………青山久子選……………(98)

「お金」……………出口セツ子選……………(99)

初歩教室「親戚」……………三宅保州……………(100)

秀句鑑賞「同人吟」……………中塚礎石……………(102)

水煙抄……………松下比ろ志……………(104)

各地柳壇(佳句地十選／松尾和香)……………(105)

柳界展望……………(120)

十一月各地句会案内……………(122)

■編集後記(ひとこと／井上桂作)……………楓葉・朱夏……………(124)

座右の句

人間に逢いたくなくて酒を飲む

(岳人)

私の句

真ん中は妻と母の座卓弥呼の座

村上直樹

は何を意味しますか」の質問にトホホと嘆いたりと、私もいそがしい。

しかし、この会が生まれた主旨を考えれば、人と人との交流を大切に、皆が先生、皆が生徒であって、花には花の、老いには老いの知恵があるもので、教えられる事が多い。

音色の異なる二つの楽器ではあるが、袖すり合った縁をも生かして、頑張ってみようと思っ

ている。
勉強会は月一回ではあるが、次の勉強会までの一ヶ月の間は、電話、ファックスを利用しての通信講座である。年齢的に見てケータイ・メールに縁がなく、従って私のケータイにズカズカと入り込むことはないのだが、不定期にくるファックスにペンを入れながら、いつしか作者の緊迫感が、心ばえが快く伝わり、その通信講座に私は引きずられてしまっているのである。

「中秋の名月と語る」という宿題を出した。月に声をかける。心の耳で月の声を聞く。心の眼で月を見る等ヒントは与えてあるのだが、どのような句姿になって私に戻ってくるのか、今回の勉強会が楽しみである。

このようにして地域の人達と交流を持っているのであるが、追い追い敬老会では、一緒に参加するようになる大切な大切な、隣近所の仲間でもある。



河内天笑選

松江市 津川紫晃

四コマの漫画の中に僕がいた
明日への夢は夫婦で丸く画く
切る切れぬ水の流れと血の絆
いたわりの言葉の裏をつい探り
いい人に会って時計がじまになる
よれよれの古い財布にあるコント

東大阪市 指宿千枝子

番号の便利危険がつきまとう
暗証番号を子供に教えとく
お化け話ひと塊にさせた夜
おとなしい人に化けてる殺人鬼
おじいさん髪を染めてもおじいちゃん
雑草の強さを見せておばあさん

三田市 北野哲男

上澄みを流せば下界おもしろい
正直に孫が喋って揉めさせる
栓抜きのをらぬビールは家庭用

さび抜きはお皿が違う回る寿司

人のネジ弛んだところはよく見える

この世でのスコアカード見る閻魔

箕面市 出口セツ子

空が青いから人間を信じよう

悪いこと悪いと素直に子に詫げる

幸福と思う子が居る愛がある

かけがえのない人が居て薄くパワー

単純ですぐに復活する元氣

逝く日までワクワクしたい破天荒

出雲市 岸桂子

影法師亡母の形になりたがる

狂わない時計わたしを急かしたてる

教育の教と育との肉ばなれ

争いのない靴下の右左

ライバルに陰で脱帽するばかり

親馬鹿がまた宅配の用意する

京都市 都 倉 求 芽

異文化の離島へ本土のマニフェスト

争点に九条消した死の選挙

刺客とや拾い集めた女飛車

落選へ残暑きびしい熱帯夜

国民をコップの嵐のまきぞえに

神風が驕る日本に鞭振う

鳥取市 鈴 木 一 弘

テロ自爆特攻の風吹き止まず

突風が吹くから釘を打っておく

天敵はいるがどうにか生きている

家計簿の赤字カードで蓋をする

運命と言っても旅はつらいもの

下駄履いて十五夜跨ぐ水溜り

鳥取県 石 谷 美恵子

お土産は豆腐ちくわと決めてある

農業にひたすら生きた社交下手

もう遅い肌につせとバックする

肌に合う合わぬと人を選び好み

感動が深くて日記まだ書けぬ

目印の煙突も消え街も錆び

宇部市 平 田 実 男

だんだんと敬語少なくなった嫁

ジーンズの穴から溢れ出る若さ

きれいで蝶が止まらぬ花がある

死んで下さいと福祉が削られる

ちよっかいを出したつもりが共白髪

ワンマンカーになってしまった縄電車

尼崎市 軸 丸 勝 巳

月までも行くが台風止められず

避難所の天井を見る不安な目

ケータイを持たぬと孫が遠くなる

商店街よりも賑わう大病院

日本語で書けば病名歳でんな

地下道に座る未来の音楽家

藤井寺市 鈴 木 いさお

お迎えをドタキャン 娑婆へ舞い戻る

匙投げた医者も驚く生きる意志

自分史の消したい個所を子に見られ

この墓へやがて入るか花活ける

お酒好きおはぎケーキはもつと好き

勿体ない勿体ないで持ち腐れ

鳥取市 有 沢 せつ子

下手も良い運動会のアナウンス

流行を着て人さまの真似をする

こちらから誘ったお茶をおごられる

深呼吸二度し柳誌の封を切る

手の本がばさつと落ちてもう寝よう

まだ望む夢があるから走り抜く

鳥取市 近藤佳子

待たされることも暮しの彩のうち
彼岸花ゆれるあの日を呼ぶように
出来るだけ恩返ししてくたばろう
傘寿来たとして前向きに生きるのみ
老けたもんだとお互いに思ってる

鳥取市 土橋はるお

感動は個性ゆたかにしておこう
スリッパで孫がひたひた庭歩く
素人は要らぬ所に出すちから
あきらめも肝心だろう男なら
一か八か歳考えず引き受ける

鳥取市 土橋睦子

曼珠沙華 一直線に群れて咲く
時間待ち駅のそば屋も忙がしい
露草のはかない命活けてやる
福耳の割に財布は何時中空
若者は危険なことが好きですぬ

鳥取市 録沢風花

選挙戦残暑ますます熱くする
浦島になった気分の里帰り
人が逝く暑さ寒さを選べない
耳澄ます風が運んだまつり笛
夕立に哭いてるような彼岸花

鳥取市 杉本孝男

正確な時計お守りに手がかかる
円と株わが血糖値乱高下
わが家でも地震セーフの判定値
足音でわかるわが家の旦那様
秋雨に健気コスモス耐えて咲き

鳥取市 奥谷彩子

母の海風いで静かに聞き上手
傷ついた子の帰り待つ父の城
バラの棘混じる勝者への花束
エリートは出世最短距離走る
行き暮れて一人芝居の幕を引く

鳥取市 山本益子

威張りたい男のセリフ終わらない
Uターン故郷の風抱きしめる
原爆ドーム残す話題に世界の目
草むらの虫声寂し通夜の灯よ
スマイルの人生歩む掟持つ

鳥取市 倉益一瑤

鳥取がふくらんでくる傘踊り
ふる里の荷は亀虫もつれてくる
おまつりの好きな男の孤独癖
泣き虫の娘よ脱皮しましたか
墓参り憂き世の埃ふり落とす

鳥取市 西村 黙光

鼻ヒゲを伸ばすと元氣湧いてくる
元氣になる源は酒だよ異性だよ
お医者より酒屋の方が元氣出る
マイク持つと自然に元氣湧いてくる
何よりも元氣な源は陶冶の詩

鳥取市 福田 登美

美しいおじぎに和む秋の風
幸せを上手に拾う歳になる
まるい背も絵になる老いの割ぼう着
忍に耐え生きる女の孤独感
まだ生きる欲が弱音を吐かせない

鳥取市 永原 昌鼓

鑑定に出すかガラクタたんとある
夏の夜はお化け屋敷でデートする
行き先はどう生きようと同じとこ
いつの世も輪の中心に慈母がいる
百均でする散財はしれている

鳥取市 加藤 茶人

いたずらもそうかそうかですむ美人
本当の愛が別れてから解る
子のために死ねますかふと死を思う
涙には勝てぬ男の性恨む
ああこれが離婚届けか天に唾

鳥取市 近藤 春恵

川柳の旅路が続く老いを生き
婦唱夫随だから続いた金婚譜
極楽へ楽々行ける善を積む
修羅の海男をためす風よ吹け
被災地の家族へぬくい風よ吹け

鳥取市 夏目 一粹

いい人と人が良いのは大違い
ブライドをそつと仏間に置いて出る
あの恥を懐かしがっている齡
ときどきはポストを変えて運だめし
肩に来たトンボといのち通わせる

鳥取市 岸本 宏章

平成の刺客鳴り物入りで来る
汗知らぬ金は財布に落ち着かぬ
牛の胃を借りて行きたいバイキング
バーゲンの元の値段が迷わせる
耐え忍ぶことのない子がすぐキレル

鳥取市 岸本 孝子

老いの知恵いよいよ出番三世代
一人娘に売約済と貼っておく
真つさらな陽が昇つて寝ておれぬ
若いママおしめ洗わず子を育て
夕立がきれいに洗ううさぎ小屋

鳥取市 富山 檳榔樹

鳥取市 塔 寛子

ゼロ発進 光と影を背負いゆく
姑の世話忍んで笑顔日が暮れる

万札も崩せばすぐに空財布

黒幕が居るとは知らずお人好し

大きな笑いきつと陽気なお人柄

鳥取市 吉田 弘子

お婆さんすぐ出したがる助け舟

間口より奥行き秘める人が好き

火に油注ぐ覚悟の口答え

国語力低下メールのせいにする

真実の愛 幼子は見抜いてる

鳥取市 美田 旋風

ゲームから戦争好きになる子供

反対論認めぬ怖い風が吹く

平和過ぎ信長流に憧れる

退院をした妻口だけは達者

カレンダーを教えてくれる庭の花

鳥取市 平尾 菜美

スパイスを添えておいしいマイペース

屋上を揺らす菜っぱの変り種

レットルを貼られ女が胡座かく

叶わない愛が税へ登りつめ

冬ごもりするバーゲンの敲き台

老師見舞う明日のワタシかまさかまさか(かるとい認知症の老師を見舞う)

やがて来るという試写会を見た思い

プライドが家人を遠くしてるわよ

独り身の首相案ずる老師であり

また来ます まーるく生きて待つててね

鳥取市 宮脇 道子

命日に野ボタンの花二輪咲き

若者は軽く足くみ腕を組む

診察日 馴染みの顔が消えていた

たくましく鳴いた蟬たち共に消え

わくわくで開けた通販身に合わず

鳥取市 林 露杖

零れ萩星の名残りを鏤める

億光年星の遠さに思索絶え

振り向いて己が足跡ついてない

遺言を書く決心が未だつかぬ

世に遺す何ぞ無いかと考える

鳥取市 植田 一京

盆踊り影絵のように目に残り

方言にかえり母校の同窓会

自由とは案外つらいものど知り

感動を忘れ茶漬を食べている

五七五言いたい欲がたんとあり

鳥取市 田村 邦昭

娘に貰うネクタイが派手妻の妬げ

珍しく飲めない酒を愚痴が飲み

鏡台にむかい女の敵みつけ

成しとげた男の一番いい笑顔

凡人でやっぱり楽な道選ぶ

鳥取市 中村 金祥

一葉も諭吉も家出したまんま

胃の中のお化けと和解しています

白黒をはつきりさせて青くなる

茜雲カラス談義がかましい

困ったら独楽を回せば見えてくる

鳥取市 田中 瞳子

軸足が揺れるずっしり母の愛

打ち水が大事な人を待っている

父さんは百面相で髭を剃る

二度寝する夢の続きが見たいから

コンニャクを食べてお腹を掃除する

鳥取市 西川 和子

目的へやっと峠に辿り着く

ライバルはいっつも先に着地する

主婦の城まだ呆けてなどいられない

城の客増えて笑いが止まらない

菜園の半分ほどに花を植え

鳥取市 福島 庸二

野や山を染める彩り秋が好き

鈴虫の声が沁み入る秋の宵

漁り火の放つパワーに癒される

さわやかな気持ち広めるありがとう

友に会う、うさぎ追いのふるさとへ

鳥取市 徳田 ひろこ

山脈が立ちほだかつて笑えない

日替りの喜劇は続き城の中

走らねば褪せてゆくだけバラの赤

転ぶたび友のエールがすぐ届く

ひと眠りパズル途端に解けてくる

鳥取市 福西 茶子

良妻を演じて鬱を病んでいる

悪妻宣言 孤独を覚悟して

バラの棘男の骨を抜いてゆく

にこにこ見守っている昼の月

句読点忘れたままの人生譚

鳥取市 春木 圭一郎

前向きになれば良いこと起きてくる

欲しいもの優先順位つけてみる

手抜きして見ても結果は変わらない

多忙でも上手に休むコツつかむ

何もせず怠けその分頑張れる

倉吉市 牧野芳光

にんげんの当り外れを知る余生
外食より高い自炊に意地を張る
人様に見せる絵でない絵を描く
大過なく終わるのはちと難しい
階段の終る辺りでよく転ぶ

倉吉市 山中康子

たけなわの秋をむさほり落下傘
一粒もやがて柱となる宝
ライバルは私ルーズな日が続く
明星が僕を上げます深夜便
イメージを追い出す女のダイエツト

倉吉市 野口節子

静かなる水面に溺れそうになる
少子化の波に列島攫われる
弊害もあります舌のすべり過ぎ
犬もうんざり夫婦げんかに目を背け
年金で白のおまんま食べている

倉吉市 米田幸子

連日の日照りに脳も干からびる
根限り手塩に掛けた子がぐれる
薫るまで待つて下さい姥桜
ゴルフ場の芝が加勢をしてくれた
お情けは受けぬ自分の足で立つ

倉吉市 松本よしえ

雲行きの怪しいときは動かない
赤とんぼ連れて来ましたうろこ雲
理屈抜き好きと言うからしょうがない
理屈では勝ったが誰もついて来ん
投げ返す子の直球にうろたえる

倉吉市 山本玲子

金婚式阿吽で生きた共白髪
乗り心地やっぱいいね無料バス
Iターン土着覚悟の村祭り
秋風の煽てに乗って舞う落ち葉
細切れにして振り袖のリサイクル

倉吉市 最上和枝

ローン未だ済まぬお城に雨が漏る
口紅が派手にあの娘も花開く
走ろうと尺取虫の夢続く
まごの手を器用に使いつぼさがす
忠魂碑 兄も万歳叫んだか

倉吉市 猪川由美子

小泉劇場 多士済々が踊らされ
貧しても貪にはならぬブライドだ
公務と静養 妃の兼合いは難しい
二十四時間マラソン勇氣与えて男上げ
味しめてウォームピズへするそうだ

米子市 政岡 日枝子

気の合わぬ連弾ピアノノ疲れだす
危なくて女の隣にはゆかぬ
ほどほどの家で大声まで出さず
晴雨兼用傘と小さな旅に出る
幕を引く日を考えて物を捨て

米子市 林 瑞枝

深呼吸 朝日に味方して貰う
貧乏をバネにし優し眸で生きる
お人柄の匂う確かな影といふ
ときめきが未だあり新規巻き直し
おおらかな付録求めている余生

米子市 青戸 田鶴

雲と共に歩く木道果てしない
超割を買い弟に逢いに行く
瘦身の夫かばって秋になる
好奇心だけは衰えみせてない
野仏について離れぬ赤とんぼ

米子市 澤田 千春

伸びちぢみしながら影はユーモアだ
雨だれにいつか話そう広い海
根性を素足にもらう畑仕事
厨には吉報つめた壺がある
少々の事に嘆く空がある

米子市 白根 ふみ

お隣の犬がストレス打ち明ける
秋風に凭れるものが軽くなる
敬老の日は催し物で疲れる日
節約も贅沢しても批判され
これ位の雨風ならば有り難い

米子市 野坂 なみ

似たような暮し中流バンバンザイ
政治家の手の口口似ているな
人も仏も香りを愛でていやされる
微笑みのコンクールですかお地藏さん
七転び笑って話すおばあちゃん

米子市 光井 玲子

大波を乗り越えやつと幸を抱く
お見合で婿の器に一目惚れ
合掌づくり匠の技に感激す
恩に着る事ばかりだな長い道
娘の運転こころのすみで手を合わす

米子市 中井 ゆき

台風が逃げてそれから彼岸花
がまんした神も地球も限界だ
がんばれよ後がないよと独り言
想い出の尻っばにぎって放さない
泥水も時の流れで澄むだらう

鳥取県 新家 完司

男とは不潔で臭いものである
靴の底だんだん減って僕の顔
五千円ないと酒場で笑えない
二日酔い吐き気に増して自己嫌悪
遠くからじつと見ているお月さま

鳥取県 深田 俱久

原油高 家庭サービス切りつめる
ニユース 追う 魔女か醜女かカトリーナ
食育をテレビで学び模範ママ
愛の鞭使い方では停職に
神様のおさがり 戴き門を出る

鳥取県 竹信 照彦

台風が来ても葬式延期せず
赤潮の海も台風浄化する
胡瓜枯れゴーヤが茂る 胡瓜 糊
ほろ苦いゴーヤの味で飯二杯
人ごみの中で私も塵になる

鳥取県 太田 幸枝

魂を抜かれたような認知症
運を天にまかせて余生独り生き
旅に出て財布も足も軽くなる
痛い目にあつて人間みがかれる
指輪など無いが愛情続いている

鳥取県 佐伯 やえ

すず虫が無口な子らをしゃべらせる
落ちこぼれ拾う網目を小そうする
草刈りの唄に夕陽がとけていく
最初から鼻は低いといつておく
脇役に徹し笑顔を忘れない

鳥取県 谷口 次男

仇討ちと孔雀に化けて敵さがす
選挙では水と油が連れになる
涙腺が詰まった国のうす情け
人間の 大恩人は 緑の葉
クラシック聴いて葉っぱが踊り出す

鳥取県 盛田 夢路

夏ばてか脳の水車が軋む音
年金を引き出すだけの預金帳
歯車が狂った時もある夫婦
人道に非情ぬけ道多すぎる
台風が残した柿を熊が喰う

鳥取県 澤 裕子

カルチャーで妻がきらきら跳んでいる
遠い日の感動あれはまぼろしか
形には見えぬが心込めている
形式にこだわり前へ進まない
お百度を踏んでも老いは忍び寄る

鳥取県 山下 節子

鳥取県 蔵本 悦子

とつさには父より母が頼もしい
浴衣着て阿呆になります阿波踊り
票がため あんねこんねと指を折る

議事堂のお化けは足が付いている
風邪だよと笑った友のまさかの計

鳥取県 山宮 愛恵

好きな花ひとりの卓の宴なり
すんなりと溶けてハミングしてしま
う
いい事をみた日善いことしたくなる
パクツと蚊食べたメダカがおそろしい
さりが無い疑いだから切り捨てる

鳥取県 国森 武子

叔母よりも早く仏になりし甥
夢にだに吾より先に仏とは
妻もなく逝けるあの子は忘れ得ず
四十の声もきかずに仏とは
残されし母の心も思わずや

鳥取県 山本 正光

国民のためにと候補口ぐせだ
無駄議員いないか投票かんがえる
腹割って話せる友のいる安堵
人生を飾る明日へのみちを踏む
八十路坂登ってやっとな脱ぐ鐘

先つちよまで咲いてひまわり夏惜しむ
通り抜けおしゃれな秋に出来ません
今が旬 茄子も胡瓜も私も
勉強は苦手だ今日も酒を飲む
家出などないよ必死の蟬時雨

鳥取県 下田 茂登子

死ぬまでは破れぬ殻が一つあり
お化けより恐い女が寄って来た
どの哀しみが一番なのか頭抱く
言うことが二転三転エリートも
婆ちゃんを相手に喋る詐欺の口

鳥取県 鳥羽 玲子

付き添い食味がいいねと肥えてゆく
毎日のごみ同じほど出る不思議
こっそりと貯めてた金にすぐわれる
涙腺のゆるみに老いを知らされる
すぐ眠ることも自慢のひとつです

松江市 銭山 昌枝

ひきずつた過去を断ち切る美容院
アルバムに斑な記憶甦る
お互いに腹を割ったら妻は黒
予想がピタリわたしはきつと霊能者
玄関に平山郁夫と居るらくだ

松江市 安食友子

どっかりと守護神肩に載せている
雑草に本音たっぷり吐いてやる
灯籠流しひとつ逆らう亡夫かいな
据え膳も微妙な味に馴れちゃった
ぎくぎくと鳴子こけしもご老体

松江市 三島 松 丘

吉凶はどうあれ朝の歯をみがく
大切にしよう賞罰ない履歴
没句でも生命があつて捨てられぬ
もう誰も乗らぬ二人の縄電車
先生のカバン漫画も入れてある

松江市 川 本 畔

親族の葉裏が騒ぐ父の死後
お小言が多く迷つてしまいます
一晚泣いて明日はさらさらするつもり
布団干し叩けば亡父の声がする
ときどき君は遠い目をするところがある

松江市 松 本 知恵子

一族の似た顔揃う祭りの夜
お土産を詰めた電車がひた走る
危ないなあメールばかりの白い指
さらさらと点滴落ちる回復期
馴れ合いの危ない橋が増えてゆく

松江市 小川 注湖

集合時間 番茶の香り迎ええられ
玄関を出たら競争始まった
水平線遠く思うは拉致の声
賑やかに夢中になった阿波踊り
観覧車 星の近くで回転す

松江市 佐野木 みえ

のら猫が皿のカステラ持つて逃げ
遠雷に慌てて散つた立ち話
引出しの隅にしまった小さな恋
トラウマになってこの橋渡られぬ
おろち太鼓Uターン待つ秋祭り

出雲市 園 山 多賀子

目立たない善意こぼれる萩の径
煩惱を消す火消し壺蓋がない
森のざわめき疑い深くする
人指しの指が一人を処刑する
及び腰犬の遠吠え聞いている

出雲市 城 多喜

太陽は真上わたしの影を呑む
橋杭にわたしの嘘がひっかかる
てのひらにフフと書いてただひとり
幸せをぼろりと落とす手のひらだ
年ばかり重ね大人になり切れず

出雲市 富田 蘭水

ぐつすりとは長命くれたこの布団
ラブレターますます冴える午前二時
辞典ひくすらすら愛の文字浮かぶ
台風の進路にたつと南無あみだ
コスモスが揺れる昔を思い出す

出雲市 多久和 敬子

汗流し育てた野菜裏切らぬ
募金箱知らんふりして通り過ぎ
夫婦坂やと二人の歩が揃い
誕生日祝う二人の宿浴衣
ネジ巻いてゆつくり登る六十路坂

出雲市 小玉 満江

ゆつたりと老後を暮らすプロگرام
手動ドアうつかり頭をコツツンコ
お浄土へ行つても川柳作りする
行儀良く一列横隊足湯かな
八十の手習い楽し舞扇

出雲市 久谷 まこと

風凪いで急に高まる虫の声
衣替え歳です少し早くなる
履き馴れた靴も定年一休み
肩書きが取れたら凝りも無くなつて
古くてもやはり本物捨て難い

出雲市 伊藤 玲子

コスモスに逢いたくなくて遠まわり
寄り添って凸凹道もなんのその
家族みな渡り切るのを見とどける
消しゴムに迷ったことを見抜かれる
わたくしを守ってくれたシュレツダー

出雲市 吉岡 きみえ

夕焼けがきれいなお祈りしたくなる
良心に恥じぬ一日よくねむる
いい音だうれしい便り持つてくる
嘘ひとつつけず不器用は生れつき
半分はあきらめた夢抱いている

出雲市 小豆澤 歌子

汗拭いて電車も眠る車庫の風
遠い糸たぐりよせてる手毬唄
思い切り炎えて焦がした遠花火
私を絞ると灰汁がほとり出る
掻き混ぜて見てもやっぱりは白

出雲市 多々納 テル子

満月が欠けてくようなこの命
ひとすじに歩んだ夫の足の裏
ひたすらに我が道を行く亀の意地
肩書きがとれてぶらぶらする孤独
見回すと皆年下のボランティア

出雲市 持田多輝子

出雲市 小白金 房子

ジャスマインの香りでほんのりガードする

冗談で人の痛みをついてくる

歳月の流れ生命のもろさ知る

玉砂利を踏めば無欲な音になる

もう二度ともどれぬ坂をふり返る

出雲市 青山久子

舞い降りた場所にしつかり根をはやす

わたくしをドアに大きく書いておく

おごとにユーモアの具をまぜておく

舞い上がる心鎮めるかき氷

何も彼もおぼろになつた乱れ箱

出雲市 佐藤治代

継ぎ足しの命支える誕生日

快適とまでは言えぬがマイホーム

安かつた事にしてある高い靴

美しく写つた写真だけもらう

鏡見てがっかり紅を足してみる

出雲市 森茂美

常識を連れて歩けば肩が凝る

煌煌と電気をつけた敗れた夜

戦中派裏も表もまだ見える

下北の空は晴れてた敗戦日

試掘した日もあつたつけアスベスト

神の森夜明けの冷気手にうける

豆腐屋の灯りが動く水の音

幸せを運ぶポストの顔を拭く

棚経の和尚忙しせみしぐれ

六十年嫁して無病で来たご恩

雲南市 毛利幸

ストレスを溜めて逃げ場のない世界

さやさやと衣擦れ妙に艶がある

涼風が浴衣の裾を絡ませる

百均で便利な物を買ひ漁る

一瞬の逆転ファンどよめかす

島根県 榊原秀子

絵手紙の見舞いがとどく晴れた朝

お見舞のブドウの粒にある情け

友だちに子にはげまされ髪を梳く

梨の箱情けいっぱい詰めてくる

仏前へ初ものですと梨二つ

島根県 伊藤寿美

直ぐ砂に潜るわたしの貝柱

急に小さくなつた太鼓に耳すます

コスモスの海ではぐれたのはわたし

追憶の海から響く亡夫の笛

美しい言葉陛下の鼻濁音

岡山市 井上 柳五郎

真庭市 国米 きくゑ

しらしらし刺客などとは否定する
凶星だとわかる顔色ほら変る

もう時代遅れと悟る老いわびし

ウォームビズ売り上げ増に協力か

曾孫まで四代祝う敬老日

倉敷市 井上 富子

盃の底に沈めている反旗

民衆の中に潜った手配犯

外堀は花で埋める藁の城

ローンという砂上の城はシャンデリア

熱い手紙で丸いポストが赤くなり

倉敷市 撰 喜子

愛想いい嫁が家風を塗りかえる

悪役にもなれず善人ぶっている

遍路旅終え仏心を持ち帰る

甚五郎の腕前残る東照宮

メールじゃない封書で届く督促状

真庭市 福嶋 智恵子

はみ出した絵手紙届き母達者

議員様 田舎のポスト不安です

郵便は都会と過疎のせめぎ合い

クールビズ デパート景気押し上げる

空高く友誘い合い芋煮会

尽しても過ぎること無い介護の手

お彼岸というのに残暑厳しすぎ

夕陽燦々老いの胸熱くなる

ありがとさん夕日を拝む今日も無事

趣味多彩みんな親しくみな他人

美作市 小林 妻子

古里の僅かが送りたい老母

戦後史へ刻んだ野晒しのいのち

入魂のノミ研いでいる塵まみれ

賑やかに皆出て行つたから起きる

花咲いて散つて狂わぬ予定表

美作市 大石 あすなろ

雑念とゆつくり遊ぶ午後のお茶

ブレンドをすればいい案浮ぶかも

ちよこちよこと夫が喧嘩ふっかける

シルバリーの椅子に座つたことがない

洒れてゆく詩囊にびっくり水をやる

美作市 山本 玉恵

豪邸を訪えば城主のクールビズ

シルバーと言われふり向く影法師

逆転もあつて人生捨てがたし

力んでも敵は数段上です

すぐ踊る癖がまた出る三枚目

美作市 福原悦子

雑草を抜く心地よい朝の汗
横車押してる夫の乱気流
鍵穴を覗いて見たら喜劇です
三猿を決めて明るい老母です
農を継ぐ汗が染み込む土と生き

竹原市 森井菁居

買うて来た牡丹を植えて春を待つ
雑音がする補聴器をもてあます
凡人のひとり悩みを持てあます
抹香の中に残っていた昔
頼られる内が花だと思ふべし

竹原市 石原淑子

朝露に光る桔梗の息づかい
りんどうが愛した母を偲び咲く
庭の木も金魚も高齢化
虫籠の鈴虫恋をしています
飯粒のひとつひとつにある御恩

竹原市 時広一路

物忘れついでに歳も忘れたい
明日だけは当らなくてもいい予報
砂となら直ぐに仲良くなる素足
疲れ取る薬一合有れば良い
我が口で味確かめていま一人

竹原市 岩本笑子

真っ直ぐになれない私エビフライ
ひっそりと紫 秋を深くする
他人事でない台風のと真ん中
昔昔 運動会の歌があり
彼岸花のコーラス豊作約束す

竹原市 正畑半覚

満奇洞チンパンジーになりすます
天井と決して喧嘩せぬように
地の底で頭を冷やす肝冷やす
訪ねれば一億年の鬼御殿
人間はにんげんがいい洞を出る

美祿市 安平次弘道

紙一重にしては喜劇だと思ふ
不自由はせぬが自由な金がない
返り血は覚悟故郷の駅に立ち
残尿感 だから悪人にはなれぬ
具体的になるとわたしが困ります

唐津市 久保正剣

敵の目をくらます刺客送り込む
ヨンさまの咳が女を眠らせぬ
味噌汁にミニ菜園のネギが浮く
議事堂に過労死はない鼻提灯
炎えて翔ぶ恋が女を蝶にする

唐津市 宗 水笑

収穫はカラスにくれる分を引き
雑草と古いの軍手の根くらべ
降れば豪雨優しい雨が懐かしい
下り坂妻が頼りの歳となる
神仏が仲よく在わす祖母の部屋

唐津市 井上勝視

考えるために時どき立ち止まる
世間体と別の顔持つ深い淵
手抜きした菊にズボラを叱られる
武装解除泣いて削った菊の紋
一日の方便流す歯を磨く

唐津市 坂本蜂朗

^{つくは}蹲いの傍に品良く住む蛙
あれこれがあつて夫婦の守備範囲
子が巢立ち妻あれこれと指図する
児に還る母にこにことどちら様
一升酒呷り三途の川渡る

唐津市 丸晴翠

今朝の床体調チエツクBクラス
怒られず何度も聞ける辞書が好き
財産はない仲良くと遺言書
前触れが欲しい地震国に住み
鏡にもリセットボタン欲しい老い

唐津市 樋口輝夫

金婚と言うても息子知らぬふり
ささやかに二人で祝う金婚日
捨てられぬ母が持参の桐タンス
子沢山きつと誰かが看てくれる
あの人もこの人も駄目嫁き遅れ

唐津市 山口高明

親権はどうあれ子供母につき
官庁のお方大抵胃拡張
宮司では食えず二足の草鞋はく
お値段は気にもしません化粧品
おとこと女 敬語使つてまだ他人

熊本市 永田俊子

玄関で用意の言葉ねり直す
ふだん着が似合うよと言う猫じゃらし
完熟のポスト夢みる青い柿
あとずさり覚えて気持楽になり
年寄りにそこまでと言う仕切り線

熊本県 岩切康子

外灯を虹囿んでる眼の疲れ
週に二件役場から来たアンケート
花火大会 月は隠れて遠慮する
前日になると買はず旅仕度
一つ為せば他は忘れてる情けなさ

熊本県 高野宵草

汗ダクにシャワーで暮れたよきひと日

祈ることないから神に感謝する

まず未練すてて動いた部屋整理

身構えたチャイムは回覧板でした

不遜にも命に貴賤つけ戦

東かがわ市 川崎 ひかり

九分九厘あと一厘がイレギュラー

エンマ様いかほどですか袖の下

温情も非情さも持つ自然界

銭勘定している背中隙だらけ

予想よりはるかに地球病んでいる

東かがわ市 原 賢

無言から無視へと変わる恐ろしさ

口下手の本音に火の粉降りかかる

生きざまの裏も吐き出すコップ酒

生きていて良かったなあと茶をすする

秋の使者豊かな胸に赤い羽根

東かがわ市 神保 坊太郎

手間ひまをかけて盆栽撓めころし

まん中は邪魔だと猫も心得る

長男が逝って二男の肩がこり

妊って女は遠い山を見る

居据った昭和脳から出てゆかぬ

東かがわ市 伊勢 八重子

まだ若さあるのか時に血が騒ぐ

偉そうに言うても一寸先は闇

名も知らぬ誰かを救う献血者

触れ合って恋して人は丸くなる

サラサラと命を守る血の流れ

東かがわ市 清川 玲子

近すぎて雑音ばかり聞かされる

気分新たに時の流れに添うて生き

越中のせせらぎ胡弓風の盆

面倒は聞き流してる老いの耳

時により鬼と仏を使いわけ

東かがわ市 成重 放任

針でさすような世間の目が怖い

盆休みやすみにならぬ水管理

乱気流南無阿弥陀仏空の旅

完熟の太陽の味ひとかぶり

同居する庭にスズ虫くつわ虫

東かがわ市 池内 かおり

苦勞する男を陰で支えたい

日本語をどんどん捨てて何とする

真っ先に朝焼空を拝む母

大切なところでセリフ出て来ない

私を捨てるだなんてとんでもない

高知市 小川 てるみ

人知れず咲いて零れる草の種
不美人が諸に写った免許証
まだ運はついてる無料旅行券
度忘れを助けてもらう日記帳
合併はしてもやっぱり過疎は過疎

高知県 赤川 菊野

狐の窓へ淋しくないかと秋の風
分婉の痛みを知らぬ女が増え
プライドがあるから凜と生きられる
流れ星あれは恩師かまぼろしか
青春を偲べば軍歌と日の丸と

高知県 小澤 幸泉

時々猫が独居の相手する
空白を残したままに今日も過ぎ
生きることを教えてくれた不眠症
今日ひと日あと一日と生きている
時々疼く語れぬ青春歌

松山市 古手川 光

百万ドルの夜景見ながら大ジョッキ
タイガース勝った日ビール倍美味い
ヌルヌルの食べ物どれも栄養価
手術ミスあるかも知れぬ承諾書
他所者へ見えない線が引いてある

松山市 丹下 美津子

俺の血を嗣いだどの子も宝もの
姑の一言 嫁の心に火をつける
強がりも青菜に塩の二日酔い
何人も老いは平等やって来る
好物のお萩を下げて母の墓

松山市 高橋 宏臣

自問自答ばかりで秋が黄昏れる
目は口ほどに美しい嘘を言う
蝉時雨親しき人の別れとは
ひとりいて無口になれてくる怖さ
淡々と過ぎる余生という歩幅

松山市 宮尾 みのり

ユニークだった彼に卒業来会えぬ
なるようになるさこの頃よく笑う
鮮やかな女性の上司持つ疲れ
自画像へ母の面影見ってしまう
悟るには速し大きい箱を選ぶ

大洲市 中居 善信

はぐらかす人で真面目に話せない
おお怖や刺客を放つ民主主義
安心へわたしを全部晒けだす
袖引いた人とスイカを食べている
旗色へ動くメダカを責められぬ

西子市 黒田茂代

狭い庭にも訪れる小さい秋
母徳ぶよすが紬の地味を着て
和服脱いだわたし存在感がない
夕映えがデザート海のレストラン
おかめでも心美人でありたしと

弘前市 福士慕情

揚げ花火雨天決行するらしい
指間からポタポタ運が零する
理想論遠吠えとなる多数決
人間の足跡がある神の山
津軽残照やがて墨絵の冬景色

弘前市 高橋岳水

デジタルとアナログが住む一つ屋根
付加価値をつける辞典が手離せぬ
父母逝つてからの敷居が高くなる
涙腺を一気に攻めて来る哀歌
グルメには遠く凡夫の焼く秋刀魚

弘前市 今 愁 女

カトリーナ魔女が持ち去る何もかも
星条旗テロと災害二刀流
収穫の秋を台風待ち構え
台風の角度でりんご落ちず済み
青空にルビーの林檎たわわなり

弘前市 高瀬霜石

久々に行けば最賃の店がない
手切れ金渡したつもり金を貸す
お役所にまだまだ巣食うハリネズミ
裏通り粹と不粹が同居する
世渡りの下手な靴ほどすりきれる

弘前市 櫻庭順風

日本一のおふじと命名する品種
山小屋でふじにその日を賭けている
高接ぎと試行錯誤の五六年
つる割れに頭悩ます五六年
りんごより我を導くものはなし

弘前市 相馬銀波

風動く票の劇場九 一一
この先も余波に備える政治劇
十字路に出ると自分を確かめる
再会の名前が出ない茶を啜る
雑踏の中で気になる独りごと

弘前市 須郷井蛙

モンゴルの相撲に疲れる国技館
絵日記をいっぱいにして里帰り
屋台酒たまに心を虫干し
下手でも手書きの文字の暖かさ
二次会の会費は妻が出し渋る

弘前市 岡本花匠

十和田市 阿部進

晩秋の彩にへつらう迷い筆
分別の萩の媚態にあざむかれ
我が弱み影に知られて操舵され
追風読み人生賭けた時が花
孫と遊ぶ紙風船がよみがえる

弘前市 宮崎ヒサ子

台風と聞けば戦くりんごたち
台風一過何て優しい空の青
目を凝らす庭にひよっこり赤とんぼ
明け方まで鳴くすず虫や秋深む
向日葵の首が重そう切つてやる

黒石市 相馬一花

女房に誓いを立てる浮気癖
被り方次第で美女にする帽子
店頭で色目を使う見切り品
まだ米寿再々婚に動く耳
帯を解く時は聖女の彩になる

砂川市 大橋政良

言い訳の言葉まごまごしてしまふ
丸木橋噛みついてくる水の牙
一跨ぎするせせらぎに雑魚群れる
餌づけした雀と遊ぶ日向ぼっこ
足腰の衰えくすり湯につかる

いただいたもので仏と夕ごはん
珠算をあまはもぐつてはじいてる
少しある余白に夢を描きます
日帰りの旅に持たせる保険証
お互いに好きですという古希夫婦

青森県 小寺花峯

心配の種があるから今日を生き
自画像は描けぬビエロの顔となる
完熟のトマトハウスで泣き叫ぶ
胃カメラを玩ぶのは酒の影
飲んで呑んでのんで頭に星が舞う

佐倉市 岡井やすお

アジアでの孤立が一番怖いのよ
反郵政削いでは削いで削ぎ落とし
難敵を倒した刺客に豪華椅子
暴力と愛の鞭とは裏表
七五三プールヘジムへ親の夢

東京都 清原悦子

日替わりの景色散歩のフルコース
もったいない海に降つてる水不足
幸せな人から聞いた愚痴ひとつ
もう誰も居ない地球がいつか来る
黒髪の良さこの世から消えかけて

東京都 岸 野 あやめ

難題ぞくぞく誰が総理になろうとも

綱渡りしているような家計です

たかが女されど女の閻魔帳

大味な魚に馴れて首都に住み

寝言には責任問わぬ老夫婦

東京都 小 川 賀世子

時どきの風に乗り換え明日へ漕ぐ

駅を出て男は父の貌になり

孫を抱く男の貌は見たくない

気休めかも防災品に凝ってます

人間のエゴに止まらぬ温暖化

武蔵野市 亀 井 円 女

ホリエモンいつか何かをきつとやる

字の書ける右手をそつと撫でてやる

憧れは粹で心の深い方

お蔭さま食べて眠れて笑えます

短か世の余りに哀れ蟬しぐれ

八王子市 播 本 充 子

撮りますよ みんな一番いい顔で

趣味の会ランチメニユーを謳歌する

エクセルになってパソコン過熱する

自己チューがせつせとメール打ってくる

手入れた芝生に猫の落とし物

さいたま市 星 野 育 子

いい球が来たら振りますチャンス待ち

辛さには慣れ優しさに弱くなる

ジョーカーは引くのクジは当たらない

遺言はありがとうだけ書いておく

待ち人に花一輪を無駄にする

日高市 根 岸 方 子

蹟きをかかえたままで秋むかえ

自画像にあなたの好み少し入れ

自画像は希望を込めた顔にする

年寄と見たかセールス再度来る

松茸の土瓶蒸しから本音もれ

横浜市 菊 地 政 勝

割り込みの背中に刺さる冷たい目

間違つて駆け込む女性専用車

美人ではないが仕草に魅力ある

燃えるものあるからおんな髪を染め

俄には信じられないもてたこと

横浜市 小 野 旬多留

酒トロ口転んだ傷を朝に知る

人妻の言葉気にする秋初め

そんな事いつたいわぬと仲が良い

六ヶ国協議日本はおミソです

食べ残しラップに包み妻戻る

静岡市 安本 晃 授

愛知県 早川 盛夫

出る幕はまだまだあるさサスペンス

秋めくや柿は色づき人は老い

落ちぶれた天狗今日から鬼になる

妻の画布 素直に虹を描いて秋

老化した私にあった誤字誤脱

静岡県 蘭田 摸 杏

海荒れて番屋に憩う猛者の顔

産声を聞いて産婦のいい笑顔

陽やけ肌気にせず娘の健康美

保険証出がけに探す認知症

行く夏をピキニの尻がよく遊ぶ

富山市 島 ひかる

明日帰る祖母パロディーの子守り唄

神様のいじわる内に出来ぬ孫

負うた子にやんわり言われ気付く親

臍の緒の箱に書かれた出生地

明日生きたため健康を考える

可児市 板山 まみ子

モラルなし未婚の母の生きる道

デキシーの町に弱点溢れだし

お願いと頑張りますの選挙戦

演説の本音見つける選挙戦

気心の知れたおしゃべり湧く句会

逆転の構想を練る縄のれん

きっかけはビールの泡を注いでから

人生の所どころにある汚点

カート押す夫の愛を信じよう

人混みは嫌い万博へは行かぬ

京都市 高島 啓子

雨を呼んだか国宝の募股(當麻寺)

晩年は幸せ自画像のムンク(ムンク美術館)

作品を模写して力量が解り

雨の日の視力検査で損をする

アナログでこぼこ道を行く余生

長岡京市 山田 葉子

傾いてからも変わらぬあたたかさ

ためらつてからのイエスに知らんぶり

大空のあなたに届け鈴を振る

振り出しに戻る勇氣は残しとく

宇宙のかなた待つてくれる星がある

亀岡市 井上 森生

子孫繁栄の信念欠いたマニフェスト

子宝の信奉がある国づくり

大いなる黒部に宿る神の水(立山黒部の旅 3句)

立山は雨でも神が在るような

湧き水のコーヒー黒部の山の味

大津市 中 宗 明

ハイテクの時代に生きる難かしさ

ハイテクを駆使して生きる孫の代だ

八十路来て夏バテ防ぎ午睡する

恋破れ父母に当てつけ家出する

ちっぽけなポツケに詰める宇宙夢

大阪市 西 出 楓 楽

譲れぬ線引いてしつかり背を伸ばす

そうめんで午後の英気は養えぬ

トンネルは匍匐前進して抜ける

友達の数は大いに誇るべし

ジーパンの破れにお金かけてある

大阪市 川 原 章 久

秋風に箸の動きが早くなる

母と娘のチイチイパツパ長電話

ジュウジュウと焼ける秋刀魚のうなり声

茶髪の娘アレで案外親思い

一枚に潜む秘密が日めくりに

大阪市 古今堂 蕉 子

開けごま金庫の鍵は妻が持つ

化けの皮仰山持つて生きてはる

一点のくもりない空不安増す

徒競走ころんだ友を待つ孫で

人間は化けると豆狸教えられ

大阪市 前 たもつ

時どきは影はあるかと後ろ向く

早世の母を語らぬ墓参り

天災は貧乏人を狙い打つ

朝夕の散歩に飽きぬ土の道

所かまわず居眠りできる歳になり

大阪市 小 谷 集 一

裏話尾ひれをつけて歩きだす

ご無沙汰を褒めてくれてる聴診器

断酒の刑妻が主文を読み上げる

下車駅で丁度仕上がるメイキャップ

面影が父に似てきた古稀の顔

大阪市 鶴 田 遠 野

泳げぬが飛び込んでみる恋の海

息子との酒はいつでも二日酔い

ジャスマンティー香る女の昼下がり

団塊の世代一掃する世間

さわやかな別離に少し残る熱

大阪市 川 端 一 歩

アメリカカの恥部を見ましたハリケーン

清貧は父の遺産で捨てられず

歳月が事の次第を解き明かす

九条の会に火がつく風の向き

テレビから下に下への声がする

大阪市 岡 本 久 峰

大阪市 川 久 保 睦 子

歴代の失政赤字積み上げる
小泉の影にチラホラ星条旗
大演習中露が悪夢よびさます
爺チャンが死んじやったのと嬉しそう
民主党お前も二世担ぐのか

大阪市 井 丸 昌 紀

母似だが笑うと妙に父に似て
笑わせてやがて泣かせた寛美さん
マニユアルに笑い方まで書いてある
脳味噌が軋み出したら酒を飲む
父と母軋んだままで仲が良い

大阪市 星 野 きらり

川柳を連れて八十路をエッチラコ
人生のハードルはもう見当たらぬ
ウオーキングそつと囁く小さい秋
おそうめん茹ですぎました宅急便
通販も目を通してるロスタイム

大阪市 伊 藤 博 仁

武蔵の里人氣にかげりほやく店
掛時計止まった宿の暖かみ
割れ目から滲む出で湯に揚羽蝶
多すぎる馳走に孫の手を借りる
久しぶりおへそのごみに目を見張る

ストレスが騒ぎますからお静かに
ニッコリと歯のうく話聞いている
子に残すものなどないと遺書を書く
今日やつと迷い迷うて歯科受診
エリートではないが友の手が温い

大阪市 板 東 倫 子

ああ無情 無意味に人が死に過ぎる
逃げ道を閉ざし刺客を差し向ける
繁栄の巷で心飢えている
親と子の 子と親の愛行き違う
神さまも知らぬふりする自爆テロ

大阪市 熊 代 菜 月

猿でさえモラル守って群れにいる
綻びを縫い合せつつ古希すぎる
人生の日溜りさがし生きてます
一目惚れさせた貴方も既に喜寿
挿鉢で愛の憎しみすりつぶす

大阪市 松 尾 柳 右 子

馬の目にやすらぎがあり誠あり
抗論のどう割引けば正論に
クーラーが汗かいている暑い部屋
優待証地下鉄スイスイありがたや
御先祖へ感謝姉妹の古希祝

大阪市 津 守 なぎさ

新米に手を合わせてる台風禍

シルクロード古代壁画に追うロマン

上高地めぐすジョギング下準備

CMのチワワに挑む調教師

台風にむかつて走るバスツアー

大阪市 津 守 柳 伸

エレベーターない鉄道の人情味

牛シャブと大山牛乳癒し旅

松たけの小振りも愉快土びんむし

川原風呂よしはずはすした三朝橋

この指たかれ元氣印のバスツアー

大阪市 榎 本 日の出

血管にへドロを溜める肉が好き

またひとつ葉増やした誕生日

好き嫌いハッキリ言えて仲が良い

ガラクタの山にうもれて落着ける

生きている証拠苦労も身についた

大阪市 榎 本 舞 夢

太りたい人の悩みも聞いてほしい

夢を追う男の顔は輝いて

もの思い夜のとばりが味方する

悪態をついた心の空しさよ

言いたいチャンスなくして日を重ね

大阪市 西 川 更 紗

ブレーキが効かなくなった物忘れ

厳寒も猛暑もちゃんと食べてます

言いなりの妻の反旗に芯がある

気まぐれに家具を動かし模様替え

柿うれて母の年忌が巡り来る

大阪市 大 川 桃 花

キャリアアウーマンひぐらし聞きにとる休暇

忘れ物の棚で笑っている入歯

仰向けの蟬を助けて今日の善

右往左往してた息子も親の顔

緑がテーマ緑削って地球博

大阪市 奥 村 五 月

なにくそが消えて人生あしんど

歎もてば姿の変る祖父の腰

八十路すぎまだ朝市の元氣者

検査から妻が優しいことを言う

年金と保険で離婚救われる

大阪市 近 藤 正

人からは刺客議員と言われます

なんとなく落ち着きがない休肝日

米軍の仕事ぶり見たカトリーヌ

九条の会が出番を待っている

志いまいきづいて彬の忌

大阪市 岩崎公誠

結論を先に言うたら味がない
ひと皮を剥くと女は太い芯
あと少しわいわい騒ぎグッドバイ
保険屋は年金ゼロと脅しの手
進化して行先がない地球人

大阪市 中村叡子

飛行機に乗る海外はもう行かぬ
ふたり切り忘れ多量のおでん炊く
哀切な調べ恋唄風の盆
懐かしいあの赴任地の芋煮会
生意気に孫がブランド好みだす

大阪市 小糸昭子

戦争が石油 鰯の値を上げる
かさぶたはとらずにそつとそのままに
なくなれよ眉間の皺の深い溝
カトリーナ優しい名前で大暴れ
子に意見されてむかつく元氣なし

大阪市 安達はじめ

ライバルに心の動き見抜かれる
激動の苦難に耐えた老い二人
適齢期色気抜きでは売れませぬ
世の人のやさしさに会う松葉杖
罪一つ雨にも洗う結願寺

大阪市 小泉ひさ乃

欲望を捨てて気楽なボンコツ車
いろいろあつてふり出しの地に戻る
一日のリズム狂わす雨の音
音のない部屋にも賑やかなテレビ
怒ったり泣いたりそれで平和主義

大阪市 本間満津子

あの頃は松茸狩りや栗拾い
昨日も今日も松茸 明日も明後日も
忙しい人に電話を遠慮する
蒲団爽やか少し冷たいお月様
思い出はいっぱいひとり秋の夜

大阪市 津村志華子

さわやかな朝だファイトの脈が打つ
向い風避けてひとりの暮しむき
手の平を易者に見せてからのうつ
時どきは居留守を使うインターホン
相植は打てぬにたつと笑つとく

大阪市 町田達子

これからの事など思う歳だなと
夕方に飛ぶ飛行機の次々と
思いめぐらすどんな用事で乗ってるかと
雀たちベンチの人を物色し
同じ顔ぶれ今日も元気に走ってる

大阪市 神夏磯 典子

怖いこと悲しいこと生きている証

何もかも熟れてわたしを誘惑す

自慢する相手に合わすかすみ草

拗ねるさま面白いからするめ焼く

浦島が寄る小学校の同窓会

大阪市 清水 絹子

夏休み路地も仕上げの地藏盆

盆まつりすめば独りの夏休暇

天高し夜明けの舗道一人じめ

初物の柿によばれて早や彼岸

生命線せめて曾孫の夢なりと

大阪市 玉置 英子

一日一日が無事で八十年

呆けたほど悲しかったは夫の死

赤か白口ゼがあるのを忘れてた

虫の声聞く補聴器をそつとはめ

蚊に好かれなくて私は刺されない

大阪市 渡部 さと美

ハトの群れ通れるほどはよけてくれ

道問うて下さる精いつばいに答え

温泉に浮かべ忘れていた乳房

アメリカに海より低い街だとは

次男一家インドで暮らす暑からう

池田市 栗田 久子

臓器は検査 知能はテストされている

体験は教訓として生きてくる

華やぎのなか人様に贈る花

デパ地下で暮らしの匂いかぎ分ける

日を追って入り日に赤く染まるつた

和泉市 横山 捷也

古い二人ケンカ暑さのセイにする

髪染めて米寿女を取り戻す

価値観が違ふと軽く言う女

ペンダコが山を動かす事もある

横道にそれてしまふような旅

和泉市 西岡 洛醉

文机の孤独覗いた月の影

生真面目の背筋痛いほど伸びる

ポケットに隠した嘘が音を立て

廃屋も満月満遍なく照らし

燃え尽きる今日へ心は満ちている

和泉市 中川 楓

約束の如く虫鳴く夜々となる

赤ワイン酌みて結婚記念の日

相合傘男半身を濡れてくれ

百均のメガネを旅の友として

バツカスととても気の合う夫の喉

泉佐野市 山本蛙城

しまつせなあかんなにわにある文化
はよお帰りにわことばを残さねば
早い話などと結局ぐず話

赤いなあめ切近い日のポスト
コスモスの揺れに多情のころ想う

茨木市 藤井正雄

事なかれ主義本音には重い蓋
両親を背負う気概の肩の幅

別人の妻が出てくる着付け室
宮仕えせめて家では威張らせて
愚痴っぽい人は根回しからははずす

大阪狭山市 矢野 梓

台風の後の野菜は宝物
テレパシー届いて友からの電話

お見舞の方が貰ってくる元氣
外出は足腰動く今のうち

外に出てなんぼでも恥かいている

柏原市 永浜 加津子

たわい無い夢も大事に取って置き
弾まねばあかんあかと子供達
心ブラにおいでとそごう甦り

再発の検査を延期願ひ出る
彼岸まで暑さこらえる限度かな

交野市 山川 日出子

日本国戦後還暦総選挙
竹槍を農夫習った寺の庭
柚子梅酒番茶毎年母の味

七十三心の栄養五七五

命には順序無いよと祖母孫に

詫びながら草むしりする墓参り

怖いから医者に聞かない酒のこと

選挙戦騒音公害まき散らす

リリーフには後はまかせたトラが勝つ

アメリカの恥部へぐざりとカトリーナ

足元を見てパソコンの知らんぶり

玉音と美空ひばりが往く昭和

救助待つ人へ祖国の平和ボケ

世界遺産万歳トイレ作らなきゃ

終戦忌テロの暗雲晴れやらす

河内長野市 村上直樹

改革の足音だけで跡がない
年金が袋小路で呻いてる

残るのはわたしと決めている不遜
はんこならつくよと妻の軽いのり

金婚へあと十年を誓い合う

河内長野市 植村喜代

眼裏にいつまで消えぬ星月夜(戦前二句)

眼裏に星降る夜空の夕涼み

いいニュースほしいと思う午後三時

バスにする駅の階段無いからね

今日晴れてプールの孫を待っている

河内長野市 山岡富美子

惜敗の涙よ明日の糧になれ

飽食に馴れて金魚が不細工に

一票へ激しく動く水面下

あっさりと引いて度量を示される

タイガースなにわの秋に火を付ける

河内長野市 坂上淳司

自負の国ハリケーン一過修羅の国

近頃の女狐車中でも化ける

性懲りもなく女房の地雷踏む

ヘソルック熟女真似ない方がい

足湯にてついでに顔と歯も洗う

河内長野市 井上喜醉

高齢化ほちほち妻と根くらべ

月が浮く川を見ながら魚釣り

カラオケでストレス捨てる妻の午後

大阪弁値切る数学なら達者

猛虎勝ちほこして縄のれん

河内長野市 水谷正子

選挙戦 晩夏の夢は収まりぬ

蓋開けてびっくりしゃくり選挙戦

原節子上原謙も居るテレビ

一分で済むアンケート引っかかり

高松の宮様に似てもて給い(大西文次様哀悼)

岸和田市 土橋房枝

パソコンとメールを打って字が書けぬ

欲のない孫のくじ運頼りにす

終章に書いて置きたいありがとう

改革の後に来るかも塗炭の苦

お喋りがうつつとうしいと思う時

岸和田市 長谷川 呂万

親切の伯母さんやっぱり恩に着せ

太鼓聞き体のリズム止まらない

クールビズ脇目に渋い老紳士

クローンに驚き果てるダーウィン

赤ちゃんにハッピーを着せて準備よし

岸和田市 亀井 皎月

癌保険掛けては捨てる命綱

死ぬときも一しよと勝手なことを言う

生きている証 明日が見えて来る

胃の中を時どき覗く奴が居て

通院の梯子が出来てまだいけそ

岸和田市 雪本珠子

いい汗を自家菜園で流して
飲み込んだ言葉が消化しないまま
輪の中で核心衝けば弾かれる
旅先で年を忘れてベアルック
お世辞だとわかつていても喜ばれ

岸和田市 原 さよ子

菜園の恵み分けあう両隣
深呼吸大地の恵み一人じめ
短いメールに温さ満ちている
やさしさが薬になってる介護
ありがとう孫がむかえに来てくれる

岸和田市 井伊東吉

秋日和祭まつりの泉州路
台風の一過に冴える星月夜
肩の凝る試合の続くタイガース
妻宛に届く封書は証券屋
老人の参加増えだすヨガの会

岸和田市 岩佐ダン吉

傷だらけの九条ひたすらに守る
本音ではなからう僕を褒めている
さり気なく箱振ってみる癖がある
核ゼロのこの汗ヒロシマへ届け
大勢に流され僕を咎めたい

堺市 石堂潤子

デパートで時間つぶしたプチ家出
ストライキするとやさしい夫になる
有り難う咲いてくれたね鉢の薔薇
余生とは侘しき言葉蟬時雨
貧弱な私の耳へイヤリング

堺市 村上玄也

邪念ない男女に避けられる
この暑いのに正装で出るパーティー
思い切り歓迎両の手で握手
雑念に覆われ重くなる気分
毎日のようにしている探し物

堺市 近藤豊子

ひまわりの葦うつむいて夏終る
褐色の夏ひまわりの葦のなか
てのひらのひまわりのたね跳ねそうだ
てっぺんにきて振りかえる太鼓橋
天神祭橋のひとかげこぼれそう

堺市 齋藤 さくら

食欲があるから若いなど言われ
コオロギの生演奏が子守唄
お茶の間で老後の話増えてきた
復活のそごうに拍手惜しまない
トイレまで覗いてそごう誉めちぎり

堺市 西村 りつえ

アメリカの底辺晒すカトリーナ
チームワークで無事成し遂げた宇宙服
一人居の長い電話に鍋こがし
はばかりず自分を晒すしまい風呂
マニフェスト メリットだけを吠え続け

堺市 柿花和夫

車椅子の母とカチューシャ歌う午後
カチューシャかわいやお袋もかわいや
蔭拾い一休みする車椅子
我慢強い母が自宅を恋しがる
浜寺の海で泳いだ母卒寿

堺市 源田 八千代

アメリカの翳を曝したカトリーナ
たつぷりと毒を利かせてきた会話
ITに取り残されている化石
日本の幕内力士腑甲斐ない
おばあちゃん小銭で払いレジが混む

堺市 宮本 かりん

嬉しい風吹いて揺れてる千羽鶴
肩よせて二人世界の大通り
ほくほくの焼いも湯気も半分こ
娘に手紙とんぼ返りできたメール
押しつけの口調もおもいやりだろ

堺市 志田 千代

風除けのある二番手が性に合う
新世帯実家の母のレシビから
新郎には飲み屋のツケがありまして
なまぐらの包丁はない魚好き
会話へり背中ばかりをかかされる

堺市 矢倉 五月

先見えぬ迷路でいつそ昼寝する
ちよつとウキウキさせる便りの花切手
父さんが動くうしろに母の影
一芸を抱いて出番を信じてる
薄味に煮る愛情のいる作業

堺市 和田 つづや

関節がしくしくしだす風は秋
まっすぐな道を選んで飽きぐる
半歩だけさがれば見える僕の自我
方便の嘘に中毒しはじめる
猜疑心捨て足もとを軽くする

堺市 加島 由一

遊ぶのに飽きて仕事を探してる
机の上の家族写真に励まされ
うちの子も入っているが暴走車
赤トンボ見たら廊下に立たされた
いい人でこんどはおわらないぞ恋

堺市神原文

吹田市山本希久子

風鈴姦し風は噂を連れてくる
洪水へノアの方舟待つ都民

少女めきくるる様子して試着

雑念散らし心を秋にして試着

胸の谷有る無しで選るネックレス

堺市國見蘭香

惜しくない元気で掛ける保険料

噂など笑いとばしておくが勝ち

幾世代守り下さる地藏さま

輪の中で歳を忘れてはしゃいでる

盆供養じつはわたしが癒される

四條畷市吉岡修

正直でさっぱりしててもの足らん

出る杭に刺すような目が向いて来る

赤旗を振った記憶はございます

丸太ん棒のような腕とは喧嘩せん

ブランドと戦はしないチャイナ製

吹田市太田昭

叩かれぬ出過ぎた杭が自惚れる

隙だらけの胸に直球投げられる

酒の相手できる口ポット造らせる

多数決嫌う男の夏の乱

過労死と言われてみたい暇な日々

笑顔は可愛い五歳も百歳も

落葉はらはら身の振り方を考える

もみじ葉はらり宇宙から来た手紙

未来のバズル解く鍵を持つ孫達だ

点点と足跡残し逃げ切れぬ

吹田市野下之男

怨念の二字だけ駆ける永田町

ドア閉めて一人占めする小宇宙

率直がいらぬ所で波立たせ

鼻の差で勝負の神は遊んでる

大人しい隣のボクが自衛隊

吹田市穴吹尚士

カルチャーの筆が震えているヌード

皿ばかりでかいフランス料理店

言い訳をすればするほどひどい汗

足音に慌てたヌード写真集

つるつるにどないしまひよと散髪屋

吹田市岩屋美明

生きるのもしんどいことや血を採られ

渋皮がむけて観音様になり

祭り笛誰か故郷を思わざる

借金があるからいつも夢みてる

やどかりも宿を抜け出す秋の月

吹田市 早川 棲世

熟女みなあけすけバリの市場でも(旅の思案その上)

黄金の日々フィレンツェの贅から美

ミナレット軍楽隊は芸達者

ウシユクダラ来ればシャツ干す庶民街

独立の歴史どこかに血のページ

吹田市 須磨 活恵

よく延びた生命線を信じたい

柿熟れてかすかに軋む骨の音

届かない思慕を抱いてるくすり指

年の功 急所急所で釘をさす

遠い日の記憶斑に色が消え

吹田市 瀬戸 まさよ

戦争の生き残りです重い口

ジープの高値納得できません

居酒屋のサンマと酒は天下一

漁り火にロマン語った浜も消え

謝罪する社長大星由良之介

吹田市 大谷 篤子

なんぼでも泣いて女は強くなる

偉そうに猫が満月眺めてる

幻想の愛にあくまで人を恋う

目の前にまさかの人が立っている

歩いてる幸せ足の裏洗う

吹田市 木下 敏子

ユーモアが溢れるひとと飲むコーヒ

挨拶はしてるが名前出てこない

ホリエモン選挙で株もまた上り

子育ても老後も託す票入れる

忙しい役割りが来る敬老会

高石市 浅野 房子

生きているか死んでいるのか片便り

のら猫に中途半端な愛そそぐ

若い頃もてた話を聞かされる

考えてもどうにもならぬ事ばかり

この世では直らぬやまい持病なり

高槻市 富田 美義

平均の余命と貯金ない余白

優しそうだけど冷たい他人さま

この国は恥が背骨のはずなのに

人生は結びほどこいて生きる日々

どっこいしょ口に杖して動く癖

高槻市 瀧本 きよし

牛若と京の五条で待合せ

桃太郎犬猿雉で拉致退治

織姫が橋架けるため談合す

閻魔様罪人急増困り果て

貧乏神景気上向き痩せ始め

誕生日 妻の手料理発泡酒

高槻市 江原秀夫

一生の酒呑みつきし傘寿越え

思い出はさておき先ずは月見酒

人間の本性平和に耐えられぬ

生かされて生きすぎました日向ぼこ

高槻市 井上照子

濃い緑静かな森の気をもらう

文明の機器の悪用許せない

ライバルは花形拍手惜しまない

バーゲンの売り場プライド影もない

減塩のおかずで夕餉腹八分

高槻市 執行稲子

隠れてたキトラまた徴辛かろう

一筋縄で行けそうにない孫の眉

好い出合いくれたチャンスに感謝する

隠すからなお探知器が欲しくなる

パソコンにお株とられた聴診器

高槻市 生田義一

同窓会皆んな夫々ドラマ秘め

でこぼこの道で優しい花を摘み

途中下車思いがけない出合い待つ

蝉しぐれ消えて選挙の叫び声

郵政で靖国しばし影うすれ

同じよなへマする人を笑えない

高槻市 傍島克治

無理せんでええと言いつつあてにする

どの医者もカルテの文字が読みづらい

ばあさんのマナー孫には通じない

下手糞と言われ笑えるうちはよい

高槻市 乙倉武史

好演の小泉劇場アンコール

星野巨人なんぼなんでもそりゃなかる

少子化の世に百歳が二万越え

行き当りバツタリ生きた傘寿過ぎ

老いぬれば日にち薬と言うお医者

高槻市 西谷治三郎

大陸を歩いた足も関節痛

喧嘩して泣く子見かけんようになり

ちびちびと二合の酒に生かされる

バスツアーおばさま族と乗る不運

妻の声強気変わらずひと安心

富田林市 中井アキ

愛犬に弱点ひとつ握られる

叶うなら君と二十歳に戻りたい

夜明けまで続く涙の相手する

口笛に明日を開いてゆくふたり

残り火がまだまだ女主張する

富田林市 片岡 智恵子

万博の未来は人の波ばかり

愚痴っていたら前進力が減るばかり

空中戦蘇るごと赤とんぼ

排気ガス撒いてタクシー禁煙車

客用の茶の葉減らない老いふたり

富田林市 大橋 鐘造

列島へ今九条の灯が揺れる

お迎えへ一人芝居の幕下ろす

少子化へ無縁仏が多くなる

人間を変えるお金という魔物

よく動く妻に感謝のフルムーン

富田林市 藤田 泰子

雑踏が好きみんな知らない人ばかり

干してたんで退屈してる暇がない

おでんぐつぐつ待つ人ができました

人さまに傷つけぬよう爪を切る

もみじ散る酸いも甘いも知り尽くし

富田林市 池森 子

百歳の皺には百の戦傷

ゆっくりと夏の鱗を落とさねば

蛇行して進む目立たないように

贅肉を落としてセンス取り戻す

つかまえて欲しいと願うかくれんぼ

富田林市 中崎 深雪

ヨン様の映画はドレスアップして

夫だつて出会いのときはペ・ヨンジュン

ラブソングのように聞こえる韓国語

カムサハムニダ米研ぎながら口ずさむ

ヨン様の母つてどんな人かしら

富田林市 稲川 恵勇

酒のはなしするな禁酒をしたばかり

先頭を走りだしたら気が抜けず

偉いさんと言われてからの孤独感

終点の手前で開くコンバクト

ライバルの挑発笑みで受け流す

豊中市 江見 見清

大化けの出世で疎遠クラス会

化粧せぬほうがいいとも言うわず

内鍵が知らぬ間につく子供部屋

ドアチエーンかけているけど仲が良い

出しゃばりは重宝されて疎まれて

豊中市 藤井 則彦

白い顔見せて微笑むアスベスト

裏木戸で深呼吸する初舞台

一緒には歩けぬ妻の化け具合

わたしまで覚えてくれたドアボーイ

マージャンの払いに化した授業料

豊中市 水野 黒 兎

リフォームの床を裸足が嬉しがる
わが家ではとくに女帝君臨す
あの時が最後だったと悟る日々
真つ裸で富士と対面旅の風呂
妻はうたたね猫のヒゲ引いてみる

豊中市 岸 田 知香子

子の成長夢見た頃の婆談義
下半年スタミナ溜める盆休み
今生の別れになると予定組む
盆休み帰りの荷物倍になり
おそくても台風被害同じ事

豊中市 安 藤 寿美子

甲子園残暑もなんのそのと沸く
港大橋渡り返して夏惜しむ
談合も汚職も知らず丸木橋
空蟬が一つころがる朝の道
この橋はやはり渡らぬことにする

豊中市 山 門 タ ミ

恋終えた蟬の骸は道ばたに
オレンジの月がささやく嬉しい夜
秒針に振りまわされる現代人
老残は蚊も素通りで孫を刺し
おやすみへやっぱり歯だけ磨いとこ

豊中市 吉 田 あずき

秋幾度見て来た夢と捨てた夢
胸算用はじめて一つ大欠伸
専用車気楽に本音出す女
切札を笑い袋につめかえる
正面を向いたら嘘が言いにくい

豊中市 樫 谷 郁 子

日差しにも丸みを帯びて夏が近く
梅木陰蟬合掌で夏がゆく
アスベストあちらこちらで恐くなり
親から子 短気遺伝子損ばかり
腹の中読むのは女系家族かも

羽曳野市 酒 井 一 壺

あくせくと働きストレスだけ溜り
なぜポスト赤いか先生困らせる
モナリザの前でしばらくナルシスト
うっとりとしているようで隙がない
なぜなぜがまだまだあるよこの宇宙

羽曳野市 三 好 専 平

スキだらけなのに打ちこむとこがない
お祭りの法被を着ると出る元氣
新聞紙吹けば飛ぶよな嘘で埋め
船板塀の遊廓みんなビルになり
この指にたかれという子いなくなり

羽曳野市 徳山 みつこ

暮そうじ草引く亡母がまなうらに
議定書のイエローカードよカトリーナ
オーマイゴッド水に浸ったままのジャズ
空っぽのダムへ蛇口を細くする
つくり笑いも本物に進化する

羽曳野市 安芸田 泰子

持ち上げる力はないが縁の下
節くれた十指勤勞感謝の日
つり橋が揺れて夫婦が手をつなぐ
相槌が寢息に変わり老夫婦
秋茄子で茶漬さらさら嫁姑

羽曳野市 吉川 寿美

擦り切れた辞書がわたしのオアシスで
うっかりと相槌打つて背負い投げ
有るがまま生きて来ましたこぼれ萩
まだ花火揚げたい喜寿の昨日今日
雑巾を洗い直して日日新た

阪南市 森村 美花

通園の子らに活気をもらう朝
秋風が吹いて心が軽くなる
予定表新規参入ウォーキング
渴いてる心に秋のまるい月
赤福を食べてまあるい午後のお茶

枚方市 寺川 弘一

須弥山に抜ける迷路は闇の中
環状線を一回りしたプチ家出
白い雲善玉ばかり駈けて行く
夢告げがいい朝しつかり顔洗う
嫌な夢見たので焼酎買っていく

東大阪市 西村 哲夫

待つよりも待たせるつらさ与えられ
煩惱が漏れるエネルギーに漏れる
コーランも聖書も経もあきれ顔
地球創世 私の祖先見つからず
我が部屋を秘境と名付け近づかず

東大阪市 谷口 義

眼鏡かけ眼鏡外して母に似る
朝風呂に入ると名案が浮かぶ
妙案を只今解凍しています
懲りもせず一か八かの橋渡る
嘘ついた後でたっぷり水を飲む

東大阪市 笠井 欣子

シナリオにない人生が邪魔をする
炎天下急がないのに急ぐ足
専用車男の傘が隅っこに
苦瓜に慣れて焼酎にも慣れる
傷口に膏薬貼って生きていこ

東大阪市 安永春

橋を渡ればほうよほうよと母が待つ

エプロンは知ってる母の目分量

さぬき富士見て弁当を買う予讃線

カルテみる医者の方顔にはほっとする

入院患者お化粧してはいけません

東大阪市 北村賢子

それなりの幸みそ汁と目玉焼

鬮さえご馳走になる有田焼

いま動いたまた動いたと母の愛

旅立ちの若いつばさはピツカピカ

マネーには転ばぬ強い芯がある

東大阪市 中岡妙

沁み沁みと桃の甘さを噛みしめる

数え唄はおずきの実がふたつみつ

名水で肚の底まで清ませる

二人三脚ときどき紐を締め直す

子が育つ鏡に私見るように

藤井寺市 太田扶美代

コンパクトいい顔の時閉じられる

きつと治ると信じてた千羽鶴

ステンドグラス オランダ坂を思い出す

思い出は全部あなたに結びつく

焦らずに生きると決めた誕生日

藤井寺市 中島志洋

全身を耳にして聞くいい報せ

永遠の愛を誓ってもう他人

人生の節目を飾る花と酒

よく喋る人にあきれている無口

偽もんが本物よりもらしく見え

藤井寺市 高田美代子

手八丁口八丁も生きるため

嘘でない証拠に慌てたりしない

捨てるには惜しい詩集を抱いて秋

良心に叛いて悪人の仲間

蟬絶えて樹だけポツンと立ちつくす

藤井寺市 若松雅枝

ときめいて明日の風に乗るルージュ

母の背を流し介護をしたつもり

古時計五分遅れで動いている

いら立ちが朝になつたら消えている

知らぬ間に洗脳されている怖さ

藤井寺市 鴨谷瑠美子

投票日出口の調査にも答え

台風の接近予定狂わせる

レモンティー恋に溺れる歳でなし

背の青い魚を嫌い抜いて秋

月明かり落ちて寝るひとり部屋

藤井寺市 楠 昭子

それでよしそれで良かったたひとり言
さんざんに母を困らせ母になり
恋実りかくしきれない語尾がはね
妥協するつもりへ今朝の軽いくつ
話すことたと溜めてるつるを折る

枚方市 海老池 洋

カレンダーに尻叩かれて生きている
膨らむと夢が野望になりたがり
つい情に流されピエロめく私
大それた望みは抱かぬ茄子の花
自信過剰風のサインを読み落とし

枚方市 安達 忠央

戦争とテロ消す叡智いまだ出ず
ふるさとでこころゆくまで里言葉
大化けをするはずの株まだ下がり
化けの皮三次会でも剥げよらん
玄関の鍵をかけたか見に帰り

枚方市 森 本 節子

朝一番庭の花摘み仏前に
イヤホン外しても耳に残る音
朝顔はどれもフェンスの外に向き
ことわりなく隣の猫が部屋物色
おだやかな川が形相かえ走る

枚方市 宮川 珠笑

順縁を喜び乾杯してる通夜
手術前いとていねいに剃ってくれ
まだ寿命あるのか主治医が笑つてる
天井のさずまで見舞い観て帰り
失せ物がいつも身近にかくれてる

枚方市 二宮 山久

降る雨に思いとどけとダムのそこ
ハリケーンよりも日本にきた台風
六十歳心豊かに働けり
郵政の選挙おいらにやきめかねて
愛妻のいない今夜はコップ酒

枚方市 丹後屋 肇

ビル街にろうそく点る地藏堂
三味線が目覚める祇園の昼下がり
すだれから舞妓ものぞく選挙戦
激戦区潰れた声でつぶし合う
鉢巻が誰かれなしの手を握る

枚方市 荘司 弘之

親切なところがしみる一人旅
一人旅つい童謡を口ずさむ
ひるがおの花いきいきと炎天下
フェリーから昨日登った利尻見る
古都で見る夕陽は何故か有り難い

寝屋川市 籠 島 恵 子

バイキングしている秋の雀たち
片付けが終ったころにくる電話
出身地変えられている米りんご
十五夜が近いですよとラジオから
選挙の行き帰り花の名教え合い

寝屋川市 平 松 かすみ

KONISIKIに来てはもらえぬ築五十
モノクロの思い出はるか亡母の膝
内臓のスライス鬼は見つからず
忙しい孫バリ島の土産だけ
母が逝き父の見立てた小紋着て

寝屋川市 森 茜

小説の嘘にしんみり泣いている
中学生みたいにカットして貰う
救急箱の湿布が一番減っている
わたしにも事情野良猫追い払う
ポリフェノールがお目当てだったワイン党

寝屋川市 坂 上 高 栄

平成の維新歴史の一里塚
アスベスト時限爆弾破裂する
親という言葉だんだん軽くなり
難聴で入りたくない話の輪
熱弁のマニフェストを冷めて聞く

寝屋川市 富 山 ルイ子

和やかな句会はどこに行つたのか
かまくびを持ち上げている蛇のよう
次々と悪態皆にきらわれる
悲しみの仮面をつけて句会行く
相談を常識もつた柳友にする

寝屋川市 太 田 とし子

政見放送きけば疲れがどつと出る
蝙蝠が仰ぐ空には青がない
青空を仰ぐおちめの無精髯
いいところをつまんで食べて腹が減る
目立つほど冷たくなつてくる味方

寝屋川市 江 口 度

誕生日まつりと同じ忘れない
なすび買ってくるはず虫にやるために
てるてる坊主も見ている天気予報
また煙草吸ってしまった自己嫌悪
台風はみな大阪がいやらしい

守口市 井 上 桂 作

少子化で産めよ増やせと国のため
落雷の音聞きながら深呼吸
蝉しぐれ人間様になにを説く
歳きかれ失礼でない爺となり
脳のすみ雑念いまま甦る

八尾市 村上 ミツ子

防災の日にカンパンを食べました

どのチャンネルも見あきた顔のかすれ声

信頼のできないマニフェストずらり

この歳で初めて点滴を受ける

しゃべらないのが一番の自己主張

八尾市 高杉 千歩

負けりやあせん名古屋弁で立ち上がる

治つたら話すつもりを叱られる

平均寿命傘寿の坂で病んでいる

よくもまあ背骨曲つたレントゲン

院長のお言葉補聴器が離せない

八尾市 生嶋 ますみ

優先席メールメールのギャルの群れ

きつちりと迷わずに来た請求書

栗ご飯なぜ心が満ちてくる

ストレスがしつとり抜けていく湯舟

そう長くない事ばかり続くまい

八尾市 山本 宏至

衣着せた言葉に本音かくれてる

自分史にジャズがきざんだ一頁

見てほしいダイヤの指輪ポーズとる

妻の料理あきずに食べて五十年

やりくりのお札にはえている翼

八尾市 宮西 弥生

寝たきりへ秋風あげる窓開ける

まだ騒ぐ血がありよそ見ばかりする

夏はての肋悲しいまで唸る

贅肉を削つた分だけよく笑う

一寸の虫が誘いに来た読書

八尾市 宮崎 シマ子

突然に途中下車する花の村

一行で私の愚痴はおさまらぬ

指切りの指まつ先に嘘をつく

白髪と黒いのが一本ずつ抜ける

辛口の拍手とわかっている左遷

八尾市 吉村 一風

子供ニュースしつかりと聞く老いふたり

スルメ噛みビールいつ気にも妻の留守

物忘れまた立ち上りまた座り

焦らずにただ黙もくと万歩計

やつと金婚よう泣かせたが妻達者

八尾市 井尻 民

リハビリの手摺り回復までみがく

ひとすじの川を浄土へ夫婦舟

ときどきの夫婦に波浪注意報

結び目によってたかたか水をさす

惜しまれて去る花束の手にあふれ

八尾市 長谷川 春蘭

大阪府 米澤 俣子

サンガラスはずして拝む神の前
手火花のかがみし人の香の親し
老いてなお心浮かるる更衣

石畳ふめば参道月青し

もう二度と逢えない人と夢で会う

大阪府 初山 隆盛

秋風にほっと息つく仁王さま

やるだけはやったといつも言う台詞

正調を曲げない父のうなり節

熱球につばさの生えたホームラン

堂堂の復活だったのかそごう

大阪府 澤田 和重

妥協してばかりで自分甘やかす

ストレスを妻百均へ捨てにゆく

誰にでも笑顔を見せている野心

心配の種があるから呆けられぬ

妻と娘の会話いり込む隙がない

大阪府 前田 ゆい

今年またまつり囃子が風にのり

わが孫も元気に育ちまつり好き

子育てに何か足りない核家族

短くて長い旅路の夢芝居

優しい目のお地藏さんに秋の花

ストレスを溜めてるうちはまだまとも

隙のない心配りを持って余す

ハプニング本心の奥見てしまひ

魂を洗いなさいと秋の天

先走るワタシはいつもへまをする

大阪府 野田 栄呼

ひとり旅気おくれしてる新免許

子供達みんな未来の宝物

逃げ出さぬようにキャップをする頭

忘れぬよう頭に書いたメモ逃げる

熊が出るかもと聞いては行けぬ栗

大阪府 桑田 ゆきの

夢果たす宇宙フライト誇らしい

結び目が解けぬみくじへ打診する

大波に修羅場叩かれ丸くなる

一徹で流れに添えぬ父の岩

天地人 希望を乗せた便り来る

神戸市 山口 美穂

古希の坂もうガンバルはやめました

母ならばどうしはったかなと遺影に

お互いに亡母に似てきた姉妹

残された皆は達者な口だけで

残暑の中 忘れずに咲く曼珠沙華

神戸市 山 口 光 久

目の動き見ながら二の矢考える
ふにやふにやを支えてくれる妻の芯
妻の皺増えていくのは僕のせい
五つ星へ妻と一度は夢未だ
若返る薬求めて嵌る罠

神戸市 木 村 貴代子

気がつけば娘の電話待っている
保険金あなたの命食べている
嫁がせてこれっぽちの洗濯物
引きこもる心のカギがみつからぬ
水空気 命の基を粗末にす

神戸市 伊勢田 毅

六人の保護者が揃う七五三
宮仕え五時からもある課長補佐
裏の裏読んで負けてる競馬通
じゃんけんに弱い男で役を受け
保険証が効かぬベットが風邪を引く

芦屋市 黒 田 能 子

修理する部品がないという故障
手作りの丸みやさしく手に馴染む
雨もよし家でウロウロして過ごす
子育ての騒がしかった頃が好き
お互いの風大切に踏み込まぬ

相生市 中 塚 礎 石

少年の遊び道具が人を切る
つばくろが商店街を通り抜け
蝉しぐれびたりと止んで法話聞く
脱税をえぐる女性の目が光る
強そうな奴は無言で動かない

尼崎市 春 城 年 代

お隣は盆の掃省で花が咲く
どこへ出ても長老となる慎しман
出席と出したとたんになにを着よう
地藏盆の数珠が回ったときの恋
整理下手もうお手あげだきのうきよう

尼崎市 春 城 武庫坊

酷暑に耐え今花咲かすありがとう
猛者だったが蝉時雨には励まされ
僕の背を押し出す色の無い風よ
頓珍漢を時々起こし歳思う
無人駅乗ってきたのは秋の風

尼崎市 長 浜 美 籠

肝心な時だ鉛筆とがらせる
もやもやを解きあぐねてる衣かつぎ
やみくもに言った言葉が凶星さす
胸の内押し計ってるスリーブ皿
宍道湖のレトロな店で話こむ

尼崎市 田 辺 鹿 太

耳鳴りも馴れると下手な子守唄
表情にゆとりが戻るコップ酒
女性から絵手紙悪い気はしない
旅の途次踊る阿房の仲間入り
反発が怖くて孫を叱れない

尼崎市 松 下 比 ろ 志

無器用だから遠回りには慣れてい
金婚式かしこまつてる妻の皺
無器用だが父には父の志
幸せも蹲つてる夏の午後
永田町刺客の影に揺れた夏

尼崎市 林 昭 三

本鮪ころがしてある魚市場
頑丈な灰皿がある町工場
広い海それでも船の事故続く
騙す気はなかったと言う取り調べ
奇麗な人に騙されましたとも言えず

伊丹市 山 崎 君 子

月下美人一夜の夢は短すぎ
まつり笛かなしいロマン呼ぶように
星一つ彼の名を呼ぶ仏の日
両刀つかい仏に地酒 彼岸餅
秋茗荷 残暑ねぎらう里の旬

川西市 西 内 朋 月

あの世がよいのか化けても出てこない
妻と母器用に分けて翔んでいる
子の部屋のドアは必ずノックする
優しくて甘えたくなるひとがいる
嘘ついた小骨が喉に刺さっている

川西市 米 原 雪 子

立ち話弾んで夕餉手抜きされ
フト気付く後姿に老いを見る
一徹な気性受け継ぐ孫がいる
近道と信じた地図は遠回り
カーナビを頼りに延びる小旅行

三田市 久 保 田 千 代

こだわりの舌へ秋刀魚を炭で焼く
絹の道 古代のロマン彷彿す
氣丈夫な人が気弱に杖をつく
のほほんと世の中浅く広く生き
一票を決めかねている選挙権

西宮市 門 谷 た ず 子

自由とは淋しいものよ萩が散る
この人も淋しいらしい長電話
あさ漬けの胡瓜もつかりすぎて秋
吊橋の揺れにまかせている未来
野に咲いて人知れず散る花でよし

西宮市 西口 いわゑ

透明になりすぎ魅力覚ええない
いい話レモン一切遊ばせる
たつぷりと愛をもらってばら開く
ひまわりのような女の悩みきく
大空にわたくし流の星座描く

西宮市 山本 義子

お人形が動く恋風吹いたらし
絹の糸縫れどうにもならぬ運
老人には浅い情けでよい政治
騙し舟まだ浅い夢みています
ステーキ焼きあとは茶漬けがコースです

西宮市 牧 渕 富喜子

コスモスがはや揺れている道に出る
右手首左親指痛め閉
喜びも日々のくらしも小じんまり
見せたくない顔を知ってる歯医者さん
圧勝をただ呆然と見てしまう

西宮市 井上 松 煙

むしゃむしゃと化ける夢みている揚羽
愛の鞭まで暴力とみなされる
自慢げに裏口のコネ聞かされる
修羅越えて鬼が仏に化身する
椋鳥が蜂の無花果奪い取る

西宮市 秋元 てる

お互いに己が古い様笑い合う
癌の子の軽口空気軽くなり
テレビ消音さては阪神負けてるナ
子の病さりげなく聞く古い友
藍浴衣 白角帯の孫に惚れ

西宮市 菊池 トミエ

夏ばての喉にやさしい冷やっこ
祈る手に私やつぱり欲がある
遠い日を水に流して暮参り
歳並の老化と医者は軽く言う
月下美人咲かせて明日の夢を抱く

西宮市 緒方 美津子

寄せ書きの隅に小さく好きとあり
両親はお呼びするだけウエディング
麦飯に戦後引きずる頑固者
まだら呆け母にやさしいさるすべり
はばかりず電車の中で化けるギャル

西宮市 坪井 孝一

叶うなら過ぎた時間を戻したい
炊きたての御飯におかか握られる
心通う優しい友があつて生き
男同士飲めば握手をすぐ求め
溢れるほどライバルに注ぐ下心

姫路市 古川 奮 水

土曜日の朝刊どさりピラを吐く

泡盛の人氣に清酒遠慮がち

珍しい地酒に財布軽くなる

優勝旗 海峡越えて膿を出す

世話焼いて愚痴を聞かされ腹が立つ

兵庫県 大谷 幸次郎

原爆忌 忍び難きを忍べども

原爆忌こよなく晴れた空仰ぐ

まっすぐに吾刺しに来る蚊をびしゃり

雑草は敵だと思ふ畑に立ち

笛吹けど踊らぬ輩切り捨てる

奈良市 天正 千梢

絵の皿まだ紅色が残ってる

年寄りの冷水パソコン買って来る

落葉樹あきらめきつて春を待つ

古本屋回ってさみしさまざらわし

ぬけぬけとよくもこんな裏金を

奈良市 米田 恭昌

あんさん今出れまっかと言う師の誘い

セルフサービズ慣れた男の武骨な手

単身赴任ひとりごと言うさみしがり

劇場型選挙自民圧勝してフィナーレ

マドンナという刺客がよんだ大勝利

奈良県 渡辺 富子

堂々とボクのハートを盗む月

業平の恋の通り路こぼれ萩

逆風へきずな強めてゆくふたり

見返してやる気の腕が唸り出す

タレントののろけで稼ぐ視聴率

生駒市 飛永 ふりこ

ラブメールのぞくハートを金縛り

ずばずばと言えれば肩は軽くなる

さじかげんしている言葉雑ぜ返す

自信過剰アドバイザーが消えてゆく

過ぎ去りし恋が点滅御堂筋

香芝市 大内 朝子

飛行機がトンボみたいな青い空

鶏頭の真つ赤に燃えている里よ

仲のいい夫婦眺めているひとり

洗うたらさっぱりするだろう未練

ひとり居へ顔の体操忘れない

橿原市 居谷 真理子

秋の風連れて誤解を解きに行く

観音の顔で火焰を背負わねば

まず服を褒めて女の待ちあわせ

賞状を受け取る方の伏し目がち

ごく希に夫婦気の合う時がある

檀原市 安土理恵

逃げ口上ひと味足した言葉尻

優柔不斷くすぶるものがありまして

くたびれた刺身のツマは捨てられる

流されてみたら見えてきた活路

目の上のたんこぶライバルは美人

大和郡山市 坊農柳弘

歳月をゆるりと解くスベアキー

ともすれば自分本位になる詩人

香焚いて琴の調べに酔う茶人

飾らない言葉で自分史を裁く

喋らせておこうか酒が切れるまで

和歌山市 木本朱夏

歳時記に誘われ秋刀魚焼いている

雑学のかるい知識を皿に盛る

焼き茄子で男をひとりゲットする

神さまの謎が仕掛けてある花芯

軸足がぶれる踏み絵を前にして

和歌山市 福本英子

ストレスをいっぱい溜めて低金利

皺隠す浪費惜しくはないらしい

友だちの顔色を見る寂しい日

法師蟬鳴いているのにまだ猛暑

パリアフリーはよから造る怠け癖

和歌山市 桜井千秀

元の値も押し頂いて娘の古着

念ずれば仇野の風頬撫でる

近畿一周位しました土踏ます

携帯が薄暗がりが高笑い

想像力逞しくして若作り

和歌山市 松原寿子

返信メールへ笑顔マークを添えておく

感情を抑え切れずに筆走る

わかりにくい境界線だ選挙戦

その胸に縫り落ち着く切符買う

香水が慕情とかして揺れ動く

和歌山市 古久保和子

着飾って出かけるとこが妻にある

選挙カー町の空気を混ぜ返す

しばらくは飾ってからというメロン

客寄せの卵にされたとは知らず

新入りへメダカの鉢の小競り合い

和歌山市 武本碧

娘と歩く母は好んで地味を選る

平均寿命延びて欠伸の数も増え

流行について行けない腰の線

捨て切ったはずの邪心がまだ騒ぐ

知り過ぎた裏が少うし疎ましい

和歌山市 喜田 准一

高飛車へすぐに飛沫がはね返る
よく聞けば少し捻じれている理くつ
あなたにはついて行けぬと言うて古希
ストレスを溜めて腹膜炎になる
重心の低い男で転ばない

和歌山市 田中 みね

決別へ揺れる女の舞扇
肩の張る席で扇子もかしこまる
一足飛びに出世の先に待つ孤独
さあ離陸手抜きしないでパイロット
孫出来ぬと嘆いた兄に先ず双子

和歌山市 榎原 公子

音たてて私も風も秋へ向く
うまそうな雲でメルヘン描いている
木犀の香に導かれ歩を伸ばす
コンマ以下まで割りだして疎まれる
確固たる自信が揺れている忸怩

和歌山市 上地 登美代

嬉しいことあって地球無重力
これからへしつかり大地踏みしめる
遠い日のげんまん満天の星の下
秋だけは元気とんぼも私も
鍬を振る姿夕陽に飾られる

和歌山市 堀畑 靖子

食べられる葉っぱ見つけた河川敷
ウルトラマン弱いパチンコ台でした
土俵には立たずいちゃもんつける人
なんのことなんてはぐらかされました
長生きのごほうびそんな保険金

和歌山市 玉置 当代

ひと夏の恋も終わってゆく浜辺
ぶら下がるゴーヤに助けられた夏
生きてさえいればと思う親心
哀しいが心を鬼に立ち直る
刺客立てどうなることか民営化

和歌山市 楠見 章子

マンネリの鬼が辛子を盛れと言う
悟るにはまだまだ薔薇が赤すぎる
孫の守り命も金もちびてくる
これからは個性で勝負することに
幸運の扉この手で開かねば

和歌山市 山口 三千子

何もかも話せば波が立ってくる
時期外し六日の菖蒲義理を欠く
嘘ませてその場の空気なごませる
情けが仇に心の中に冷雨降る
招かざる客玄関でとぐる巻く

和歌山県 細川 稚代

神仏が一体となる紀伊の山

通院へちよつとおしゃれな快復期

おしゃれして老母いそいそとデイケア―

学徒動員乙女十八旋盤工（六十一年前）

深夜放送うちわの風と共に聞くと

和歌山県 宮本 三喜夫

空の事故跡絶たないのどうしてよ

乗り物に命がけとは堪らない

本務投げ飛び回りの暇な知事

旗揚げも最後のものがき当て外れ

世の中を甘く見たのが悪かった

和歌山県 松尾 和香

残り日の夢を育む里の風

良く動く体に感謝慕参り

ふるさとの川原で焼いた秋の幸

コスモスに強い芯持つ母の愛

風まとい天女のごとく舞う余生

海南海市 三宅 保州

おそるおそる治りますかと聞いてみる

一部始終見ていたかったのに麻醉

悪いことばかりやおへん世の中は

良い運勢出るまでチャンネルを替える

園遊会の風はしあわせ色に吹く

海南海市 堂上 泰女

少年の追憶にある鬼ヤンマ

秋空がハイネの詩をつれてくる

曼珠沙華 別れた人の熱を抱き

孫からの喝采浴びて笹の舟

赤い靴今日も生命を弾ませる

海南海市 谷口 義男

痛み出す七坂耐えた膝小僧

言う事は無いが苦勞を知らぬ嫁

苦勞したなどと容易く言う息子

嫉妬と言う漢字何れも女偏

バーゲンの服もセンスでカバーする

和歌山県 中後 清史

路地裏の明かりが温い佇まい

休耕田嬉しそに咲くれんげ草

チンをすることを教えて妻の旅

突っ込みの羽目が外れた大火傷

娘より妻から欲しい思いやり

第91回 大阪川柳の会

日 時	12月12日(月) 17時開場・18時締切
会 場	北区梅田駅前第2ビル5階・第1研修室
宿 題	△転ぶ・森中恵美子△裏・泉 比呂史
会 費	△猫・河内天笑△コップ・磯野いさむ 各題2句 千円 欠席投句 12月10日迄

川柳塔の

川柳讃歌 ⑪

木津川 計

普通車に乗ってグリーン車から降りる

太田 昭

何が不運といつて、グリーン車で見知らぬ人物と隣り合わせになったときほどの不運があるのか。隣りは空席、しかも車内は空いていてこそ値打ちではないのか。

指定席よりグリーン車が混んでる場合もあると言いたい、やはりグリーン車の格である。空しいつくりいではあるが、偉ぶってみたい悲しい性を昭さんはよく分つておいでだ。

爛をした分だけ酒が薄くなる

大橋 政良

なるほど。だから湯は水より不味く、その分茶の葉で埋め合わせをしたのだ。政良さんにしてみれば、「熱爛で頼む」と言う男の馬鹿さ加減である。酒を薄めて飲むアホがどこにいるか、ではあるが、いるいる、山とて薄焼酎やウイスキーを水や湯で割り、わざと薄めるアホで一杯。酒を心得た賢い人はみんな

冷やで飲んでいると知るべし。

信号も渋滞もなし夏の恋

古今堂 蕉子

芹洋子の「四季の歌」が人間を区別したのだ。春を愛する人は心清き人であり、夏を愛する人は心強き人であると。同様に夏の恋は信号も渋滞もない一直線の早さである。「四季の歌」の作詞家は凡庸だが、蕉子さんの比喩はうまい。「恋せよと薄桃いろの花がさく」は水府さんだったが、多分渋滞に巻き込まれた恋のはずだ。夏以外に恋の季節はない。

言っておかねば親が廢るといふものよ

中崎 深雪

どんな女の人が存じませんが、深雪さんは伝法で鉄火でおきゃんなひとに違いない。「お竜でござんす。たつたいま我慢のドスを抜きやした」往年の藤純子を思い出させるお方なのだ。右の句、鮮やかな啖呵である。わが子に何をどう意見していいか分からぬ廢れた親たちの時代、しゃきつと深雪さんは面と向かい、びしびしとときめつける。

譲れない線を守って夕焼ける

木本 朱夏

言うならば、安心の境界線、を人は引き、身を守って生きているのだ。が、恐いもの見たださもある。冒険心も、よろめく心もある。

「子を産まぬ約束で逢う雪しきり」（森中恵美子）も切ないが、譲れない線というぎりぎりまであとすざりして耐える女人もつらい。そのとき雪ははげしく降り、空は身もだえして朱に染まる。朱夏さん、「夕焼ける」がいいですね。「芋焼ける」だったらワヤです。

矢印を自分で書いたことがない

安土 理恵

「ついで来い」とは言わぬのに、だまっておからついできた、「夫婦春秋」を典型に、この国の女は男につき従ってきたのである。理恵さんもその一人だった。「頼り切る背中縮んできたような」（八月号）。多分理恵さんは六十代以上で、しかし優しいおひとのはずだ。それにしても「矢印を自分で書く」という表現には詩人の魂が宿っている。

粥すする侘しい命への未練

永田 俊子

「しがみつくほどのこの世でなかりけり」と路郎は達観したのだが、「部分品がもうおまへんと言われそう」な病に、やはりおののいていた。お粥をすすりながらも執着する生を思えば、俊子さん、老いての健康の何という有難さでしょう。

（立命館大学教授・『上方芸能』誌代表）

自選集

河内天笑

スローモーションで秋の蚊がとまり
ちよん髻を結えば誰でも日本人
ばれるまでしこたま稼ぐ袖の下
悪餓鬼にこんな優しいとこがあり
ライバルに自信持たせてしまったな

小西雄々

点描の花きらきらと秋の画布
牧牛のきらめく瞳秋の海
凡人へ大きい葛籠目に入る
辞書開き前頭葉へ活入れる
古傷に触れると太鼓鳴り止まぬ

小林由多香

停電へくらしのリズム崩される
いい目でも心の中は見抜けない
星影のワルツ歌ってお開きに
メガネなしでも欠点はよく見える
孫からの電話の俺に疑念持つ

太陽の恵み野苺から貰う
彼岸には帰って来いという野菊
いのちつて太いな尊いな古木
波音がとても優しい旅枕
竜胆の藍に道草してしまふ

田中正坊

本当の幸せは今生きている
幸せは自分で紡ぐものですよ
幸不幸 真ん中辺にいる私
幸せな日を思い出す不幸な日
最高の幸せ若さかも知れぬ

玉置重人

順逆の風が冷たい曼珠沙華
補聴器もめがねも替えて翔ぶつもり
巣立つ子のつばさへ青い青い空
木曽路行く馬籠の坂に思案する
山なみが迫る木曽路の露天風呂

恒松町紅

電車から降りると里は無人駅
一つぐらい秘密があつていい財布
秘伝という味を囲んでいる家族
きらきらと漁火湖を自慢する
もう迷う歳でもないと日記書く

斉藤 焔

遠山可住

長男の貧乏くじが頼もしい
ほっとするニュースピールが腹に沁む
祈りという奇跡を医者が知らぬだけ
ねずみにはよく効きました試薬品
ふるさとにつばさ休める森がある

土橋 螢

片棒を担いだ罪が重くなり
いのち惜し明日がわからぬいのちなり
終点の近くで虫が鳴いている
花言葉より美しく咲き誇る
汗の顔あげて笑ってこんにちは

仁部 四郎

入院という禁足で見る鏡
禁書ではございませんが私物です
禁じ手を偉くなったら使いたい
威張りたい人が禁札立てたがる
文明がタブーの顔を差し替える

波多野 五楽庵

螳螂の悲鳴が消えた木枯しよ
症候群足の痺れを如何にせん
雨の夜に泣くのはよそう更紗染
てふてふの脱皮をじつと見てるだけ
雨の日は雨の匂いの曼珠沙華

芳地 狸村

ゴシックのドウオモが誇る建築美（イタリア旅行）
百段の階段きつい洗礼堂
いろいろの倒れぬ工夫のピサ斜塔
特急をバックにカメラ忙しい
橋上にお店連ねる商店街

宮口 笛生

豊作の稲田が揺れる秋となる
コンバイン出番今年も豊作で
コオロギへバトンタッチのすんだ蟬
ビールよりお酒のうまい秋となる
八十も生きた感謝の祈りする

森下 愛論

真っ赤っ赤夕日に明日の夢を乗せ
手探りの長い旅路の陽が沈む
錆びついた心磨いている無心
空き缶を並べて一会の風貫う
残り火を集めて狂う修羅地獄

八木 千代

秋の花 茎も意志持つ美しさ
洗いざらい話して消えた曼珠沙華
手鏡に秋が積もって動かない
ひつじ雲あの日の葬のさながらに
一つくらの秘は墓場まで持つて行く

八十田 洞庵

水子地藏派手目の女祈り居り
口の扉ワインの精が開けにくる
好きなもの何かとおでん長い箸
ぬくぬくと暮らし明日を見失う
ひと芝居打った男のふところ手

両川 洋々

自爆テロやれとアラーよのたまうか
ヨン様の夢追い掛けて妻が翔ぶ
離農した拳句は僕が飢えて死ぬ
ゴキブリよお前もその日暮らししかい
サラ金へ銀行金を借りに行く

阿 萬 萬 的

マンネリな句しか出来ない老いの愚痴
自棄糞で直球ばかりの自己主張
老人の片意地が生む勘違い
べらべらと喋り後悔たまる日々
のほほんとしてると抜ける錆びた釘

石 川 侃流洞

屑籠が宝に見えるサギ師の目
病名はお歳ビタミン剤だけ処方
自爆テロ日本に上陸する話
奥様美人ジーンズはいて甲斐がいし
クローゼット満杯着て行くものがない

板 尾 岳 人

恋なのか毒ある花に水をやり
前略へお元気ですか女文字
パツと咲きパツと散りゆくおとこ花
あの風に尋ねてみようわかれ道
もう少し我慢をしよう失意の日

奥 田 みつ子

季が移る心も移る秋の彩
睡蓮はきつと約束守るはず
ほたる草耳をくすぐる国なまり
迷う時ふと呼んでいる貴方の名
残照見事生きるべし笑うべし

河 井 庸 佑

幸せは今日も爽やか目が覚める
なまじつか持った自信が邪魔をする
ライバルにそつと忠告するゆとり
追い込んで詰めめ甘さに残る悔い
紆余曲折もうひと息と捻子を巻く

川 島 諷云児

点滴のしずく命を弄ぶ
おみくじの吉が未練を引き寄せる
十人十色だからこの世はおもしろい
世話になる嫁と仲良くしておこう
替えどきをくしゃみで知らす蛍光灯

木村 あきら

故 橋高薫風先生に捧ぐ

川本 畔

石一つ投げた波紋の大きすぎ
俄か雨落人のごと雨宿り
橋桁の役を果した亡父偲ぶ

掃除機が俺に向かつて攻めて来る(租大ゴミ)
チツポケな夢追つ掛けて九十年

黒川 紫香

淋しさは夢ばかり見る病床で
淋しかる悲しかるうとうつつから
病床へ電話かからぬ日がつづく
熱引いた顔へ笑顔が覗きこむ
トイレまで電話の声が聞えてき

水滸抄

(つづき)

和歌山県 村中悦男

葉漬けいうが葉で生かされる
あとすこし日が沈むよと鎌がせく
出荷する野菜と妻にない隙間
種が泣く発芽実験される身を

川柳塔五月号誌の中からハラリと落ちた一枚の紙「謹告」を手にし、
哀しみと空しさが私の胸を去来しました。

若き日の薫風先生のごときはよくわかりませんが、山陰の片田舎に住む
私にとって先生は一つの気高き星であり目標でありました。川柳の「詩」と「穿ち」を見事に表現されていました。やさしく上品で暖かいそして
繊細な句風は稀有だったと思います。

何時から先生と接点があったのでしょうか…。川柳の大会ではいつも
私に声をかけて下さいました。座右の句「恋人の膝は檸檬のまるさかな」
の一句に秘かに恋をしておりました。あたかも私が恋人であるような嬉
しさと気恥かしさを感じていたので。

二〇〇二年の国民文化祭鳥取大会では私の句「望郷へどつと崩れる砂
の塔」を最後まで推して下さったと聞きました。そして、その後の鹿野
川柳大会で選者として御一緒させていただきましたが、先生の選は丁寧
で最後まで慎重でした。その時、私の句「木から樹へ月は危うく身を隠
す」を佳句として取り上げていただき思い出深いものとなりました。

その後NHK川柳カルチャーの生徒さん達と松江に来ていますと電話
を下さいました。その際先生と二人で貸切りバスの中でお話をする時間
があり「四万十川」のテーマの川柳大会での特選句について「源流の一
滴伊予を青にする」を編集の方が間違つて「青くする」とされたそうで
「に」と「く」の違いがわかりますかと言われ、私が、「に」には句の
「広がり」と「余韻」がありますと申し上げると、たった一字の表現が句
の抒情を変えてしまうことを話されました。

薫風先生、今、天国のどの辺りを歩いておられるのでしょうか……。
生きるとは、死ぬとは……溢れ出る涙は、先生に届くのでしょうか……。



板尾 岳人 選

西宮市 片山 忠

種を蒔く罪を帳消しするように
ゼロ回答するのも勇氣要る絆
引つ張ってくれそうだから従いてゆく
世の中の恐さを知らぬまま老いる
良心をすたすたにしたニセ募金
長生きでせめてひと泡吹かせたい

出雲市 加藤 スズコ

良い方に取って楽しい風にする
ドッコイシヨ声のリズムが風に乘る
音のある世間に生きて面白い
手の届く場所に安堵の四畳半
八十路越え小さな城の世帯主
陽の当る場所へと動く軽い靴

大阪市 升成 好

勝運は努力の汗に味方する
雨の日のブランコ人を恋しがる
何も無い古里だけど星がある

当らぬが夢は見ましたジャンボくじ

相談に乗ったばかりに不整脈

しまったと天を見上げるのだ仏

札幌市 三浦 強一

惚けぬうち書いておいてね遺言書

聞き役の耳を時時掃除する

かたくなな貝に優しい母の波

子のいない友へうっかり孫自慢

子は巢立ち次は夫を育てて

妻の吹く笛で上手に踊らされ

犬山市 金子 美千代

どんぐりの一つ目覚めた自己主張

スケジュール三人寄ってまともならず

肩書の元が支えている背筋

仲直りしてから少し距離を置き

あれは恋だったか夢の名場面

深呼吸させる魁夷の深い森

鳥取市 中宇地 秀 四

神様に幸せちよつとお裾分け
鉢植えのトマトに愛が赤くなる
あれご覧貴女の星が光ってる
直線もジグザクもまた生きる道
住職が知らぬあの世の話する

鳥取市 横 田 春 名

政治家がお化けに見えて眼鏡拭く
それぞれに屈託抱いた晩御飯
ふと目覚めほっくり寺に参る夢
若い日の生き様糧に歳紡ぐ
人知れぬ小さいミスにああ歳だ

倉吉市 前 田 喜美子

心臓を狙ってくるか恐いテロ
バーゲンのチラシ見くらべ腰あげる
耐え忍ぶそんな躰は古いのか
まじないの如く貼ってる湿布薬
咳一つ両手に貰う風邪薬

倉吉市 酒 井 美美子

初孫が生まれみんなのベットです
きらきらと輝く子にと育てたい
夫から初めてもらおうプレゼント
プレーキをかけすぎ前へ進めない
鍋囲み一家だんらん幸を食う

松江市 山 根 邦 代

不便さに慣れて田舎も好きになる
ふるさとで季節感じている至福
稲穂吹く風が豊作知らせてる
南国のゴーヤ田舎の膳にのり
迷ってもなるようになる風まかせ

松江市 松 浦 登志子

たっぷりと水を飲み干す平和だな
次々と味覚の秋で悩み増え
聞き上手喉カラカラで聞いてくる
無造作に蒔いた種から教えられ
長雨の仕業だカビが私にも

出雲市 川 島 和歌子

師の便り歳重ねても冴えた文字
秘密だと孫と指切りすぐバレる
意地張って夫婦喧嘩に背を向ける
変身に四季折り折りの雲の芸
真実は心の奥に秘めて老い

雲南市 菅 田 かつ子

漬物が縁で親しい勝手口
道連れに知らず知らずと合う歩幅
お月さまふと思いい出す亡母の顔
誘われた風にコスモス首を振り
つゆ草に淡い恋して雨蛙

雲南市 武島 ちよえ

言いがぶつかり合っている残暑

二度三度人の情けに触れました

肩書きが取れて優しい顔になり

鶏頭の種ぼろぼろと風は秋

空元気だけで一日暮れて行き

雲南市 福岡 博利

白雲のむくむくのぼり秋近し

雄大なあの夏の雲万歩計

黄門を面白くみる八十路坂

拾銭をにぎって走った夏祭り

盆が去り玄関の靴さびしがり

宇都市 高山 清子

飲みこんだ一言腹で煮えている

移り行く時の流れが早過ぎる

もめ事があつてチャンスがめぐり来る

結び目がわからぬような意見され

釘を刺しすぎて重たい胸の中

今治市 塩路 よしみ

涙腺の脆さをかくすサングラス

炎えた日は消えて余生の薄い影

来し方の愛を信じて今がある

過去形の話はつきぬおだやかさ

波瀾万丈越えて来たのか札のしわ

今治市 野村 清美

三文の徳は真つ赤な日を拝む

秋の皿もみじ天ぶら盛つてある

可愛いね紳士淑女の七五三

野地蔵のリボン生きてる赤とんぼ

澄んだ空心のウツを吸い上げる

大洲市 花岡 順子

信号の無い踏切に立っている

正直に生きて鏡を曇らせぬ

生真面目へ冗談言つてからの鬱

通いあう心へ言葉などいらぬ

愛されてあなたの視野の中にいる

高知県 桑名 孝雄

回顧録そんな重みのない日記

カーナビを外して夢を太くする

憎めないおとこ微醺と共に来る

俠気を理解していたのはオンナ

仇敵に出会つたように干すジョッキ

高知県 百田 幸

生きる知恵私は雑魚で満足だ

太い手の働きすぎは口にせず

長生きが幸せだとも限らない

色眼鏡野心隠していませんか

手をつなぎ夫と歩いた記憶なし

シドニー 三谷 たん吉

超大国ひと夜で火事場ドロボー国
カトリック人道主義を問いただす
さわやかな避難だったな三宅島
候補者を決める選挙を試みたい
天災は天罰として受け止める

シドニー 坂上 のり子

浮いているだけの地球に神多し
アルバムの余白ゆっくり埋めていく
留守電の赤チカチカとして無言
ゴミ出し日だけでも男いてほしい
デスマスクどうか覗いて下さるな

メルボルン 藤原 ポン吉

アルバムの重さがしみる親の愛
反旗挙げ父が新たに無所属に
子供には養って育てと父叱る
似ているぞ男の料理妻の愛
対岸の火事は上手に消せる妻

昭島市 野口 忠

子を思う心にいつも隠し味
トゲの木に愛生みつける揚げ羽蝶
貯金ゼロ貯水ゼロよりまだいいか
ケイタイは親指一人タップ踏む
ウォームピズとどのつまりは着ぶくれか

横浜市 中尾 哲代

何の絵か分からぬ葉書ありがとう
どしゃぶりに仕立おろしがベそをかく
甘く見た賞味期限にしてやられ
痩せたいと食後の昼寝欠かさない
他人様の話は聞かぬ討論会

横浜市 長島 亜希子

ナイスガイ一票入れる気にさせる
洋服か下着かなんて野暮なこと
運動をさせてあげると使われる
背広より喪服着ること増えてきた
泊りがけあら寂しいと言っておく

横浜市 巖田 かず枝

精一杯生きてる証し汗涙
笑い声他人の子でも心地良い
募集中背中を押してくれる人
日本丸 積み荷多くて漕ぎ出せず
女房が趣味ですなんて言われても

岐阜市 平野 あずま

真実が見えぬ見せないサンングラス
時々はおつかり合って夫婦独楽
煽てには乗らない高所恐怖症
治るとは書いてなかった薬効書
グルメ番組見つつ一人のカップ麺

犬山市 吉田 幸子

顔に泥ぬられて美人保証され
チャンスまだ治癒力がある底力
垣根越し招かざる客葛のつる
報道はひかえてめだか生育地
内緒には出来ぬ瞳の告知板

犬山市 関本 かつ子

アルバムの母はいつでも目をつむり
口取りにもみじを乗せてママの味
見てほしい色でコスモス競い合い
押す人の涙は伏せて車椅子
方言に戻って帰る夏休み

浜松市 杉浦 えむ

遠すぎて線にならない点と点
土砂降りが好きなあなたの靴でいる
にぎやかな街に溢れているひとり
ストレスがなさすぎるのもストレスに
かなしみは暦どおりに癒せない

愛知県 八木 百合子

まん中に座った耳の忙しさを
鈴虫も田舎の風を恋しがり
四五枚の切手で足りる趣味を持ち
お引き取り願いたいのに居る残暑
手引書を読むのに欲しい説明書

京都市 三宅 満子

水割りを溜め息で割り飲む男
みかん汁で秘密の手紙あぶり出し
夕焼けに明日を信じて手を合わす
カブト虫は雄がちやほやされている
一瞬に消える花火の持つ無常

京都市 清水 英旺

野菊好き私も好きと妻はいう
鹿おどし煙雨の庭に芽えた音
送り火の炎にゆれて霊かえる
早朝の散歩いつもの人が笑む
里芋の葉に朝露は丸まりて

大阪市 若月 祐作

味なことやる女だと惚れてみる
ジバングの駅弁求め旅に出る
立つときも座るときにもどっこいしょ
宿坊の葉草膳で胃を清め
髪の毛は減っても鼻毛伸びてくる

大阪市 中井 萌

叫ぶのもそよぐのも良し風の音
研ぎ汁は流さず花のご褒美に
お金より愛さえあればなんてウソ
こけてから周り見回すまだ女
病院で会い元気かと聞かれても

大阪市 伏見 雅明

仲違い無言で啜る渋いお茶

渋い顔も一緒に詰める熨斗袋

まな板の鯉が暴れて虎を食う

よい汗を掻いて明日が見えてくる

浅漬けが出てご馳走を締めくくる

大阪市 吉川 弘泰

かあちゃんよ税を含んだ小遣いを

財布内一葉 諭吉恋語り

リストラで妻と一緒に鍋つつき

肌の艶化粧しすぎて粉飾に

女専車の化粧のにおい窓開ける

大阪市 三浦 千津子

ありがとう明日も予定がある至福

わたくしに応援歌花の芽が伸びる

未完の絵抱き晩成の夢見てる

雑学で拾う処世の裏表

一本気 良くも悪しきも個性です

大阪市 尾崎 黄紅

出すまいか出そうかポストまできても

人生は乳母車から車椅子

紙芝居屋の鮎の旨さは忘れない

お互いに厄介者でめおと愛

聴き流すだけの度量は持ってます

池田市 多田 契子

ラブラブが狼になる核の傘

捨ててみる枠はめてお付合

朱の月が思わせ振りで眠れない

私をぞくぞくさせる非売品

信号を見て下さいと赤トンボ

池田市 上嶋 幸雀

貧富の差なくて喉越しいいビール

嫌われた毛虫今では蝶の舞い

蝉時雨止んでしみじみ四季の国

鳴くだけは鳴いたと蝉の大往生

爛酒は未だ未だ先と言う残暑

泉佐野市 備後 三代子

戦争と平和歩んできた命

虫の音も軒風鈴と二重奏

あやふやで読めても書けぬ字の多さ

手術台一部始終を耳にして(白内障手術)

夏休み過ぎてがさがさ冷蔵庫

泉佐野市 稲葉 洋

戦争の被告で一人蚊帳の外

北の国かつて似たよな孤独感

母国語の利益共通語の道理

我こそと名乗る奴こそある打算

物忘れするたび老いの負い目増え

河内長野市 印藤 智子

八月の三度の食事ただ感謝
文次さん飄々として天の道
蓮の実を食べて戦後を語り合う
挫折して弱者の側がよく見える
憧れた彼も私もセピア色

河内長野市 木太久 正一

六十年平和日本の金字塔
熊蟬の声ばったり止んで夏がゆき
半袖の遺影に偲ぶ文次さん
老老介護テレビが見せる夫婦愛
党首討論わけの分らぬ総選挙

岸和田市 堤 植代

背のびして威張って歩く腰痛症
ひとつでも若く見られて御満悦
郵便のポストの色も替えますか
投句すみ宿題終えた子の気持
テレビ欄赤丸つけて待機する

堺市 奥 時雄

うれしくはないありがたく思う古希
七十年逆さに振れば江戸末期
へそ出す子 妻は美人と認めない
一瞥もくれず美人は通り過ぎ
猛犬のシールの下でチワワ吠え

堺市 荻野 像山

朝寝して昼寝たつぷりして元氣
雷 親父 怖くないので臍出す娘
褒めとくと酒が勝手に出る夕餉
リハビリでお連れをつくる社交性
招待状 妻ご指名で来る特価

堺市 大久保 伸子

湧きあがる雲に力をもらつてる
鎮魂歌^{レクイエム}低く歌えば臉に熱し
情のある言葉にころりだまされる
冗談の中に本音をちらつかせ
夕焼けは人をやさしくしてくれる

堺市 羽田野 洋介

亡き母の結び目残る大掃除
希望するだけじゃ扉は開かない
ほろ酔いの頃がホントの本音かも
今日もまた悲喜交々の帰り路
自分史はいまも昭和で書いている

吹田市 二宮 栄子

姉の汗混じって届く無農薬
夏ばてが寝てな寝てなと甘やかす
冗談が誤解招いた日の不覚
前向きに生きるつもり趣味の風
はいと言う姿勢に心なごまされ

高槻市 佐 甲 昭 二

すり切れた心に派手な服着せる
ぬかるみの中でもがいている野心
遮断機がゆっくり降りるから迷う
すっぱりと失意を隠す夏帽子
人脈を上手に泳ぐ出世魚

高槻市 大 崎 侑 子

熱帯夜はかなき願い水を撒く
化けるにもほどがあります厚化粧
化けの皮はがれてるのに無視続け
冷酷に化けても見せる親心
淑やかに見せたかったが化けそびれ

富田林市 古 田 千 華

礼節を知らぬ親子が氾濫し
衣食足り地上に舞うは世の乱れ
梯子掛け掬いたいよな秋の空
口ベタで書いて納得してもらおう
秋空を仰いでシャンと曼珠沙華

寝屋川市 岡 本 勲

とぼけてるようで胸刺す父の喝
愛情をくるりと返す目玉やき
錆びた愛夫婦で研き生き延びる
愛してる毎日言うの変ですか
あの雲に乗ってふる里帰りたい

羽曳野市 森 下 一 知

万屋が消えて近所の風激む
長生きの想定外に老母が居り
夫婦駒ぶつかる頃が華だった
立ったまま眠るピエロの舞台裏
食べ切れぬ野菜もらった不快感

羽曳野市 仲 谷 真 一

子に託しあなたの夢は叶うかな
名月が叶えてくれと叫んでる
いちじくの葉で前隠す創世紀
クールビズ次の流行ウォームビズ
空っぽのダムが野分けて満杯に

羽曳野市 吉 村 久 仁 雄

着せられてじわつと温い親の恩
有線のジャズに稲穂が揺れる里
潮時を逃がして夫でいる決意
遅咲きの誓いが今日を楽にさせ
ありがとうゴメンが言えて好々爺

枚方市 二 宮 紫 風

台風が去って秋空模様替え
ひまわりが夏惜しむよに自己主張
夏やせも夏バテもなく夏終る
秋色のおしゃれ宣言ダイエット
秋の夜を奏で始めた虫の声

枚方市 伊達郁夫

言い過ぎて白けた後にある孤独
優しさにいつか優しさ返したい
途中下車日本だんだん広くなる
風船の萎んだ姿にある虚脱
信号が思案のうちに青になる

藤井寺市 西村栄一

青くさい意見の好きなコップ酒
青筋をたてれば負けた事になる
しみじみと論せば私やりました
七輪のサンマ昭和のひとつぐり
まったりとした含み煮は京の味

藤井寺市 伊藤アヤ子

台風に足止めされた里帰り
暴風は街を瓦礫にして逃げる
初秋の風に揺れてるそばの花
人々は十人十色に苦慮をする
まだ達者敬老会の仲間入り

藤井寺市 増井ヨシ枝

子の影もない公園にチャイム鳴る
願ひ事いっぱいあるのに神無月
聞くだけで元氣出るなら長電話
朝焼けに亡父の格言傘を持つ
曼珠沙華白い日傘はきつと亡母

箕面市 寺井柳童

猫拾う子のやさしさに親は負け
出生地教えてくれぬうなぎの稚魚
球拾いさせたらチームナンバーワン
患っているから元氣医者通い
六十年 戦勝国も六十年

八尾市 脇俊子

甘辛のドラマ抱えて古希迎う
価値観は違うが共に笑い合い
足元がゆらぎ始めて椅子探す
カタカナ語右脳が拒否を始めてる
コップから喜色満面踊り出す

八尾市 赤木妙子

携帯必需金銭眼鏡保険証
青田風 遠い記憶を吹き寄せる
若さというそんなぜいたくあつたとは
母は母の娘は娘の味に卵焼く
この辺を居場所と決めて杭を打つ

八尾市 松葉君江

復習を父の哲学から学ぶ
親譲り短氣世間をせまくする
台風よ来るな稲穂が実を結ぶ
子を育て喜怒哀楽を堪能す
引き出しをふやし余生のパネにする

八尾市 田邊 浩三

魯かしが裏目に出たか民営化
念のため裏を返してみるお札
茶断ちより禁酒がいいと妻は言う
サラサラを求めて今朝も黒酢飲む
行き先は手押車に聞いとくれ

八尾市 田中 トシエ

子に見せるホタル一泊二食付
青春の思い出に遇う古本屋
母と子の心の窓は開けておく
一合の酒がそっくり喋り出す
言い分けを結び直した靴の紐

大阪府 畑中 節子

途切れつつ祭音頭を運ぶ風
季の移り早すぎますよ法師蝉
蝉だけはやる気まんまん鳴き通し
漆黒の夜を焦がして大文字
玄関の段差が呼んだ救急車

大阪府 神野 千恵子

少子化になって子宝とは言わず
哀しみを笠に隠して風の盆
六十年 時の流れで済まされず
車窓から明かりが消えてふと不安
枯れてなお存在感のあるススキ

神戸市 木村 忠義

アドバイス素面で言つてほしかった
どの花もきれいに見えぬ日であった
物差しは持ち歩かないことにする
迷ったら心の奥の声を聞く
お隣の留守いっばいに窓開ける

神戸市 山田 婦美子

生きている証白髪が増えている
人生の定規は親に当ててみる
喧嘩して泣いて笑つてまだ夫婦
財産はないけど強い夫がいる
一匹の蚊がいて中断する話

神戸市 田中 章子

旅先で妻はおんなになる自由
おはやしのリズムいつしか踊りの輪
激流にまあるくなつた石の旅
まだまだと京都で茶漬すすめられ
まなざしで支え合つてる友と友

神戸市 両川 無限

人間の証だ喉がすぐかわく
幕おろすまでに逢いたい人がいる
八起き目に挑む妥協のない一步
素顔では何もひらめかない女
ちっぼけな悩みだったね青い空

相生市 村木信子

歳月が削ぐ柀の刺バラの刺
カマキリの愛の成就へ挽歌聞く
より添えば嫉妬の影も闇に消え
甘すぎた読みへ火の乱風の乱
いんぎんな土産に揺れる妥協案

尼崎市 桑原東園

好奇心窓から覗く赤蜻蛉
近付いて来た幸せに気が付かぬ
褒められて黄昏の帰途足弾む
読んでいた本を枕に高軒
水中花 汗拭く客をお出迎え

尼崎市 河津正治

鈍行の旅情に浸るフルムーン
思惑があつて捨て石とはさせぬ
真実を話せば絆揺れ動く
髪染めていきいき妻の旅支度
嘘ひとつ玉虫色の下心

伊丹市 延寿庵野鶴

百均で息抜き夢も買ってくる
心境がわかれば誰もある長所
百薬の長とっては美酒を酌む
感情を抑え反論ねじ伏せる
軸足が甘いことばにじっと耐え

三田市 堀正和

ゆっくりと六法全書妻が読む
用件は一筆箋で済む程度
古希だけどまだ働けという拳
休み明け初心に戻る白いシャツ
一年の鬱置いてきた旅の宿

西宮市 石野照代

周期です私の断層動き出す
砂時計いつも素直と限らない
花火終え星は主役を取りもどす
短命のむくげに一つ願ひごと
風鈴が任期終了秋つける

奈良市 乾春雄

説教より正座の痺れ効いてくる
男の胸に女の知らぬ地図がある
風変える嫁のテンポに乗ってみる
句読点やたらと多くなる余生
影連れて帰るひとりの靴の音

奈良市 矢野良一

久々に心休まる雨の午後
罌雲 稲の匂いに秋を知る
露草が咲いて路地にも小さな秋
さよならも言えず別れた御堂筋
勇を鼓し正論吐いて孤立する

和歌山市 根田 よしこ

年齢かなあお伽嘶に癒される
月見にはうさぎ出稼ぎ餅をつく
すっぴんで夏は極楽汗っかき
台風で稲穂守れず泣く案山子
笑い上戸長生きすると決めている

和歌山市 山田 侃太

低音の風には礼をしてしまう
信号で止まった夢が動かない
わさび漬け仕込んで男嘘をつく
おふくろを乱れ太鼓にした月夜
アマゾンを行くと科学の外に出る

和歌山市 坂部 かずみ

サンダルの素足に染まるさくらいろ
自立して空の容器を持って来る
夏バテの体内時計電池ぎれ
友達が思い出話掘りかえず
プライドも捨てて負けずと背を伸ばす

和歌山市 たむら あきこ

ストレスへ梯子ときどき踏み外す
こめかみにさみしさが棲む庭がある
あなたへは通行人を演じ切る
十三夜 笑ってしまうような恋
風鈴を鳴らして夏を遠ざける

和歌山市 柏原 夕胡

とんぼさん昔ばなしをしましうか
しし座生まれだけれど弱いおんなです
宇宙から見ればたいしたことでない
生きているかぎり舞台を降りられぬ
全開の窓へ油断をしてしまう

田辺市 大峠 可動

生きたとは平等思想の巡礼よ
極楽を銃口にして百度石
老いじたく大志の夢は添加物
慟哭の喪服残して秋の風
天も地も人も真夏はみなピカソ

和歌山県 森下 よりこ
(順子改め)

クールビズ男のおしゃれ試される
おしゃれ心少しは残したい老後
軒低く女一人が暮らす家
調子づいてマイクが手から離れない
老斑が増える洗っても洗っても

和歌山県 木村 徑子

お達者の秘密ストレス飲んだ顔
あざ笑う草追っかけている戦
スニーカー追いつ追われつ萩の道
鬼やんま翼休めに行っただきり
満天の星に魂吸いこまれ

鳥取県 松川行男

高齡を今から騒ぐ三歳児
日本海見せたい波をかぶりつつ
追求は一円足りず帰れない
おお恐いうしろの人がいつか押す

鳥取市 山口千代子

子等集い米寿祝ってくれた幸
これが最後と無理を承知で旅に出る
秋風が悲しいほどに胸を打つ
満月が亡母に見えます亡夫に見え

鳥取市 岡田信恵

笑顔こそ第一印象良くもする
里帰りいたれりつくす母の愛
目線かえ良い面ばかりみつめてる
蛙の子親のルールに乗りおくれ

鳥取市 河田のり代

粗大ゴミと言われて早く五年経ち
友情に慣れて甘えて人恋し
泣き笑い馴れた道にも愚痴が出る
虫の音に粗大ゴミの身酒交わし

鳥取市 近藤秋星

名月も虫の合唱聞いている
わが庭にいつしかひそと来てた秋
故里に我知る人は減るばかり
一生に何度死んだかわからない

鳥取市 谷岡清子

流れ雲父母にて消えていく
身の丈の幸せよしと夫の顔
過去は過去 今日が大事と飯を食う
人生は浮いて沈みの繰り返し

鳥取市 森美智代

出来過ぎのキャベツ畑が死んでいる
ウォームピズそろそろカイロ買つとこか
百円でキャベツを二つ買ったけど
同窓会仮面は家に置いてきた

倉吉市 前田三津子

大根を干してふる里待っている
満月を乗せるに小さ過ぎる皿
内容の薄い会話でリラックス
大声もラッパに消える世のこわさ

境港市 中井虎尾

民営化切手の値上げするしない
少量のわたし年中日本酒
八月の思い出昭和涙いろ
おどろいた真面目な人がジョーク言う

米子市 猪森スミエ

一呼吸入れてそろそろ練る思案
尺八の音色首振り三年から
ローカルの汽笛が響く青田風
足腰に湿布を貼って今日終る

米子市 小塩 智加恵

胸痛む親に似てない丸い顔

テレビから浴衣たためぬ女の子

バーゲンの値札信じる女達

五歳の差妻の食欲僕の倍

鳥取県 橋谷 静江

吹いている笛に気乗りのせぬ仏

ボスの吹く笛にはついて行く覚悟

神経痛私の体攻めている

愛犬に癒されながら暮す日々

鳥取県 岩崎 和子

罪と罰かき消すような今日の雨

起きざわにそっと涼風吸つてみる

かぶと虫命をつなぐ西瓜吸う

爪だけはいつも忘れず伸びて来る

府中市 藤岡 ヒデコ

豪快な兄にもあった裏おもて

兄の死を引きずったまま秋になり

納骨の読経の道や彼岸花

胸に棲む兄に凭れて秋をゆく

府中市 岩本 雅代

打算にはなかつた風の回り道

赤トンボ豊作だよと群れでとぶ

賞罰のない人生で茶がうまい

愚痴言わずべんとう箱を洗う役

真庭市 矢谷 富士野

夫遺産年金という有難さ

困ったな急に好きだと言われても

六十年戦艦大和の子も八十路

足の裏見せて横綱土俵入り

広島県 馬場 利子

野の広さ覗いて迷う虹の雨

傷一つ抱くと抜けない棘の数

息ぬきがしたくて好きな花を買う

綻びた軍手を笑う花鉢

出雲市 荒木 英子

老いて今ジーパンはいて変身す

中国は西湖のほとりウォーキング(杭州人造湖)

爽やかなコスモスの花恋しがる

朝顔も種ほころんで終り告げ

安来市 原 煩惱児

敗戦忌ああ仏飯をてんこ盛り

燃ゆる恋されども所詮彼岸花

子を生まぬ恋の響きか彼岸花

日傘差し稲刈る日本平和だな

東かがわ市 向山 治延

温室の光は花を狂わせる

夕焼けで紅葉色増す露天風呂

健康が何より嬉し老いの秋

いやな事胸におさめて波立てず

今治市 渡邊 伊津志

手抜きした口に真実見付からず
葛藤の中で創造された奇手
胸中に流す苦渋の玉の汗

許し合う笑顔で愛を見つめ合い

唐津市 岩崎 實

勢いがありあり見えてトップの座

スピードが貫く時代老いてゆく

医療費のお知らせ二人比べ合い

甚平の肌に初秋の風を入れ

取手市 葛西 清

出さぬのに頬つぺた叩く人がいる

行間を読んでもやはり白いだけ

互いの不満まかせておけと洗濯機

閉めようとすれば飛び込む虫の野次

日立市 加藤 権悟

冠雪の富士が日本の貌にする

日本の未来を担う七五三

激辛のジョークも愛だなどと思う

柿すだれ視野にふるさと近くなる

東京都 井上 つよし

人生の遮断機鳴るぞさあ急げ

集中豪雨 神を怒らす温暖化

天井の木目に明日の夢を描き

ケータイでビール冷えたか確かめる

国分寺市 野崎 勝

サーピスのネットの裏にある打算

コスモスが揺れる故郷への切符

過去は過去今前向きに生きてます

待ち人がなかなか来ない遠花火

草加市 飯土井 健翁

プライドは汗で暮らした九十五

辛酸を舐めた男の笑い顔

春と秋 庭師の鉄リズミカル

アメリカが大和魂持つて行き

横浜市 川島 良子

外見も粗末にできぬ歳となる

人見知り知恵が進んできた証拠

蟬しぐれ自分さがしの旅に出る

挫折した事などきつとないのだろう

横浜市 金森 徳三

日焼けした月が出て来る熱帯夜

暴力になってしまった愛の鞭

大関に鞭を打ちたい心技体

目出たさも余命気になる喜寿の歳

横浜市 布山 嘉信

虫の音と名月愛でる月見草

おしゃべりを犬が寝て聞く散歩道

和食膳食べるに惜しい花模様

毒を持つトリカブトには罪はない

佐渡市 高野不二

二日目はもう嫌われる雨が降る
俺に似たらしいと孫をほめている
遊び過ぎ働き過ぎと同じ風邪
外人に負ける角力は見たくない

静岡市 中西雅

激辛のカレーに汗の味が浸む
長生きをしてねと言うはみな他人
母の日にやさしさをくれる嫁の愛
あの人に心盗まれ数十年

京都市 榎本宏子

これで終いこれで終いと旅に出る
心ない一言積んだ石崩れ
デコボコなやりとりして立話
カスミ草四角い花器は落ちつかぬ

大阪市 池上清治

森光子少女に化ける身の軽さ
化けてでも若い体に戻りたい
知らぬ間に奨学金は酒に化け
サラ金の儲けティッシュで吸り取る

大阪市 中村れんげ

同窓会光る頭に過去を見る
ご先祖と心の対話平和です
川柳を読んで作者に会いに行く
ああ今日も生かされましたお茶をのむ

大阪市 平嶋美智子

動けぬ蚊布団の上のたいこ腹
赤とんぼ羽すけて見る青い空
勘違い増えているねと子に言われ
勘違いするも限度か物忘れ

大阪市 寺井弘子

久方に童心になる同窓会
宝石は見ざる買えない通り抜け
きつかけを掴む気のないバラサイト
君と僕 花火で肩が触れた縁

大阪市 平井露芳

巨人軍不滅のはずが亡びかけ
欽ちゃんもう脱がないと野球拳
継続は力か水煙四十年
お化けでも出るのか売れぬ一戸建

大阪市 吉内タカ子

夏枯れの紅葉に秋芽赤く見え
催促の犬の散歩で早く起き
同志愛 誘いの旅が待ちきれぬ
足跡を恋しく慕う薫風師

大阪市 中村忠敬

内視鏡エコーCTフルコース
ハンガーでわが分身が疲れてる
ゴルフ会 教え魔一人いて困る
天からの授かりものと子沢山

泉大津市 助川和美

姑ともう五十年お付き合ひ

二期の教室にいる昼寝の子

一人だと寂しいでしよと決め付ける

もつたない皿も割れない口喧嘩

柏原市 伴 洋子

裏切りが今も尾をひく人嫌い

あわてん坊 誤解曲解早とちり

束縛を嫌う男のフリーター

娘の前で本音を言えぬはずもない

門真市 矢阪英雄

ロボットも健康重視ランニング

ロボットも団子一串月の夜

定年で中元歳暮火が消えた

定年で早寝早起き続けてる

河内長野市 内海綾乃

選挙時知らない人が挨拶す

外来魚にメダカが追われ可哀相

被害が出て企業あわてるアスベスト

ヤミ専従 身内に甘い大阪市

岸和田市 林 力子

お布施読み坊さんお経短かすぎ

長い足こごとばかりミニが行く

罪よりも人権ばかり重視する

薬より野菜が効いたダイエット

岸和田市 中岡香代

ポツクリを申し込んだと祖母が言う

一杯のビール目当ての風呂上がり

オレオレの役者が上で騙される

犬猫の味覚も肥えて肥満体

岸和田市 坂口英雄

週一回仕事をくれる庭の草

塾よりも寺子屋ほしい今の子に

日本列島欲と不満ではちぎれる

秋夜長ゆつくり飲める一人酒

岸和田市 森元ふみよ

留守電に詫びを伝えて頭下げ

元帳が栄枯盛衰知っている

認知症大丈夫かと脳に聞き

子供等は遊ぶ相手に予約入れ

堺市 阪井智之

野の道を亡母と歩いた手の温み

比べること止めて人生楽に生き

気がつけば妻の手中で遊んでる

忠告をすんなり聴ける友がいる

摂津市 もちづき 遊美

若者よ老いればみんな障害者

森減らし夕昏れねぐら奪い合い

娘たち嫁母姑候補生

地球人この星こわしどこへ行く

高槻市 安田 忠子

鳥一つ買いたくなった瀬戸の旅

深緑のハイジの里で時忘れ

アイガーに心洗われ時止まる

ラブシーン町のあちこちデンマーク

高槻市 住友 佳一郎

貸衣裳自分が他人になれる時

チャリティーといえど本音は金もうけ

その自信過信となりてふり出しへ

税金でそりやおまへんで空残業

豊中市 源田 啓生

小さな渦大きな渦を避けて行く

知性とは妥協か軸先変えている

気が付けば昭和の鎖長く引く

宇宙という藪に蠢く命かも

寝屋川市 森田 れい子

風を避けハードル下げて跳ぶ余生

留守電にしてゆっくりと秋刀魚焼く

両親の馴初めなどを聞けぬまま

黄泉照らす万灯のごと菊白し
寝屋川市 北田 ただよし

あの世では父には確と恩返し(父五十回忌)

あの世では父と二人で山歩き

あの世では父と夜長を酌み交わし

あの世では父と静かに語りた

羽曳野市 松本 静子

風の盆 八尾の踊り手振りよく

赤ちゃんがあくびをしたり笑つたり

古里の秋の風景眼に浮かぶ

処暑という季節迎えて虫の声

羽曳野市 永田 章司

クーラーと仲良くなって風邪をひき

必然を偶然にする恋の知恵

弁解をしても答は変わらない

消しゴムで消したい記憶深い傷

東大阪市 今岡 貞人

落語なら許してやれる覗き趣味

フィナーレは河内男の名調子

愛というたつた一つの拠り所

還らない刻ばかり追うちぎれ雲

東大阪市 大塚 サキ子

ビルの窓落日うつし燃えている

手作りのカレンダー持って見舞客

混浴に話上手な湯治客

ホオズキが墓石に似合う盆参り
東大阪市 米田 水昇

雷鳴は死者の叫びか原爆忌

なめらかに一日を送る冷やっこ

神の牛心のなごむやさしい目

怒つても顔には出さぬ鬼の面

枚方市 小川 良吉

目に見えぬ空気がただき今朝の膳

巨木抱き靈氣を貰う高野山

幾山河 空気のような妻となり

険悪な空気に夫はすつと消え

藤井寺市 吉田 喜代子

砂浜に夏のなごりが落ちてゐる

新米に太るこわさをつい忘れ

妻か母夫は天秤かけられる

秋深し無学助けるほろの辞書

藤井寺市 俣野 登志子

恋の花咲かせてみしよう枯木にも

亡母の味もう諦めたわたし流

まだ六時静かにしてよ蟬しぐれ

タップリと低い鼻にも日焼け止め

八尾市 西川 義明

車から見ればチャリンコ邪魔に見え

蟹食べている時話しかけないで

贈物一番先に見る期限

月末に母からうれし義援金

八尾市 寺川 はじむ

挑む気へ勢いすぎて足もつれ

手短かにと言われ領きつつ祝辞

八分目に決めて三日が待てぬ腹

褒められて図に乗り梯子外される

八尾市 中島 春江

セールスに咄嗟の嘘も板につき

駐輪の道を狭めて秋暑し

梨を剥く娘の姿亡母に似て

倅せはほどほどでよし秋刀魚焼く

八尾市 笹倉 ひろし

コンピニの隅で買手待つ二ギリ

カリスマの社長の夢は無量大

どの顔もやさしく見せる選挙戦

強権の国家をほかす美女の群れ

大阪府 西川 冷子

台風之余波まで混じる土用波

花になり蝶になりたや秋の風

高原の秋茄子冴える濃紫紺

鴉さえ寄らぬ渋柿色を増す

大阪府 小栢 こずえ

日が暮れるつとめを終えた安堵感

遠まわりしても混まない道を行く

結婚をせずに闊歩をするヒール

長時間かけた仕事に老いの自負

大阪府 池田 岩夫

つつがなく生きた歳月誇りたい

普通車で駅弁つつく一人旅

流された赴任の先で知る情け

名案があつても金と力ない

大阪府 高木 道子

一度だけ買えばカタログ攻めてくる
雑草は意地と差別で強くなり
生きて行く荷が重たかる蝸牛
とりあえず訳が聞きたい日本語で

神戸市 武田 恵美子

車窓より雀にまたねとご挨拶
すず虫よ そんないい声ほしいわよ
嫌な人パタツと出会って傘横に
犬だって流行追っている世相

尼崎市 小池 幸子

喜寿にして今も自分の齒で食べる
何事も挑戦好きで恥も搔く
蜻蛉飛ぶ残暑はあれど空は秋
一人住む秋の夜空の月の冴え

尼崎市 古川 正子

何処から聞こえる虫や秋の風
柿の実を見つけた朝の散歩道
心ブラと言って出掛けた青春期
月ヶ瀬という甘党の店今いずこ

池田市 北出 北朗

電灯の点る平和の有り難さ
八月忌臉に滲む百日紅
お日様の欠けらコロコロ蓮の露
水澄んで映るものみな潔し

篠山市 永井 かほる

ライバルに抜かれ抜いての遠い日々
ライバルも消えて思い出よみがえる
秋野菜蒔くせわしさに夢も湧く
蒔く時に連作気にしへらしたり

篠山市 谷田 多美子

忘れたい事引きずって冥途まで
噂話 尾緒がついてもどつて来
働いた思い出遠く仏間の灯
賞味期限切れるまでにとお素麵

三田市 阪本 藤朗

穏やかでよかったよかった空の旅
流行の色が明るくなるらしい
指きりを孫はあくる日覚えてる
進歩するその裏側に目を瞑り

三田市 中村 和代

月曜は平和に夫送り出す
いざ住めば寂しいかもね片田舎
健康な妻で結局安上がり
柔肌は誰よりも蚊が知っている

三田市 石原 歳子

おめでたが続き懐寒くなる
縮んでる身体に伸びをして起きる
友に逢う前にアルバム出してみる
懐かしい人に出会った遠回り

三田市 辻 開子

絵手紙で届いた向日葵元氣くれ
目覚めよし朝日も拝め調子よし
カード増え財布はちきれ脳バンク
冷コーをホットにかえる秋の風

宝塚市 丸山 孔一

人家なくカウベルの音風運ぶ(スイス旅行)
年毎に昨日は遠く明日近し
専用車歳の制限ないですか
梅雨明けの墓石やたらと白く見え

西脇市 七反田 順子

白いバラ一億人に送りたい
その手には乗らないカード持っている
夕立に蟬も私もあわててる
三歳児うかつに言えぬ訳がある

兵庫県 黒崎 美紗子

涼風が連れて来たらし旅プラン
すっきり気分させる墓まいり
あの人も髪にマニキュアしてるとか
種まきの働く元氣もらう雨

兵庫県 岩本 美緒子

初発行の寂聴署名戴いて
ご馳走さま猛暑へ義理の三度食
クーラ止め物騒だけど網戸のみ
序でなど無理か一つに行き来する

生駒市 小西 稔

古稀過ぎて挑む力がもりもりと
美人画も昔と今は様替り
看護にはやさしい言葉愛の手を
万物にやさしいこころ伝えゆく

橿原市 藤永 実千代

美人でも無いのに虫に狙われる
納得のいかぬ言い訳宙を舞う
チャネルを変えて戦を遠ざける
微力ではあるが無力でない我等

和歌山市 寒川 武

私より生きるペットは飼えませぬ
箱入りの書にも付いてる正誤表
通行人Aがわたしの初舞台
社長職退いても口は出してくる

和歌山市 土屋 起世子

ゆれ動く心の窓を覗く猫
太陽も友も味方に赤とんぼ
善人を演じ疲れのくる舞台
よく喧嘩それでも仲のよい夫婦

和歌山県 辻内 次根

秋の空 座右の銘はあるがまま
本くらい読みなさいよと不眠症
見上げると何時も流れる雲がある
乗るように努めています赤字線

(村中悦男氏の句は57頁に掲載)

愛染帖

新家 完司 選

姫路市 古川 奮水

デパートの椅子でうたた寝して帰る

(評)このような人が増えても困るので、デパートには申し訳程度の椅子しかない。

札幌市 三浦 強一

双方の意見を聞けと耳二つ

(評)なるほど、そうすると口が一つなのは「双方に違ふことを言うな」ということか。

大阪市 渡部さと美

エプロンでちよつと庇える秋の冷え

(評)薄着の肌を感じる、かすかな秋の気配。表現し難い微妙な感覚を的確に具象化した。

鳥取市 福田 登美

緑内障静かに生きることにする

(評)静かに生きると、慌しく走り回っている人たちの荒んだ心が見えてくる。

堺市 奥 時雄

蚊に限り種の絶滅を認めたい

(評)蚊も何かの役に立っているのだろうか。絶滅すると困ることがあるのだろうか？

猛台風進む先には母がいる
シドニー 坂上のり子

萩の庭母の背中が見え隠れ
東大阪市 中岡 妙

一本の藁さえ落ちてない都会
高知市 小川てるみ

反省をしないところが似る夫婦
東大阪市 谷口 義

掌が湿るまだ雑念があるようだ
尼崎市 田辺 鹿太

耳元で歯医者のおなかグウとなる
西宮市 牧渕富喜子

思いあたってふと仏壇を掃除する
藤井寺市 太田扶美代

寂聴でさえもわたしを癒せない
涙腺が弛むと何もかも揺れる
泉佐野市 稲葉 洋

寡夫となりさて知らぬ事出来ぬ事
店屋物食う仕儀となる老いひとり
藤井寺市 鈴木いさお

手酌にも慣れたヤモメの三年目
羞んで飲むつもりのはらは下戸という
和歌山市 桜井 千秀

八九十月通った歯科耳鼻科
手際よく座り直して逃げ支度
藤井寺市 若松 雅枝

タクシーで帰る誰かが狙っている
明日の糧こと欠かぬのに不眠症
藤井寺市 若松 雅枝

誉め言葉器大きくして受ける
退屈という警戒にまだ慣れぬ
榎原市 居谷真理子

あと少し足りぬところにコンセント
尻尾振ることも覚えた三歳児
和歌山県 三宅 保州

退院の万緑薫る中に立つ
二度の職老妻ひとり待つ家路
尼崎市 山田 耕治

納得の早い男に頼まない
人間を嫌う野良猫さらわれる
松江市 三島 浜丘

節水の宣伝カーのゆく暑さ
セミの声かき消してゆく救急車
東かがわ市 木村あきら

乗り降りの順番すぐにゆずる質
しんしんと両の耳からしみる秋
和歌山県 辻内 次根

線路変更夫に届け出しておく
間違いのファックス電話してあげる
寝屋川市 籠島 恵子

日に三度拝む形で座る膳
夕風のように余生の庭弄り
鳥取市 福西 茶子

台風をくぐり美味しくなるりんご
クーラーをつけよか扇風機でいいか
弘前市 櫻庭 順風

豊中市 安藤寿美子

落ちてゐる小銭は天の贈物
堺市 志田 千代

花火果て人の匂いの戻る風
交野市 田岡 九好

魚だつたころの記憶がまなうらに
和歌山市 木本 朱夏

夕焼けに向かつて走るほかはない
鳥取市 土橋 螢

戦友と思う日もあり一つ屋根
富田林市 池 森子

ハンゲルを習つてみると妻が言う
吹田市 穴吹 尚士

独り言くらい勝手に言わせてよ
大洲市 花岡 順子

いかがわしくて嬉しくなつた駅の裏
弘前市 高瀬 霜石

昨日今日のんびり生きて麦のめし
大阪市 岩崎 公誠

説教より正座の痺れ効いてくる
奈良市 乾 春雄

ひらめきのない脳抱え暇なベン
大阪市 小泉ひさ乃

皮下脂肪溜めてしつかり冬支度
堺市 加島 由一

近いからまだ行つてない観光地
兵庫県 中上千代子

似た者夫婦わたしが似せているのです
樺原市 安土 理恵

仁王さんみたいに怒る不遜にも
寝屋川市 森 茜

怒つてもまたかと妻は慣れたもの
枚方市 海老池 洋

後輩の大きな花火みて飽かず
鳥取市 徳田ひろこ

魂の奥にあるのは不発弾
美祿市 安平次弘道

笛を吹く人が多いのも困る
米子市 政岡日枝子

なあ雲よいざれば乗するつもり
美作市 小林 妻子

永代供養頼んだ寺も無住なり
三田市 北野 哲男

村があり働き手いて大鳥居
唐津市 仁部 四郎

縁側が犠牲になつて3DK
富田林市 片岡智恵子

不妊治療進めど減つてゆくベビー
黒石市 相馬 一花

錦鯉みたいなドレス行く銀座
鳥取市 美田 旋風

金欠病を知つてか詐欺師近寄らぬ
富田林市 古田 千華

礼節を忘れた親に似た子供
大阪市 小谷 集一

革命はもう起こせない日向ぼこ
大阪市 小谷 集一

丁寧な爪にやすりを当てて秋
弘前市 宮崎ヒサ子

古稀ですが捜しています惚れ葉
大阪市 奥村 五月

あるだけの鉛筆けずりまだ三時
八尾市 井尻 民

虫集く宇宙にアルファ波が満ちる
海南市 堂上 泰女

礼儀正しい街だ背筋がしゃんとする
大阪市 前 たもつ

私でいる息を吐き息をつく
尼崎市 長浜 美籠

たつぷりと聞いてもらつて眠くなる
西宮市 西口いわゑ

寄せ書きの大樹の葉っぱ皆家族
唐津市 岩崎 實

軋ませて素足がよろし木の廊下
和歌山市 古久保和子

今電話しても良いかとメール来る
堺市 矢倉 五月

つっぱった心を溶かす絵の具皿
香芝市 大内 朝子

お互いに隠す絵も減り老夫婦
鳥取県 石谷美恵子

トライアスロン強い女性は美しい
京都市 高島 啓子

老人も老後の夢を持つている
枚方市 寺川 弘一

裏をかく必要のない暮らし向き
寝屋川市 富山ルイ子

切符などいらぬ世界で暮らしたい
羽曳野市 酒井 一壺
和歌山市 上地登美代

地球にも私にもある水溜まり
倉吉市 野口 節子

見くびるなローソクぐらい吹き消せる
池田市 上嶋 幸雀

蝶々であれば出自は問わぬ花
京都市 都倉 求芽

炊飯器の音へお腹が鳴ってくる
寝屋川市 太田とし子

今のこと忘れて明日の予定表
鳥取県 竹信 照彦

僕の留守二日待てぬとしよげる花
東京都 岸野あやめ

玄關の花は何故だかすぐ枯れる
大阪市 星野さらり

木の上で何を叫んでいるあけび
大阪市 松尾柳右子

いい目覚め今日の画布には何色を
池田市 北出 北朗

我が膳に乗るも縁と秋刀魚食う
八尾市 西川 義明

いい話だけをしている募参り
大阪市 津守 柳伸

花に水やるよに行かぬ塾通い

パソコンの海で浮輪を離せない
八王子市 播本 充子

フーテンの寅と台風似て非なり
鳥取市 谷口 次男

どん底を並んで走る友が居る
美作市 福原 悦子

お手軽なレシビが続く締切り前
尼崎市 春城 年代

順不同いつも最後に名を呼ばれ
高槻市 傍島 克治

会長にされて推せない横車
宇部市 平田 実男

逆流を泳ぐ小さな鱗だけど
羽曳野市 吉川 寿美

ケセラセラいつも最後に母は言う
東京都 清原 悦子

小気味よくリングを響るおばあちゃん
弘前市 高橋 岳水

おんなから好かれるおんな輪ができる
神戸市 田中 章子

韓流のビデオが母の惚け防止
岸和田市 土橋 房枝

見てくれる人が支えになる絵画
今治市 渡邊伊津志

カーブ投げカーブが返るいい仲間
鳥取市 岸本 宏章

同性を大と小とで区別され
堺市 村上 玄也

路地裏で古蹟見つけるスニーカー
枚方市 丹後屋 肇

そよと来てそよと去る風遠き人
東大阪市 指宿千枝子

長生きのオマケを神がくれはった
大阪府 澤田 和重

少々の毒で気分を盛り上げる
和歌山県 森下よりこ

世渡りの下手は性分祖父母の血
唐津市 宗 水笑

選挙の灯消えて気付いた大相撲
和歌山市 福本 英子

無罪云大食みのりの秋を食べ歩く
砂川市 大橋 政良

悠々自適日に三合のコップ酒
大和郡山市 坊農 柳弘

もう二度とゴキブリ等に生まれるな
東かがわ市 川崎ひかり

呆けぬため日課のように鶴を折る
今治市 野村 清美

ひとはなぜ急ぐか道はただひとつ
豊中市 水野 黒兎

虫の声湯ぶねの中でゆつくりと
三田市 阪本 藤朗

父と酌むほつりと洩らす戦秘話
泉佐野市 備後三代子

主逝き池の鯉消え落葉浮く
唐津市 北村 松風

第11回 川柳塔まつり

同人総会

平成17(05)年第40期川柳塔社同人総会は、10月10日午前10時からホテル・アウイーナ大阪で開かれた。前たもつ副理事長司会で開会、河内天笑主幹があいさつ、同氏を議長に選出して議案審議に入った。

一号議案の事業活動は、鴨谷瑠美子常任理事が別項のとおり報告、冊子「川柳しめんか」の作成、「川柳塔」の表紙絵が8月号から前田尋氏のきり絵になったことを付け加えた。次いで、鶴田遠野常任理事から2004年度の会計報告、川端一歩会計監査が会計監査報告を行った。

二号議案では、坊農柳弘常任理事が2005年度の活動計画を提案、誌友・同人を増やして川柳塔を元気にすることを重点とし、冊子を活用して誌友拡大を図り、プロジェクト・チームを作って取り組み、「同入部」を「同人・誌友部」に改めたことを報告し、籠島恵子常任理事が予算案を提案した。

続いて三号議案の川柳塔社規約改正の件を

村上玄也常任理事が提案した。これは現行規約の4役員(8)に、「主幹・理事長については、投票によって決定する。投票の方法は、川柳塔社役員等に関する規定で定める」とし、現行の(8)を(9)とするもので、この後、各号議案についての質疑討論に入った。

初めに森本弘風・太田昭両氏から事業年度と会計年度が食い違っていることを指摘し、岩佐ダン吉氏から同人・誌友の増加策についての具体的な提案がないことを追及した。このほか、川上大輪氏からジュニア川柳の取組み、滝本きよし氏からホームページの更新について質し、小島笑司氏からも質問が行われた。特に三号議案について質問に答える形で、常任理事会で定める投票の方法についての試案について説明、田中正坊氏から原案賛成の意見を述べた。

この後、板尾岳人理事長から役員選出について提案、全議案を拍手で承認、退任役員を代表して山本義子さんがあいさつ、奥田みつ子副主幹が閉会をあいさつを行った。

■事業活動報告

(事業)

2004(平成16)年

10月10日 創刊80周年記念・第10回川柳塔まつり(アウイーナ大坂・3,499名)

11月13日 川柳塔碑合祀法要(高野山大霊園・12名参加)

2005(平成17)年

1月29日 川柳塔社各地川柳会代表者会(アウイーナ大坂・39名参加)

3月1日 川柳塔社同人名簿作成・配付

4月10日 野村太茂津卒寿記念川柳大会(和歌山J.A会館・99名参加)

4月24日 川柳大原500号合同句集発行記

6月7日 念川柳大会大原高校・215名

7月7日 特別常任理事会(参与以上24名)

9月7日 橋高薫風名誉主幹を偲ぶ会(アウイーナ大坂・169名参加)

同 路郎忌・橋高薫風名誉主幹追悼川柳大会(同・220名参加)

9月から選者交代「水煙抄」板尾岳人

「愛染帖」新家完司

「檸檬抄」仁部四郎

(新設) 藤田泰子 共選

(主な受賞・表彰)

太田扶美代 本社会会月間賞水久保持者

中原 諷人 鹿野中学校川柳講師教育功労賞

石川侃流河 山口県文化功労者

川上 大輪 文部科学大臣奨励賞

(第19回国民文化祭ふくおか)

川上 大輪 文部科学大臣奨励賞

(第29回全日本川柳広島大会)

野村太茂津 全日本川柳協会功労者顕彰

故小池しげお 平成16年度紋太賞

〔句・文集刊行〕(13)

高橋 岳水 『心の小径』(句集)

井上 桂作 『旅の川柳』(句文集)

酒井 一壺 『百句』(なになわ柳壇入選句集)

木本 朱夏 『転生』(句集)

田中 正坊 『赤えんびつ』(句文集)

高瀬 霜石 『青空もうひとつ』(句文集)

松下比ろ志 『老春賦』(句集)

中後 清史 『軌跡』(句集)

故児玉 蛙 『しおらしく』(句集)

川柳ささやま 『川柳ささやまⅢ』50周年記念

川柳ささ百合 『川柳ささ百合』7年日記念

三幸川柳教室 『実り』(合同句集)

そりりゆう会 『そりりゆう会』合同句集Ⅲ

〔句碑建立〕



幹主笑天の議長

高瀬 霜石 (笠岡市古城山公園内)

〔物故者〕(14名)

寺井 東雲 平成16年10月4日没 82歳

月原 宵明 同 10月13日没 95歳

松川 芳子 同 11月4日没 79歳

中澤 伽羅 同 11月13日没 73歳

瀧井 勝 同 12月6日没 75歳

西村 早苗 平成17年1月3日没 85歳

長谷川 淳 同 1月13日没 89歳

小池しげお 同 3月8日没 80歳

工藤 吟笑 同 3月21日没 94歳

西村 大吾 同 3月22日没 74歳

中田あい子 同 4月18日没 85歳

橋高 薫風 同 4月24日没 79歳

児玉 蛙 同 7月26日没 70歳

藤村 メ女 同 7月30日没 93歳

■新任役員(留任は含まず)

常任理事 井伊 東吉・川端 一步

会計監査 石森 利昭

参与 森下 愛論・山本 義子

理事 北村 賢子・高瀬 霜石

村上 直樹・矢倉 五月

山岡富美子

■新同人(16名)

小豆澤歌子(出雲市) 黒田茂代(西予市) 井

丸昌紀(大阪市) 小谷集一(大阪市) 横山捷

也(和泉市) 若松雅枝(藤井寺市) 鈴木一弘

(鳥取市) 富田美義(高槻市) 坂上淳司(河

内長野市) 根岸方子(日高市) 小川賀世子

(東京都) 星野育子(さいたま市) 喜田准一

(和歌山市) 撰野子(倉敷市) 山田葉子(長

岡京市) 鈴木いさお(藤井寺市)

〔同人総会出席者〕(順不同・92名)

坊裏柳弘 前たもつ 坪井孝一 出口セツ子

木本朱夏 井丸昌紀 村上玄也 山岡富美子

板尾岳人 西内朋月 穴吹尚士 鴨谷瑠美子

吉村一風 石堂潤子 森本弘風 奥田みつ子

石森利昭 矢倉五月 籠島恵子 榎本日の出

播本充子 根岸方子 星野育子 宮本三喜夫

仁部四郎 川上大輪 江見見清 岩佐ダン吉

黒田能子 川端一步 山口光久 長谷川呂万

河井庸佑 柿花和夫 米田恭昌 山本希久子

田中正坊 早川棲世 米澤俊子 鈴木いさお

西出楓楽 山本義子 桜井千秀 瀧木きよし

鶴田遠野 松尾和香 長浜美籠 川久保睦子

宮口笛生 松原寿子 井伊東吉 太田扶美代

中島寿海 小島笑司 森村美花 松尾柳右子

稲葉冬葉 北村賢子 北野哲男 中原みさ子

加島由一 玉置重人 板東倫子 飛永ふりこ

若松雅枝 榎本舞夢 渡辺富子 徳田ひろこ

大内朝子 西川更紗 小谷集一 津守なぎさ

河内天笑 吉川寿美 新家完司 平松かすみ

近藤正 太田昭 吉岡修 土橋登 寺川弘一

三宅保州 喜田准一 奥村五月 宮西弥生

濱野奇童 藤井正雄 岩崎公誠 河内月子

都倉求芽 今 愁女 森 茜

■おはなし(要旨)

《句と歌で巡る世界遺産》

紀伊山地の霊場と参詣道

三宅 保州

先ず、本題とは別件のお願ひですがお手元の「川柳しませんか」の小冊子は、これから川柳を始める方の一助として、役員会のご助言の下に私が書かせていただきました。不十分なものが、皆様のお力でカバーしていただいで、ご活用方よろしくお願ひします。

さて、本日は私の住んでいる和歌山県を中心として昨年、世界遺産に指定された「紀伊山地の霊場と参詣道」について、その地にゆかりのある川柳、俳句、和歌等をお手元の資料にして、ご一緒に半時間で巡ってみます。先ず、わが国の世界遺産は、今年指定された「知床」も含めて十三カ所となりました。



三宅 保州氏

「紀伊山地の霊場」が世界遺産に指定された理由は、往時「蟻の熊野詣で」と言われるほど、京の都などから上皇、公家衆や善男善女が参詣した霊場や古道が、保存状態がよく現存することが文化遺産として指定されたものです。

旅立ちには和歌山城からです。徳川御三家の一の紀州藩で五十五万五千石を擁しました。

近くには、海岸美日本一になった和歌浦があります。万葉の歌人山部赤人は、和歌の浦に潮みちくれば濁をなみあしべをさして鶴鳴きわたる」と詠んだ風光明媚さが今も保存され、故高杉鬼遊氏も吟行で、木の国の山脈つづく片男波」と句集「川柳にみる和歌山」の巻頭を飾っていました。

霊場の始めは西国二番札所の紀三井寺で、松尾芭蕉が「見上ぐれば桜しもうて紀三井寺」と早咲きの桜を惜しんでいます。

弘法大師開祖の高野山は山上の一大宗教都市で、この人もここで寝ていた高野山」という川柳のように歴代の武将から政治家、庶民まで何十万の朝暮があります。ご存知のとおり川柳塔碑も建立され同人物故者の追善法要が毎年執り行われています。

海岸線に沿うと、有間皇子の「家にあらば筒に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る」と万葉集に辞世を遺して暗殺された悲劇の地、安珍・清姫の悲恋の道成寺、屈指の白



おはなしに聴き入る

浜温泉、本州最南端で串本節の串本・潮岬を経て、熊野参詣のメインの熊野三山巡りです。先ず、日本一の那智の滝に隣接した那智大社、西国一番札所の青岸渡寺に詣り、近くの勝浦温泉で疲れを癒せます。次いで三山の一つ速玉大社を経て、結びは本宮大社です。近くに川湯温泉や湯峰温泉があります。熊野川を遡ると溪谷美日本一に選ばれた滯八丁で、駆け足の旅の終わりでです。

資料の「紀州偉人伝ベストテン」はまたの機会に譲らせていただきます。

故薫風先生に、最大の世界遺産は地球ですの拙句が本社月間賞に選ばれた縁を、師への鎮魂のお話として捧げさせていただきます。(配付資料には、65句・首等を登載しました)

各賞表彰・記念句会

受賞者（敬称略）―前列右から、西口いわ
ゑ・上地登美代・天笑主幹・三浦千津子・白
根ふみ、後列右から、両川無限・安土理恵・
宮西弥生・今愁女・山岡富美子・三浦強一



晴れの受賞者

曇り空で湿気が高目のせいか、この季節に
しては少しむし暑く感じられる10月10日、当

日参加20名を迎え、同人総会を終えて定刻の
1時から、第11回川柳塔まつりの川柳大会が
開催された。

松原寿子・村上玄也司会により、板尾岳人
理事長の閉会の辞、河内天笑主幹の挨拶、祝
電披露に引き続き今年度のハイライト、六賞
受賞式が行われた。今回は受賞者全員が勢揃
いし、賞状と楯が授与され各々の所属吟社か
ら花束、遠来の強一・愁女さんには常任理事
会から記念品が贈られた。

長浜美籠同人部長から新同人紹介があり、
記念品が手渡され、三宅保州氏のおはなしと
続く。（前頁参照）手作りの資料で、ユーモ
アを混ぜ、現地へぜひ行ってみたいとなるよ
うな話しぶりであった。月間賞は新家完司氏
（鳥取県）に輝き、仁部四郎副主幹の閉会の
辞でしめくくり4時20分に終了した。

記名（月子・恵子・朱夏・真理子）・撮影
（昭）・清記（恵子・直樹）

兼題「若い」

大内 朝子選

まだ若い夢をいっばい見えています
まわりから若返ったと怪しまれ
まだ若いはずの腕立てサロンパス
丸暗記できて若さを確かめる
老けてなお若いリズムで跳ねている
戦争の怖さを知らぬだけ若い
お世辞でも若いきれいはワンダフル
お若いと言われ一杯奢らされ

みつ子 耕治 水笑 准一 光久 宏章 公誠 弘子

愚痴言わぬ母の背中若く見え
若き日の夢追いかけて血が騒ぐ
年ごとに母の遺影が若くなる
医者通いしながら今日も若い振り
若いっていい泣いてもすぐ笑う
やり直す時間たっぷりある若さ
若者の一途まぶしいことを言う
若いって素敵さめく瞳を
生む生まぬ言うてる内はまだ若い
結婚も離婚もメールだけで済む
へまばかりするので若く見られてる
無意識に選んでしまう若いほう
若者のつばさに青い天がある
おじいちゃんと言うなと孫に言ってる
若いねと誉めておだてて使われる
どっこいしよ言ったび若さ減ってゆく
エアガンより若さ爆発する祭り
未完成それが若さの魅力かも
若いねと言われるたびに奮い立つ
献血へためらうことのない若さ
宝とも知らず若さを傷つける
黒いもの黒いと言えるのが若さ
アイディアの凄さ若者からもらう
傷口のすぐふさがっていく若さ
おない年なのに僕より若い艶
青リンゴころろ若さ見せつける
アルバムに髪も若さも吸い取られ
怖いもの何もなかった若かった
何時までも若い積もりで呑み過ぎる

順子 無限 小雪 保州 寿美 好 碧 紀乃 英子 紀子 賢子 理恵 歳子 求芽 尚士 楓楽 富万 呂万 更紗 雅文 弥生 セツ子 一風 能子 天笑 集一 則彦 利昭

深呼吸すこし細胞若返る

若いからおへソ出しても美しい

いつまでも若い気である影法師

まだ若い九回裏まで吠いてやる

異文化もすんなり吸収する若さ

前向きに歩いて若さ逃がさない

まだ若い時々呪文か述べている

摺り足で若さが通り過ぎてゆく

アンテナが錆びない様に若づくり

S Lの機関士をしていた写真

赤とんぼくるりつと若い日と思う

戦争へむざむざ捨ててきた若さ

廃盤のレコード若い日が疼く

若いっていいね未来は無限大

団塊の世代ロマンはまだ若い

佳

ライバルの若さに負けた水たまり

太陽に吠える若さがまだ残る

歳取らぬ心わたしの玉手箱

恐れずに若さで跳んだ水たまり

選抜肢いくつも持つている若さ

人

再々婚ですかあさんさん若いわね

地

少年のポケット海を握りしめ

天

魂が若いかどうかだと思おう

軸

若くなる内緒ないしょの恋ころ

あきこ

たもつ

岳人

比ろ志

美龍

菜月

いわゑ

義

哲男

笛生

全彦

あすき

朱夏

舞夢

奎子

朋月

鹿太

一慧

洋

章子

月子

ふみ

修

朝子

兼題「栄える」

前 たもつ選

いさかいの塔を見守り風薫る

にんまりの岡田監督風おこす

どん底の巨人はソツとしてやろう

繁栄が驕るヒト科ヘルニーニヨ

九条があつて栄えた国なのに

共存共栄ヒト科が試される

栄転の椅子に拍手が届かない

正直で客を大事にして栄え

赤ん坊が泣いて栄えるおらが里

合併で町が栄える事祈る

この町が大好きと言う人はかり

店員が美人揃いでよく流行る

広がった男の化粧品売り場

栄えると扯けたくなる店とホラ

栄転と決まり新調するスーツ

よく流行る医院で風邪をもろてくる

捨て犬は栄える家を嗅ぎ分ける

退職をしたら会社が栄えだす

復興で栄えた街の灯がきれい

合言葉モツタイナイにして栄え

繁栄の家にずつしり太い梁

おやこも百円シヨップができました

文句あるか日本は栄えている国ぞ

占いをする人ばかり栄えている

栄えてもおにぎりの味忘れない

おふくろの味で栄える路地の奥

友だちにかけた電話に秘書が出た

哲子

栄呼

博泉

いさお

ダン吉

充生

弥生

集一

四郎

三喜夫

恵子

孝一

正美

笑司

美龍

章子

則彦

見清

瑠美子

かすみ

茜

五月

哲男

修

ひさ乃

雅枝

勇治

朝ドラの人氣で賑わう小さい村

真心の店に絶え間のないお客

栄える温泉地にはゴミがない

点滴は栄えた頃のつけだらう

栄えと有頂天から戻れない

子沢山地位も名譽もいりません

栄えるために優しい呼吸忘れてた

我が家栄えどつしり妻がいてくれる

金山紅葉きつと青春なんだろう

繁栄の都市に酸素がうすくなる

栄通り名だけ残して閑古鳥

屋根裏へ栄えた頃の煤がある

恥かいてかいて栄えた僕の顔

栄光の社史にわたしの影がない

栄えると神も仏も笑顔見せ

子だくさんの頃の日本は栄えてた

見栄えする八等身のハイヒール

年金で栄える手伝いしています

栄えても女に髭は伸ばせない

少子化で国が栄えるはずがない

繁栄の真ん中に居る女王蜂

行列の店税務署にのぞかれる

税務署に目をつけられたことがある

栄えあれ天から声を聞くまつり

栄える店だ真心売っている

栄えている店には光る汗がある

栄転の話をも聞いてみる

国栄え溜つてゆくのはごみの山

萬的

まさよ

さくら

冬葉

章久

正

日枝子

希久子

義子

能子

呂万

奇童

智彦

強一

忠央

孝子

柳右子

康子

日の出

鹿太

碧

重人

好

朝子

泰女

登美代

義

泰子

農業が栄えた証し里にあり
栄転に愛大までがぶらさがり

美智子
更紗

出て行つた子等がそれぞれ花咲かす
地

よりこ

トリスパー栄えた頃の歌が好き
天

公誠

繁栄の原点だった焼け野原
軸

直樹

繁栄の街にひっそり青テント

兼題「のぞみ」

播本 充子選

のぞみ号東へ西へ仲間増え
夢希望努力いっぱいなのぞみ号

和香

阪神がのぞみ叶えてくれました
無農薬守るつもりでUターン

あやめ

抱いた子が乗せて欲しいと宇宙船
父さんのかけたのぞみが大きすぎ

方子

シナリオにのぞみたっぶり入れておく
掛けられたのぞみ重たくなってくる

冬虹

朝散歩昼寝少々夜は酒
引き出しに希望のかけら残つてた

智彦

なんとしても地球は丸いままがいい
さわやかな付き合ひ続きますように

勇治

のぞんでた独り暮らしで呆けはじめ
高望みするなと影が囁いた

修

あちこちに頭ぶついているのぞみ
シーソーでのぞみの重さたしかめる

朱夏

赤ますみ

能子

お望みとあらば逆立ちしてあげる
のぞみまだありそうだからバラ贈る

和子

ホールインワン精進してものぞみない
のぞみまだ捨ててはいない古帽子

理恵

かなつたらとたんにつまらないのぞみ
あきらめず抗ガン剤に賭けてみる

桂子

神様に無茶を言つてはいけません
清流に棲んで大河を望まない

菜月

減量へまたスイーツにだまされる
民営化ポストはやはり赤がいい

大輪

花ことばより美しく咲かせよう
できるなら時間を止めて下さいな

正坊

ふんわりと大きな望みパンを焼く
米びつに米それだけでいいわたし

章子

九条があるバンドラの箱の底
鈍行の旅で拾ってきたのぞみ

育子

崖つ縁開き直ればある望み
年金でちゃんとして生きてけますように

美津子

余白いちめん逢いたい人の名で埋めて
核ゼロの望みは捨ててない拳

生枝

飯茶碗のぞみ大きい方がよい
ほんの少し気ままに生きてみたいだけ

強一

厨房に立つのはボクなのぞむとこ
青空へとび出したいと鳩時計

真理子

一度でも青い地球を見てみたい
点滴がのぞみを繋ぐように落ち

哲子

点滴がのぞみを繋ぐように落ち

幸雀

妙

美代子

完司

ダン吉

夕胡

扶美代

日出子

まさよ



ロビー風景

のぞまれるならば再婚してもよい
十指みな期待通りにまだ動く

瑠美子

ぶつぶつと仏間で姑の願いごと
ぞうさんののぞみはきつと広い森

日の出

少年の希望まつすぐ宙へ翔ぶ
お望みの相手僕とは目が高い

英子

ハンドルを握るのぞみはまだ捨てぬ
夕焼けに染まると明日が笑い出す

潤子

愛よりも働く夫のぞんでる
母さんののぞみ揃つて朝ごはん

正美

強烈なドラマ演じて行くのぞみ
火も水も私ののぞみ位置にある

文

のぞむなら何時でも君の影になる
手のひらののぞみこぼさぬよう走る

紀乃

人

日和

地

天

千枝子

軸

千里

兼題「例えば」

新家 完司選

例えばと私の作句悪い例
 ロボットが五七五を編み出せば
 罰ゲームの如く炎天下歩く
 人間を磨く波なら耐えられる
 へそで茶を沸かす話に乗ってやる
 大戦にもしも日本が勝つてたら
 例題が身近にもなった温暖化
 宇宙から嫌われものになる地球
 一宙がのこのこひと歩きする
 古本か古書かかつては時の人
 例外をあけて核心から逸れる
 例え明日死んでも今晚の句会
 係り医の例え話にもしかして
 呪まれていえ例えばの話です
 ロボットがいても人肌恋し秋
 例えは君は薔薇とすら書けるかい
 雪夜つていな例えは囲炉裏端
 いまいの例え話に僕が出る
 例えはね僕が鴉で君は鷹
 例えても瘦せたわたしはありえない
 使用前として例えに使われる
 サザエさんみたいなたと言われている
 かりにワタシが美人だったらどうなった
 よしに僕は犬になるならブルドッグ
 悪い例えは僕に当てはまる
 いうならば俺を外すということか
 来世の妻は例えは松たか子

笑司 和代 希久子 セツ子 大輪 英子 アキ 愁女 紀乃 哲男 昭 水笑 ルイ子 五月 美籠 弘一 蛙城 ダン吉 茂美 日の出 昌紀 泰子 俣子 登美代 無限 たもつ 則彦

風のような夫で当てになりません
 成行きて友のご主人例に挙げ
 引合いに隣の旦那出さんとけ
 カラヤンの指揮でピアノを弾くならば
 いい夫婦例えは天に笑う月
 回遊魚のようにヨン様追い駆ける
 獣になったり仏になったり
 ミジコがでつかいほらを吹いてくる
 明日が無くとも今晚は飲むつもり
 秋の夜の酒はいのちを洗うよう
 下戸の酒例えは炎呑む如し
 説曲げぬよしんば敵に回すとも
 傷痕を見せ戒める子の短気
 母さんはすぐ父さんを例にだす
 言うなれば頑固に目鼻つけた父
 ご一緒に例えは朝の食事など
 もし男だったらわたしとは離婚
 例えはね離婚に五億くれるなら
 余生とは例えはおまけ付きグリコ
 出来ちゃった婚の例ならそこかしこ
 気むずかしいものの例えにされる猫
 我が暮しするまで大河の木の葉舟
 太陽と言われましての一度だけ
 すぐおこる自動改札機の如く
 残菊の風情といて叱られる

洋 梓 淳司 小鹿 黒兎 文 蟹 天笑 朱夏 潤子 八千代 由一 扶美代 富子 見清 一慧 冬虹 いさお 賀世子 桃花 正美 美津子 耕治 正雄 比ろ志 葉子

ボクなんかひょうたん島の世之介さ
 手ばなすと冷える子どもホカロンも
 人が 青が好き例えは秋の高い空
 泥船の日本といえど降りられず
 天 百人の村に戦争などはない
 軸 川柳界のゴジラと言われたいものだ

兼題「つくる」

濱野 奇重選

修 啓子 倫子 蕉子 保州 一歩 和香 利昭 律子 修 義 岳人 倫子 英子 由紀子 希久子 恵子 美代子 哲子 真理子 弘一 ゆきの

正月に間に合う様に義園つくる
 五十年貴方のごはん作つてる
 思い出をつくつてました朝帰り
 何しても駄目な男も子はつくる
 虫食いの野菜でつくるサラサラ血
 いい土をつくれば花は裏切らぬ
 風邪に寝て夫がつくる美味い粥
 地平線まで土つくりする老父だろう
 悔しさで作り笑顔が歪んでる
 まず笑顔つくつて今日を始めよう
 三食を作る妻には逆らえぬ
 ロボットがロボット作る時が来る
 つくらない笑顔で心から笑う
 おいしかった母のつくつたにぎりめし
 オモチャ箱空けて子供は夢つくる
 国のためよい子つくれと言われても
 年毎に戦力外を作り切る
 ハムエッグ夫に任す日曜日
 もう少しまじしに作れと子に言われ
 つくらずに食べて文句の赤い爪
 プランターでつくる野菜のお裾分け
 空き腹に夫のつくるオムライス
 妥協して玉虫色をまたつくり
 飲み会に行くなら暇はすぐつくる
 不況風不義理もつくる秋寒し
 作つてものせるなという父の棚
 つくるから食べてと男プロポーズ
 ばた餅をつくり五十の息子待つ
 夢のあるつくり話をしてあげる

方子 雅枝 大輪 恭昌 かすみ 楓楽 正雄 奎子 玄也 セツ子 尚士 五月 能子 たもつ 愛論 あやめ 衛山 千枝子 蕉子 欣子 見清 則彦 忠央 瑠美子 一風 (備)美津子 桃花 耕治 准一

自分史よつくり直せるものならば
 夢のかけら集めてつくる一行詩
 もう来ない男の飯をまたつくる
 祭りずしつくとおじんと亡母のこと
 別人をつくるお酒がまた出てる
 定年の手始めとなる花つくり
 花つくる花の気持ち汲みながら
 人の輪をつくる笑いの種蒔いて
 一人だけの世界を作る無の時間
 クロイン人間つくる神さま裏切つて
 ともだちを作るやさしい秋になる
 泣きにきた浜辺でつくる砂の城
 二度までは無理に仏の顔つくる
 認知症の母とつくつた小宇宙
 米つくることしか知らぬ父の鉄
 兼題「つばさ」
 搭まつり翼に乗って馳せ参じ
 身の丈のつばさ広げて生きている
 渋滞へつばさの欲しい待ち合わせ
 今年また虎につばさが生えている
 ラーメンがつばさを付けて宇宙まで
 つばさ閉じ羽ばたく気配ないニート
 大事故に翼がほしい救急車

求芽 理恵 昭 朝子 五月 扶美代 日枝子 蛙城 登美代 天 朋月 いさお 和夫

翼生やし冥土往復して見たい
 翼など欲しがりませんカメの足
 エンゼルの翼を持った新生児
 ラジコンのつばさに乗っている親子
 エアバスのつばさが泳ぐ雲千里
 兄ちゃんの紙ヒコキは風に乗る
 バリの灯を最初に見たという翼
 コンドルのつばさに乗ってカーニバル
 両翼を振つて雲間に消えた友
 九条へ右翼左翼のせめぎあい
 特攻のつばさを探す九段坂
 老いらくの恋へつばさが生えてくる
 いつまでも虹追いかけているつばさ
 いつまでも心につばさつけて行く
 精一杯つばさ広げて風を待つ
 一晩も居すにつばさが生える金
 嫁はんがときどきつばさ広げてる
 大らかな翼の下で響き合う
 飛べる日が来た親鳥が突き放す
 旅立ちへ若き翼の武者震い
 大きめの翼で挑む可能性
 あと少し翔べる翼を縫い合わす
 ひよこまでつばさ広げて走り出す
 片翼を支え合いつつ飛ぶ夫婦
 子等はみな遠くへ飛べるつばさ持つ
 飽食に馴れたつばさが退化する
 飛んでみなさいその翼なら大丈夫
 ふんわりと欲のつばさをたたみます
 つばさもう母越え父も越えそうだ

笑司 洋 弘一 見清 充子 久子 順子 千秀 八千代 利昭 あきこ いわゑ 寿海 和代 セツ子 准一 碧 求芽 集一 富美子 昭 達子 正美 日枝子 千里 由一 蛙城 賀世子



新同人紹介

子育てを終えたつばさが落ち着かぬ
夢のある限り羽ばたき繰り返す
百態の雲と遊んでいるつばさ
まだ飛べる胸のつばさは風まかせ
米研いで機を窺っているつばさ
生きたため泥にまみれてきた翼
居酒屋で夫のつばさは全開だ
止り木につばさ休めている戦士
一輪車つばさつけている虹の橋
少年の青いつばさは無限大
車椅子夢のつばさまでこまでも
しきりにつばさ折られることはない
因習の壁に翼をへし折られ
柵のつばさ休める古本屋

柳伸
ダン吉
富子
博子
深雪
朱夏
さくら
恭昌
たもつ
鐘造
昭子
レイ子
ルイ子
玄也
登美代

傷ついたつばさを癒すマイホーム
疲れたらつばさ畳んでひと眠り
正
ひさ乃

佳

零戦の翼磨いたことがある
添うほどに比翼連理の共白髪
直樹
冬虹

いざと言う時のつばさを持ち歩く
好きな人いるから翼欲しくなる
無限

エンゼルのつばさ時々てんこする
楓
楽

身の丈に合ったつばさをはためかせ
梓

人
地
天

雛守る時約変をするつばさ
なきさ

つばさは疲れたがくちばしは元氣
新家完司

軸
天

保険証とカード翼に小旅行

懇親宴

懇親宴は五時、葛城の間で九三名の参加で
にぎやかに開催された。

司会進行は、大内朝子・鶴田遠野が担当
はじめに鳥取の土橋螢氏で、句会での主幹
挨拶の中の、「同人と誌友の」話に同感したこ
とと、川柳塔への注文もちよっぴり入れてユ
ーモアたっぷりの挨拶があった。

乾杯の音頭は日川協・事務局局長本田智彦氏
一同力強く唱和して乾杯。

秋の彩り深いお膳を楽しみながら新しい出

会いがあり、旧交をあたためた。

アトラクションのトップは恒例の河内月子
さんのソロのフラダンスに加えて新人美女五
人の初登場があった。

お待ち兼ねのカラオケは、お歴々の喉を披
露の後、今年も鳥取の新家完司さんのリード
で「六甲おろし」をひとときわ元気に唄い、お
なじみ「貝殻節」となる。「河内音頭」を賑
やかに全員で踊って、締めは「星影のワルツ」
を薫風先生を偲び大合唱。皆で手をつなぎ合
い絆を確かめた。

閉会の挨拶は、京都の都倉求芽さん、「い
い会でした。また、会いましょう」と結ぶ。
祝電拝受(敬称略)
今川乱魚(社) 全日本川柳協会会長
天根夢草「川柳展望」主宰
御芳志御礼(敬称略・順不同)
三宅保州 山本義子 西出楓楽 山本希久子
長浜美龍 前たもつ 木本朱夏 鴨谷瑞美子
籠島恵子 松原寿子 大内朝子 奥田みつ子
石森利昭 鶴田遠野 坊農柳弘 瀧本きよし
播本充子 桜井千秀 濱野奇童 上地登美代
今 愁女 土橋 螢 中原諷人 西尾美与子
森山盛桜 河井庸佑 白根ふみ 中原比呂志
都倉求芽 三浦強一 寺井弘子 小糸昭子
森井善居 山本蛙城 川柳塔鹿野みか月
堺川柳会 川柳塔きやらほく 京都塔の会
川柳塔のぞみ 弓削川柳社 川柳塔まつえ吟社

参加者の感想 (五十音順)

穴吹 尚士さん (同人・吹田市)

まつりの準備の段階から僅かながら参加させて頂きました。そして(予想通りですが)当日の司会他の表方の陰には大勢の裏方が居られ、その裏方の陰には事前準備の裏方が居られた。同人総会・句会・懇親宴の盛会はこの準備の段階で決まっていたと思います。川柳塔の運営は裏方あってこそと、今更に実感しました。

伊勢田 毅さん (同人・神戸市)

たくさんの良い句を聞かせて頂き、大変勉強になりました。まだまだ未熟ですが先輩の作品の域に達するよう、更なる精進を重ねたいと思います。

岩切 康子さん (同人・熊本県)

薫風先生のご不在は淋しかったけれども、



乾杯の音頭 本田 智彦氏

百歳が目前の紫香先生にお目にかかり、握手などして嬉しゅうございました。まつりに参加するたびに緊張がとれ、皆さんと仲良く出来てよろしゅうございました。

小谷 集一さん (同人・大阪市)

二〇〇名を超える盛大なまつりの一員として参加できたことを光栄に思います。今日は晴れやかな場で新同人として紹介され少々照れております。同人の名を汚すことのないよう精進したいと思います。

瀬戸まさよさん (同人・吹田市)

今年も川柳塔まつりに参加させて頂きました。参加者は二二〇名とか。参加者の多いことに心強さを感じます。川柳塔の魅力かも知れません。顔馴染みの方々とお会いできる楽しみを味わっています。裏さんの目に見えない気配り、心遣いに感謝しています。

西浦 小鹿さん (誌友・鳥取県)

初参加です。凄く大会で緊張しています。新鮮な良い句が多かったと思います。一句抜けました。完司さんの句にもあったように、来年も出席したいと思います。

根岸 方子さん (同人・日高市)

今年同人に加えて頂き初参加です。懇親宴の六甲おろしの合唱には圧倒されました。大阪のパワーを吸収し、楽しませて頂きました。

早川 樓世さん (同人・吹田市)

毎月、誌上で拝見し最敬礼している作家の名を名札で見つけられるのが嬉しい。広い会



美女チームのフラダンス

場いっぱいの参加者は、昔の句会しか知らない私にはまさに驚異でした。

星野 育子さん (同人・さいたま市)

初参加です。先輩の皆さんの句に触れ、独特の披露にいつか私の句もこうして読みあげて頂くのを楽しみに精進したいと思います。

森 茂美さん (同人・出雲市)

一句だけ抜いて頂きました。来年は二句抜けるよう頑張ります。選者の方がそれぞれ特色があつて大変楽しい句会でした。私も八十三歳になりました。大阪の地が止まり木になるよう願っています。川柳塔 バンザイ。

川柳大会参加者

総数 233名
(順不同・敬称略)

【北海道】 三浦強一

【青森】 今 正城 今 愁女

【埼玉】 根岸方子 星野育子

【東京】 小川賀世子 岸野あやめ

播本充子

【京都】 稲葉冬葉 高島啓子 都倉求芽

山田葉子

【大阪】 浅野房子 穴吹尚士 赤松ますみ

安達忠次 阿萬萬の 井伊東吉 安達はじめ

池 森子 石堂潤子 石森利昭 生嶋ますみ

板尾岳人 井上桂作 井丸昌紀 伊藤アヤ子

岩屋美明 岩崎公誠 上嶋幸雀 指宿千枝子

海老池洋 榎本舞夢 江見見清 岩佐ダン吉

大川桃花 太田 昭 大谷篤子 榎本日の出

大橋鐘造 岡本久峰 奥村五月 大久保伸子

柿花和夫 籠島恵子 笠井欣子 太田とし子

加島由一 河井庸佑 河内天笑 太田扶美代

河内月子 川原章久 川端一步 小栢こずえ

神原 文 北村賢子 吉川寿美 鴨谷瑞美子

楠 昭子 栗田久子 熊代菜月 川久保睦子

小島笑司 小谷集一 近藤 正 桑野ゆきの

坂上高栄 坂上淳司 沢田和子 源田八千代

志田千代 高田博泉 田頭良子 小泉ひさ乃

伊達郁夫 田中正坊 谷川生枝 古今堂蕉子

谷川勇治 谷口 義 玉置重人 齋藤さくら

津守柳伸 鶴田遠野 寺井弘子 鈴木いさお

寺川弘一 中井アキ 中井 萌 瀬戸まさよ

中岡 妙 中島寿海 西浦一慧 瀧本きよし

西川更紗 西出楓楽 野田栄呼 高田美代子

畑中節子 早川棲世 針生和代 田中由紀子

板東倫子 樋口冬虹 藤井則彦 津守なぎさ

藤井正雄 藤田泰子 本田智彦 出口セツ子

前たもつ 前原正美 升成 好 富山ルイ子

水野黒兎 宮西弥生 村上玄也 中村れんげ

初山隆盛 森 茜 森下愛論 長谷川春蘭

森村美花 森本弘風 村上直樹 長谷川呂万

矢倉五月 矢野 梓 山本蛙城 平松かすみ

吉岡 修 吉川弘泰 吉村一風 平嶋美智子

吉村雅文 米澤俣子 米田水昇 松尾柳石子

若松雅枝 三浦千津子 宮本かりん

山岡富美子 山川日出子 山本希久子

吉田あずき 吉田喜代子

【兵 庫】 石原蔵子 伊勢田毅 緒方美津子

亀田哲子 北野哲男 黒田能子 奥田みつ子

小山紀乃 軸丸勝巳 田辺鹿太 久保田千代

坪井孝一 長浜美籠 西内朋月 七反田順子

林 昭三 本田律子 南 全彦 西口いわゑ

山田耕治 山本義子 山口光久 牧測富喜子

河川無限 松下比ろ志

【奈良】 安土理恵 大内朝子 居合真理子

鍛原千里 河合茂雄 坊農柳弘 飛水ふりこ

宮口笛生 米田恭昌 渡辺富子

【和歌山】 榎原公子 柏原夕胡 上地登美代

川上大輪 喜田准一 木本朱夏 たむらあきこ

楠見章子 小谷小雪 桜井千秀 古久保和子

武本 碧 堂上泰女 福本英子 宮本三喜夫

松本和香 松原寿子 三宅保州 森下よりこ

【鳥 取】 岸本宏章 岸本孝子 徳田ひろこ

白根ふみ 新家完司 土橋 螢 中原みさ子

西浦小鹿 政岡日枝子

【島 根】 岸 桂子 森 茂美 多久和博子

【熊 本】 岩切康子

【岡 山】 今井幸子 恒弘衛山 灰原泰子

濱野奇童

【佐 賀】 宗 水笑 仁部四郎

計220名

【事前投句者】

池内かおり 内海幸生 門谷たす子

神夏磯典子 神野十恵子 丹後屋肇

中崎深雪 野村大茂津 古川奮水

羽田野洋介 福原悦子 町田達子

山田婦美子

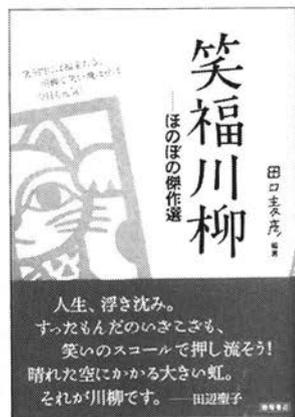
計13名

《最新刊》 田口 麦彦 編著

笑福川柳

ほのぼのの傑作選

46並製 税込一四七〇円送料210円



川柳で笑い飛ばせば今日も元気！

読売新聞西部本社版で連載中の『笑福川柳』欄の入選句からさらに選りすぐった秀句の傑作集です。全部で624の秀句をテーマ別に分類しまとめました。選者である田口麦彦の川柳コラムは7編も載せ、さらに同じ熊本出身の風刺漫画家那須良輔氏を記念した「湯前まんが美術館」主催の「風刺漫画コンクール」入選作をイラストとして使用しました。立体的で充実した川柳書です。

《好評発売中》 田口 麦彦

楽しみながら上手くなる

穴埋め川柳練習帳

現在活躍中の川柳作家の秀句を例題に、キーワードを埋め字することで自然と川柳が上達する本。クイズを解く楽しみと川柳が上達する喜びを同時に手に入れることができます。

46並製 税込一六八〇円送料210円

川柳表現辞典

現代川柳の秀句六九二七句、見出し語一五四二語をあげて語の意味等説明。表現の方法と技術を示した

田口麦彦 46上製箱入
税込三五七〇円送料210円

現代川柳入門

川柳の基本から作句の心構え、自由に人間と社会を現代の言葉で例句をあげて説明。実作者への入門書

田口麦彦46上製カバ
税込一九八〇円送料210円

川柳技法入門

川柳上達の技法を九二五句の引例で説明。一句の完成までの推敲添削他 風刺・ユーモア・比喩等の方法

田口麦彦46上製カバ
税込一九八〇円送料210円

時事川柳入門

現在を17音で切りとる諧謔精神の表現方法やサラリマン川柳の即興性など、九五三句の例句で説明

田口麦彦46上製カバ
税込一八三五円送料210円

ご購入はお近くの書店か直接小社まで・各書の内容見本進呈

〒112-0002 東京都文京区小石川1-16-1 飯塚書店 TEL 03-3815-3805 www.iizukabooks.com
FAX 03-3815-3810 振替 00130-6-13014

誹風柳多留一篇研究 3

伊吹和男・山田昭夫

増田忠彦・山口由昭

小栗清吾

清 博美

13 吉凶ともにふり袖を顔へあて 雨譚

伊吹 若い娘の恥じらいのしぐさ。喜怒哀楽のそのたびに、振袖の袖を顔にあてて表情を隠す。そのうちに、

はぐきを出して笑ふ程嫌なじみ 天八125
となる。

一ト笑ひわらつて顔の袖をとり 傍一30
ふり袖へ顔を つゝ、むとしめたもの

明三天1

山田 賛。ただ、白無垢の振袖としたら、婚札と葬式の場と考えられるが如何であろうか。

白むくの紅葉をする目出度ひ日 安五札1
白むくもすかほを着るハけちな事

梅柳兩木クすでに並ぶ所

二二ス2

山口 賛。自分の室お鮫を綱吉の側に上げ、それを通じて百万石のお墨付きを得たという。
鮫肌へ百万石の墨かつき 二〇二44
小栗 賛。既の事〓今すこしの所で。「あやうく」ではない。

清 同。

15 土産をは身ふりて咄す長局 狐穴

伊吹 土産は土産話。芝居もじゅうぶん考えられるが、そればかりでなく、代参などもある。久し振りの外出から帰り、身振り手振りで一日の出来事を興奮気味に周りの者たちへ話している奥女中なのである。
着かへずに一トまくはなす長つほね

明六義1

14 すでの事柳百本に成る所 其山

伊吹 幼時から將軍徳川綱吉の小姓として勤めた柳沢吉保の所領が、甲府十五万石からあやうく甲斐信濃百万石に加増されそうになったのを詠んだ詠史句。綱吉の寵愛をいいことに、わが子甲斐守吉里を將軍の落胤だと偽称したが、悪事露見して逼塞した。

増田 賛。身振りはやはり芝居か。
小栗 賛。芝居に限定してよいと思う。
身振り〓③のものまね。身振物真似〓歌舞伎役者のしぐさやせりふの真似をすること。
(二日)

清 同。芝居でしよう。
御みやげを乗地て咄す宿上り 一〇七13
身振りして芝居をはなす宿上がり 九七34

16 遊ぶ日もこわい顔みる年季者

授扇

伊吹 丁稚奉公などしている者の盆と正月の藪入りと、閻魔堂の斎日が重なる。そのため仕事から解放されて楽しく遊ぶ日であるのに、日頃の手代や番頭と生き写しの、閻魔さまの恐い顔を拝むことになる。

こわい顔一年に二度御用見る 傍三44

清 贊。

17 らん丸はおつうか尻をつめる也 舎丸

伊吹 お通は、小野お通で、史実なのか俗説なのか定かでないが、織田信長や淀殿に仕え、浄瑠璃の創始者とされている。そのため、信長の小姓であった森蘭丸が、求愛のためお通の尻を抓めたのでは、という想像句である。

上るりのぐわんそはつうな女なり一九13

山田 贊。「倭訓栞」には、

信長公の侍女小野於通、源氏物語にならひて長生殿十二段といへる物語をかけり。時の人此の草紙を浄瑠璃本といひし事起れりといへり。(後編じゃうるり)

清 贊。

18 あふきうりかけ取の気をよわくする 車印

伊吹 扇売りは、年礼のときに配る年玉の扇箱を売る者。扇箱を売り始められては、もう年も明けて掛金が取れなくなるので、掛取りは気弱になる。

扇子うり去年の人と行きちがひ 安四礼1

小栗 贊。礎稿は触れておられぬが、扇売りは元日の明け方に来たものらしい。夜が明けると(十二時を過ぎてても)大晦日だが、明けてしまえば元日だから掛取り不能である。

イエサ時の流俗とはいひながら、大卅日の

天明に、扇子あふき／＼ト売て来たが、アあの声をきくと春めいてはつきりしたツケ。

(浮世風呂 四篇巻之下)

清 贊。

19 不二をへたて／＼ほうばいを持って居る 沢鱗

伊吹 江戸中期の随筆で庄司勝富著『洞房語園』によると、吉原の二代目高尾太夫は、のちに身請けされるお時絵師の西条吉兵衛を介して、京は島原の吉野太夫や、浪花新町の高窓(田とも)太夫などと盃の遣り取りをしたとある。これによって江戸の傾城高尾は、富士山を隔てて京や大坂に友だちを持ってい

る、というのである。

六百里余て盃の合いおさへ 一〇七35

山田 越後屋は駿河町の通りを挟んで両側に店舗がある。通りから西を見れば富士山が見え、『江戸名所図会』の挿絵や、広重の『江戸名所百景』でも分かるように、あたかも富士を挟んで建っているように見える。両側の店員は同じ越後屋の「朋輩」だから、越後屋は「富士を隔てて朋輩を待っている」という次第。

本店と出見世の間イにふじか見え 六36

主題句は、越後屋と取るのが素直なようにに思う。

「史伝」の説も「風俗志」の説も納得出来ない。

山口 礎稿も面白いが、山田説に賛。越後屋で次の句もそうか。

壺丁ハミンなほうばいどふしなり

安四義3

小栗 山田説賛。

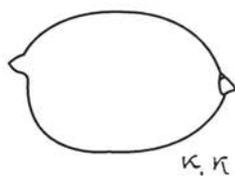
「史伝」は「不二」の必要性に乏しい。それをいうなら「箱根」と思う。「風俗志」は「鷹も朋輩」に引つ張られすぎ。「隔てて」が感覚的に合わない。

清 同右。小生は越後屋の句と確信しています。

共選欄

檸檬抄

(薫風書、カットとも)



「洗う」 仁部四郎選

まだ女残しています洗い髪
 銭湯の帰り居酒屋でも洗う
 丁寧恋愛車洗って身構える
 新車洗う娘夫婦は睦ましい
 台風が地球あちこち洗い出し
 無意識に洗う順序のある体
 十指拵けて働く軍手天に干す
 Gパンの手洗いだけはする息子
 暮洗う明日の策を父に聞く
 朝食を抜いて朝シャンしています
 十年後流行る気がする洗つとこ
 残業へ顔洗わせて資本主義
 洗いざらい話せばお腹空いてくる
 手を合わせ杖から洗う遍路宿
 ライバルは顔を洗って来いという
 葉漬けの五臓を洗う岩清水

大阪市	川久保睦子
枚方市	寺川 弘一
熊本県	岩切 康子
和歌山市	桜井 千秀
東大阪市	中岡 妙
高知市	小川てるみ
大阪府	初山 隆盛
日高市	根岸 方子
美作市	福原 悦子
松原市	玉置 重人
大阪府	高木 道子
和歌山市	山田 侃太
大阪市	津村志華子
唐津市	井上 勝規
美作市	小林 妻子
唐津市	宗 水笑

「洗う」 藤田泰子選

日本を洗えただるか絵選挙
 わたくしの尻尾こっそり洗つてる
 わたし色残す程度に洗つとく
 丁寧指を洗つて和解する
 根性を丸洗いで出直そう
 ヨン様と握手をすると洗えない
 安倍さんと握手して来た手を洗う
 いきのいい指でシャンブーしてくれる
 耳の裏洗い発想変えてみる
 今日の顔になるまで洗面器の水を替え
 よく歩いた足丁寧洗っている
 無意識に洗う順序のある体
 雑踏の波で淋しさ丸洗い
 この傷を洗うと支えまで消える
 愛情で洗えばみんな丸くなる
 わたしに時間をくれる食洗器

羽曳野市	徳山みつこ
大田市	伊藤 寿美
西宮市	山本 義子
堺市	村上 玄也
和歌山市	松原 寿子
岸和田市	坂口 英雄
吹田市	木下 敏子
堺市	志田 千代
西宮市	井上 松煙
美作市	山本 玉恵
米子市	青戸 田鶴
高知市	小川てるみ
河内長野市	村上 直樹
八尾市	宮西 弥生
熊本市	永田 俊子
神戸市	田中 章子

その後の心を洗うセレナーデ
 明日逢える髪はぬる目の湯で洗う
 欠けそうな茶碗二つを洗つてる
 公園の西側に見つけた蛇口
 全開の蛇口で洗う今日の嘘
 つつがない暮しを回す洗濯機
 洗濯機まわして遠い人にする
 独裁者が神の死角で手を洗う
 御仏飯下げて一人の膳洗う
 馬鹿おっしゃい洗って消える傷はない
 他人事だから手を洗ったら忘れ
 容赦なくロダンを洗う酸性雨
 マスコミにすぐに洗脳される票
 マニキュアの指で調理の無洗米
 泣いた顔さぶさぶ洗い立ち直る
 善人を続ける朝の洗面器
 言い伝え素直に受けて銭洗う
 夕立が家一軒を洗い上げ
 になげん賛歌洗濯ものを高く干す

秀句

軸吟

洗札と洗脳票を陽に透かす

熊本市 永田 俊子
 茨木市 藤井 正雄
 三田市 堀 正和
 京都府 稲葉 冬葉
 東かがわ市 川崎ひかり
 河内長野市 山岡富美子
 松江市 川本 畔
 美祿市 安平次弘道
 和歌山市 細川 稚代
 西宮市 山本 義子
 東大阪市 谷口 義
 伊丹市 延寿庵野鶴
 箕面市 出口セツ子
 大阪市 津守 柳伸
 大阪市 小泉ひさ乃
 弘前市 福士 慕情
 横浜市 菊地 政勝
 三田市 阪本 藤朗
 弘前市 高瀬 霜石
 鳥取県 佐伯 やえ
 池田市 北出 北朗
 東大阪市 北村 賢子

無洗米過去は清算しましたか
 うやむやをつまみ出した髪洗う
 しがらみは切れず夜毎に髪洗う
 欠けそうな茶碗二つを洗つてる
 泣かされた人のお墓を洗つてる
 洗つたら消える罪なら許します
 洗つても落とせぬものと生きていく
 罪洗う川を探しに独り旅
 洗濯のその少なさを哀しがる
 洗濯機まわして遠い人にする
 私も放り込みたい洗濯機
 洗濯機がしてくれまますと言ってくれ
 明日を生きる命はいつも洗いたて
 人指した手を何回も洗つてる
 覚悟しているがまだ首洗うてない
 何れ仏に自分を時どき丸洗い
 人間にまだ成り切れず手を洗う
 シャツの背をしゃんと伸ばして干しておく
 になげん賛歌洗濯ものを高く干す

秀句

軸吟

良妻を演じ続けた顔あらう

浜松市 杉浦 えむ
 堺市 宮本かりん
 府中市 藤岡ヒデコ
 三田市 堀 正和
 三田市 久保田千代
 八尾市 山本 宏至
 樺原市 居合真理子
 茨木市 藤井 正雄
 藤井寺市 太田扶美代
 松江市 川本 畔
 和歌山県 三宅 保州
 長岡京市 山田 葉子
 池田市 栗田 久子
 大阪市 神夏磯典子
 豊中市 安藤寿美子
 米子市 野坂 なみ
 神戸市 河川 無限
 大阪狭山市 矢野 梓
 弘前市 高瀬 霜石
 美祿市 安平次弘道
 川西市 西内 朋月
 藤井寺市 高田美代子

霜

澤田 和重選



霜柱踏んで朝刊としく音
 家庭では霜降り肉と出合せ無い
 霜焼けで泣いた昔が懐かしい
 霜降り祖母の体調気に掛かり
 校庭の某所涙の霜柱
 田の案山子霜に化粧して貰い
 霜焼けに腫れたこの手を知る昔
 霜降りの高級肉で胡麻を摺る
 霜やけの手を母の手が撫でてくれ
 寒い朝お山はきつと霜だらう
 霜柱痛い痛いど踏まれてる
 霜の朝父は定時に靴を履く
 さんさんと霜をふむきつといい日だ
 霜柱威張つてみても日除者
 霜の朝暖め合ってる道祖神
 霜柱踏む息白い寒稽古
 風の子が霜の広っぱ現れず
 霜柱思ふ余生のアスファルト
 全身がキラキラ光る霜女
 霜降りので頭で覗く下着シヨ一
 視点かえ心の霜が溶け始め
 今は昔霜やけの子ととんどの火

慕 情 東 吉 三喜夫 洛 醉 四 郎 とし子 鐘 造 宗 明 倫 子 度 久 章 子 充 子 玄 也 俊 子 三代子 隆 盛 和 香 半 覚 盛 夫 敏 子 恭 昌

霜取りの苦勞忘れた冷蔵庫
 倦怠期心に霜が張っている
 霜焼けを知らぬひ弱な子供たち
 朝帰りのボクに厳しい霜柱
 近頃は霜が降りない温暖化
 霜柱踏み現実に生きている音
 具沢山の味噌汁におう霜の朝
 迂闊にも金のなる木が霜枯れる
 霜柱踏んで古里捨てられず
 霜けむりあげて朝日の賑わしい
 髪に霜増えて真つ赤が着たくなる
 霜月の暦命日多過ぎる
 霜柱の芸術品も陽に弱い
 霜さえも愛の炎を冷やせない
 早霜に白い粉を吹く柿すだれ
 佳 しゃぶしゃぶの霜降り舌が甘え出す
 霜焼けのかゆみは遠い日の記憶
 霜柱 土の芸術見ています
 霜降りの肉は高嶺の花でした
 神様のサインで初霜が降りる
 人 青い鳥探し霜林深くなる
 地 夏野菜霜の恵みを知らぬまま
 天 霜柱踏んで大地の私語を聞く
 軸 霜の朝地蔵のぬくい目と出合う

宏 章 遠 野 善 信 シマ子 准 一 雄 々 弥 生 (志) 千 代 (安) 泰 子 朝 子 あずき 霜 石 泰 女 セツ子 千 里 英 旺 典 子 一 粹 扶美代 苺 英 子 藤井正雄

収 穫

青山 久子選



お初穂は先ず神様に供えます
 収穫を日記に書いて今日終る
 収穫期猫の手になる子が帰る
 収穫の時を夢みて種を蒔く
 収穫の喜び命の唄があり
 収穫を目指して駆ける棒グラフ
 初めてのつかいたんとつく自信
 プチ家出少し世間を知りました
 他所の飯食べて悟った人間味
 バイトして世間の裏が見えてきた
 気がつけば少し大人になった旅
 一まわり大きくなって子が帰国
 産み立ての卵とられた鶏の顔
 一粒の愛が元気を実らせる
 稲刈りをすませ案山子にありがとう
 旅の収穫夫婦の会話取り戻す
 収穫は万万年歳と祭り笛
 豊作に案山子もうれしそうに立ち
 とれ過ぎたキャベツ涙で処分する
 もぎたてのトマトに汗の味がする
 台風一過収穫ゼロの爪跡よ
 柿八年これ穫れました仏さま

あやめ 康子 千 里 昌 鼓 洛 醉 一 花 (富) 富 子 遠 野 三 代 子 茂 代 深 雪 三 代 子 像 山 三 子 旋 風 泰 女 たず子 徳 三 弘 風 寿 美 勝 巳

茄子西瓜 神のセンスに脱帽す
結論は秋の取入れすんでから
里芋がどっしり胡座かいている
収穫の胡瓜一本提げて来る

出来秋の今年の汗はよく笑う
全没というなによりの菓飲む
今少し爽り切らない娘が嫁ぐ
芋を握るどの子も祈る姿して

ひと夏の恋が実って秋の風
手ごたえは確かだったと軽い足
台風一過収穫の稲べそをかき
マイ野菜自慢も出しに芋煮会

今しばし色香楽しむ初りんご
落日に手を合わせてるコンパイン
稲刈ってとてもおいしい雨の音

佳
じゃが薯を掘ればころころ子沢山
収穫の頃は母の忌が巡る
デジタルな頭の孫も鎌で刈り
収穫の近道父の背で学ぶ

人
好き好きと押しして収穫あつた恋
地
休耕田昭和が風に揺れている
天
稲刈って薫焼く煙有情かな

軸
ささやかな収穫でしたお月様

あずき
扶美代
佃子
虹汀
慕情
半覚
彩子
砾
岳子
淳司
一風
安泰子
岳子
充子
蝨

お 金
出口セツ子選



どろどろの金が動いているもつれ
食べる金あれば執着などしない
借金はいらない人も貸さぬ主義
守銭奴が筆頭にいる寺の寄付
さい銭の行方神にもわからない
冷蔵庫満杯になる給料日
年金を当てにしている頭金
過疎の町立ちのき料に飛ぶ噂
男から女へせびる手切金
農一途お金に縁のないくらし
宇宙旅行するには足りぬお金です
甲子園金の卵を金で釣る
金勘定している妻の澄んだ眉
年金を楽しむために遣い切る
お金だけでないと思っていた誤算
わが家では一番お金遣う犬
お金では買えぬ幸せ噛みしめる
あの世へは六文だけがあればよい
霊界もお金が物を言うらしい
騙される金の匂いにするメール
十円の値打ちを知ったアルバイト
ちよつとだけ危ない金にある魅力

弥生
旋風
茂代
権悟
一壺
きらり
碧
徑子
岳水
妻子
こずえ
章久
霜石
ルイ子
美明
志洋
ゆきの
昌鼓
徳三
庸佑
浜丘

北朗
美明
公誠
弥生
正雄
セツ子
霜石
土橋
螢

富子
章司
柳弘
シマ子
方子
栄呼
一風
幸雀
典子
遠野
朝子
宏章
勝視
英旺

昭和历史に命一錢五厘の価値
命より早いペースで減る預金
お金では買えぬ真心だつてある
アルミ貨の軽さで命ながらえる
お金では買えぬ命が軽すぎる

人
年金が命を抱いている余生
地
銀行に口ハで虎の子貸している
天
汗よりも軽い日銭へ靴を履く
お金より光る大事なものがあ

軸
お金より光る大事なものがあ

福士慕情

年金で満ちるふたりの紅葉狩
縁切りを覚悟で友に貸すお金
お金ではないと育てた茄子キユウリ
年金の目減りに猫も怒ってる
金喰い虫が三匹もいる我が家
整形のローン彼には内緒です
香水の財布も嫌う諭吉さん
お金には奇麗な人で苦勞人
持ち慣れぬお金を持って不眠症
銀行の金庫でドキドキしてる金
金よりも愛とは女信じない
お金より愛と云うのはどうかしら
最後には金で納める世が怖い
ゼニ金に非ず刺客をさしむける
いのちまで金に換算するこの世

佳
昭和历史に命一錢五厘の価値
命より早いペースで減る預金
お金では買えぬ真心だつてある
アルミ貨の軽さで命ながらえる
お金では買えぬ命が軽すぎる

人
年金が命を抱いている余生
地
銀行に口ハで虎の子貸している
天
汗よりも軽い日銭へ靴を履く
お金より光る大事なものがあ

軸
お金より光る大事なものがあ

福士慕情

富子
章司
柳弘
シマ子
方子
栄呼
一風
幸雀
典子
遠野
朝子
宏章
勝視
英旺

昭和历史に命一錢五厘の価値
命より早いペースで減る預金
お金では買えぬ真心だつてある
アルミ貨の軽さで命ながらえる
お金では買えぬ命が軽すぎる

人
年金が命を抱いている余生
地
銀行に口ハで虎の子貸している
天
汗よりも軽い日銭へ靴を履く
お金より光る大事なものがあ

軸
お金より光る大事なものがあ

福士慕情

初歩教室

題 — 親 戚

三宅保州

同想句を超える句を！

今回も相変わらず同想句が多数あります。『思い浮かんだ始めのうちの発想は捨てよ』としばしば聞かされているはずですが：しかし、逆説的に言うると、同想句は絶対的に駄目ということでもないのです。むしろ、同想句を作り続けて、それを超えると佳句が生まれてくるとも言えるのです。

故橋高薫風師は「初心者のうちには思うままに作るべきで、指導者も文句をつけない方がよい。これこそという句が出来だせば自分でそういう問題は考え出す。それが本物になる」と述べられています。そこで、平凡な句や佳句を取捨選択出来る力を身につけるため、多作・多読・多捨が肝要になってきます。そして、他人の真似事でない自分の考えや経験を、新鮮な表現と感覚で作句したいものです。

六大家の一人楳元紋太氏も「同じ言葉を一程度と使わない覚悟、これができれば同一同想

の句はできない」と述べられています。

【同想句】（一部添削済）

「選挙を詠んだ句」

選挙時は遠い親戚近くなる
選挙時は急に親戚現れる

名ばかりの親戚頼る選挙戦
親戚を二分している選挙戦

腰低くなって本家の村議選
親戚が多いと勝てる地方選

親戚と言われ一票断れず
親戚の票を取り合う村議選

「有名な親戚を詠んだ句」

親戚に有名人のいる家系
親戚が俄に増えた時の人

有名になった親戚自慢する
親戚と言えないこともない偉人

俳優と遠い親戚自慢する
金メダルとると親戚増えるらし

出世した途端親戚増えてくる
出世して顔も知らない身内増え

親戚が俄に増える御業転
「親戚への土産を詠んだ句」

親戚が多く土産が重すぎる
土産一つ持たずに迷う嫁ぎ先

親戚のみやげに心配る母
親戚へのみやげは同じ物にする

「焼香順等を詠んだ句」

焼香順採めて離れていく身内
傘寿越え止め焼香に指名され

席順を決めかねている喪主の顔
「形見分けを詠んだ句」

見馴れない親戚もいる形見分け
遺産分け知らぬ親戚現れる

「添削・批評句」

原 親戚と言われたくないあんな奴
原 自家自慢親戚叔母の口惜し

原 自家自慢親戚叔母の口惜し
「あんな奴」「口惜し」は句品が欠けます。

原 親戚のつき合いしたくない人も
一句目「親戚のつき合いしたくない人も」

原 燃えやすい血の集まりの同十討ち
上・中・下ともに激しすぎるらしい。

原 燃えやすい血筋揃って盛り上がる
原 末席に親戚一の高齢者

原 末席に親戚一の高齢者
年齢を具体的に詠みませんか。例えば、

添 還暦もまだ親戚の末席で
添 百歳の親戚が居て座が和む

添 遠方に近場にありて深呼吸
「親戚」と分りにくい句になっています。

添 遠方と近い親戚使い分け
添 遠方のつき合いにも限度ある

添 遠方のつき合いにも限度ある
中上。「お付き合いにも」で簡単に中七に。

添 遠方のつき合いにも限度ある
原 法事では賑やかなるが知らぬ顔

添知らぬ顔も混じつて賑やかな法事
原親戚のあればニユースの気にかかる

サキ子

ニユースを具体的に詠みたい。

添 台風の進路に親戚が住まう

信子

原 一人子に親戚出来た嫁が来て
上下入れ替へると繋がりがよくなります。

添 嫁が来て親戚出来た一人っ子

原 親戚のお節介やは止めとくれ

添 親戚に節介焼きが居て困る

原 遠方の親戚厚くもてなされ

添 遠方の親戚たまに会うと良い

原 少子化の波が親戚削りゆく

添 少子化の波に親戚減つてゆく

原 親戚もどこからどこか解せぬまま

添 親戚もどこからどこまでか解せぬ

原 御本家は旧家ですよと屋根広い

添 ご本家の威厳を見せる広い屋根

【少し工夫すると佳くなる句】

原 親戚にうっかりこぼす愚痴話

添 親戚に愚痴ると噂広められ

原 より好み出来ぬ親戚持て余す

添 親戚と即かず離れぬお付き合い

原 親戚の枠外だけ信じてる

添 極く薄い親戚だけ気が合つて

原 故郷では噂は撒けぬみな身内

像山

千華

宏子

みね代

水昇

順子

千代子

(畑)節子

タカ子

千代子

添 故郷では噂もできぬみな身内
原 親戚はスーブの冷める距離も良し 寒千代

添 親戚はスーブの冷める距離も良し

原 遺伝子が似ているほどによく喧嘩

添 遺伝子が似ているほどによく喧嘩

添 遺伝子が似ている所為がよく喧嘩

原 親戚もお金からんでもつれだし

添 親戚もお金からむともつれ出す

原 親戚の真ん中に居て気楽です

添 親戚の真ん中に居て気楽

原 親戚の皆ドンクリの背比べ

添 どんぐりが並び親戚仲がよい

原 親戚が末広がりの子たくさん

添 親戚を亡くしましてとずる休み

親戚にも飲兵衛がいた披露宴

祝結婚新たなお顔増えました

義理を欠き親戚少しずつ減らす

親戚も代が代わつて遠くなる

親戚もけじめがあれば温いもの

親戚の傘のお陰を子に遺す

親戚が増えてうれしい四世代

あの方と血縁ですと売りにくる

金策をすると親戚遠くなる

親戚も従姉妹同士は花が咲く

一声でワツと集まる従兄弟会

秀四

利子

アイセ

幸

洋子

孔一

映子

美恵子

昇

こずえ

ただよし

ただよし

世話好きの伯母を走らす適齡期
親戚の中の目玉は初歩き

親戚が一同と書くお葬式

祖先までたどればみんな親戚だ

【今月の推せん句】

親戚の間かねば済んだ訃報くる

弔電で済ませる程の遠い縁

親戚の弔事の報に、頬被りするか、弔電のみか、お参りするか、香典は幾らにするか、今後のつき合いを左右しかねない一大事です。この二句のように薄い親戚もそれなりに悩む態が巧みに詠まれています。

親戚が多く留め袖休みなし

この句も、親戚が多い慶弔事の大変さを「留め袖」という擬人法を使つて詠んで成功しています。

親戚も遠く離れて仲がよい

この句と同想的な句はありますが、技巧的に飾らず端的に詠まれて、共感を呼びます。

実家からの生活保護に甘えてる

この句の命は「実家からの生活保護」という着想と表現に尽きます。それにしても、親の愛情一杯の「生活保護」でしようね。

【私の句】

親戚にだけは言えないことがある

母方のむにやむにやという続柄

百合子

俊子

藤朗

稔

奥時雄

升成好

西村益子

土屋起世子

木村徑子

西村益子

秀句鑑賞

同人吟 中塚礎石

— 10月号から

孫のうそ慈悲の気持ちで聴いてやる

菊地政勝

慈悲とは菩薩が衆生をあわれみ、いつくしむ心でありますから、孫の嘘を菩薩になった気持ちで聴いていた。作者は好々爺で円満な家庭が見えてくる。衆生に樂を与えることを慈、苦を除くことを悲というそうです。

歳の順だから座れた床柱

平田実男

席順を歳の順で決めると簡単である。私もそんな歳になりました。お斎の席などで床柱に座るようになると、何となく空しさを感じます。

几帳面すぎて兄貴が嫌われる

土橋睦子

長男は総領の甚六といわれて、甘やかされて大事にされすぎたせいとか、弟妹に比べるとおっとりして世間知らずが多いといわれるが、反面、長男という責任から几帳面で儉約家が多いようである。几帳面すぎる長男は嫌われる羽目となる。

自慢することがないから隅にいる

岸本孝子

自慢するようになると向上心がなくなり、その人の知恵もそれでおしまいということになりますから、自慢する人達の輪から離れて聞き役でいる方が利口ですね。「自慢、高慢、馬鹿の内」という諺がありますね。

元気がねメダカへ朝のご挨拶

山宮愛恵

メダカも魚の内です。私宅にも春に数匹であつたのが五十匹を超えているようです、小さなメダカでも魚には違いありません。朝食前に餌を与え、しばらく対話をしているような気がします。ストレス解消の小さな手段ですね。

夾竹桃六十年を語りつく

青戸田鶴

夾竹桃といえは原爆、終戦を思い出す。紅色の花は炎暑の青空に似合ひ、六十年を語り継いでいる。七月に剪定すると一年中線が美しい。尼崎市の花で海浜にもよく育つ木である。

石橋を叩きチャンスを送くする

井上柳五郎

用心をするうえにも用心をして、慎重すぎてチャンス逃した。作者は昔、岡山時代にお世話になった先輩で几帳面な方でした。

川柳は多読、多作に始まり、それによって上達すると教えられてきましたが、秀句鑑賞をするため約三八〇人の句を読ませていただいた。お陰で多読、多作の教えを実感いたしました。原点に返って作句することですね。最近、分ち書き、それも一字あけではなく二分の一あけが目につくようになった。二十年前までは分ち書きはほとんど見られなかったのが、その頃から急に増えてきた。一種の流行となったような気がする。ところが間もなく途切れてしまったが最近、復活してきたようである。

一句を生み出したとき自分の声で披露して欲しい。声を出すことによって空白の余韻を実感することができる。分ち書きは一つの手法であるが、やたらに使用することは慎みたい。間の余韻を実感としてとらえて欲しい。

四字熟語を使った川柳、千六百語句もあるから、初めてお目にかかる語句が多い。あまり乱発されると読者に迷惑である。ほどほどに使用したい。

抜け道をさぐる男の妻楊子

小野 克枝

飲み屋での男同士の会話。一人がしきりに爪楊枝を使いながら思案顔をしている。どうやら抜け道を探っているようだった。勝負は間もなくつくでしよう。

用なしの仮面を捨てた終電車

小林 妻子

朝から晩までの仕事のお付き合い、酒が終るまでは仮面をかぶっているが、終電車に乗ってから仮面はお役ご免となったので、腰掛けの下へ投げ捨てた。サラリーマンの宿命ですね。

合掌の指から落ちていた迷い

川崎 ひかり

合掌をする右手は悟りの世界で仏様を、左手は迷いの世界、私たち人間をあらわしているといわれ、合掌することは仏様と一体になることです。一体になるよう勤めましょう。

冗談のわからぬ人も居る酒宴

横山 捷也

酒に酔うと人が変わったようになって、酒の席の冗談も分からず喧嘩を吹っ掛けたり、くだを巻いたりして迷惑をかける人がいるが、人酒を飲む、酒酒を飲む、酒人を飲むことのないように。

カタカナに出会うと狂う古時計

山岡 富美子

国際化時代を反映してカタカナ語の氾濫が甚だしい。そのうえ外国語まがいの私製語まで多数登場して、一層ややこしくしています。若い人は新しいカタカナ語をつくったりして調子に乗って浮かれておりますが、老人には外国語の交通整理をするどころか、脳は混乱状態です。辛抱いたしましょう。

子だくさん左團扇を期待する

土橋 房枝

子沢山で生活は苦しいが、二十年も経って子供が一人前になると何の心配や苦労もなく、のんびりと暮らせることを期待している。

百めざす父は黙って酒を飲む

水野 黒兎

大酒を飲めば百毒の長である。あらゆる薬の中で酒が一番の良薬であります。お父さんは百をめざして酒を百葉の長と称えて飲んでおられる。うらやましい限りです。

泥かぶる事にも慣れた顔の皺

大橋 鐘造

失策などの責任を自分一人で引き受けることであるが、当事者は苦勞人が多い。私ごとろをかぶるから心配しなくてもよいというたびに、顔の皺が増えていのように思う。

百度石撫でて祈った傷がある

桑田 ゆきの

心か体の傷の全快を祈って百度石を撫でては合掌した思い出の傷がある。武運長久の百度参りを何回かやったことがあるが、子供ながらに真剣であった。百度石を思い出しながら傷痕を撫でてください。

悲しみを笑顔で語る三回忌

田辺 鹿太

三回忌ともなると服装も喪服から、だんだんと緩やかになってきて笑顔を見せるようになる。法要は七回忌、十三回忌と、きちんと営むことが、一族の笑顔の絆を強めるものと信じております。

間違えて覚えた文字が直らない

西内 朋月

義務教育時代に覚えた文字の中で、間違えたまま覚えこんでいるものがありますね。六十年経っても直らないのが不思議である。その都度訂正されても癖になった文字は一向に直らない。癖というのは困ったものである。

言い訳をしないと決めたコップ酒

坊農 柳弘

コップでぐつと飲む酒は何かがあるときですね。悔し涙の言い訳はしないと決めた酒は、格別の味が舌に染みるものである。

—水煙抄

秀句鑑賞

—10月号から

松下 比ろ志

座布団に話の続き置いてくる

佐甲 昭二

客が帰り後片付けをしながら「さてどうしたものでしょうお父さん」などと、この句の後のドラマを、つい想像したくなりました。

母の愛そのまま出来たにぎりめし

塩路 よしみ

部活へ元気に出かけて行く子供の顔を思い浮かべながら、握るおにぎりがだんだん子供の顔になってくる。母ごころの一端を見せていただきました。

無風地帯の中で欠伸するころ

柏原 夕胡

無事は好日ということは頭の中で解つていても、つい欠伸の出る思いが湧くのは何故だろうか。聖人君子にほど遠い凡人だから、泣いたり笑ったり欠伸をしたり。だから人生は楽しいとひと捻り、同感です。

六十年いろいろあった人生よ

近藤 秋星

戦後六十年、私達の世代はみんな苦楽を積み重ねてきました。ひと口には言えない六十年、誰もが「よくぞ我が人生」の思いを抱いているとおもいます。

運不運まだ決まらない古希の坂

羽田野 洋介

運は掴むものとも言われていますが、私は掴みどころのないのが運だと思っています。また人生には、最後まで結論はないものとも思っています。古希の次は喜寿そして傘寿、気楽にいきませんか。

さらさらの紙も私も裏がある

両川 無限

真っ白な紙にも裏があり、人もまた後ろ姿に人格があると言われますが、元来人間なんて表裏を持つほど器用じゃないと思います。裏があるなんて錯覚ではないでしょうか。

一色で描ける真面目な父である

山田 侃太

自分が父親になって初めて見える父親像は、一色に昇華するものかも知れませんね。

お茶でもと声かけられて長くなり

向山 治延

声かけられた人の、人柄が浮かんできます。

辛酸を舐めた男の笑い皺

飯土井 健翁

秋山庄太郎の写真展で見た「男の年輪」を思い出しました。逞しく生きた男の笑い皺には、香り高い味わいが滲んでいます。

カーテンを開けて満たしている自由

やまぐち 珠美

カーテンを開けると、窓越しの空間があります。そこには現実の景色と、様々なドラマが生まれる心象風景があります。雲にも夢追いかける空があるように、空間にも夢や自由がいっぱいあります。駈け回しましょう。

朝顔のよく咲いている角の家

古川 正子

通い慣れた道にも、心を癒してくれる四季それぞれの色合いがあります。角の家の朝顔に語りかける作者の、まなざしが温かい。

いい話何度聞いてもいい話

石野 照代

いい話は、何度聞いてもところを洗つてくれます、話す人も聞く人も爽やかです。

可愛いと顔より服を褒められる

藤永 実千代

まあ可愛い服を着て。でも顔も可愛いと褒めてくれている、と思いませんか。子供は可愛いものと決まっていますから。

老也翁

毎月24日締切・30句以内厳守
編集部

ローズ川柳会

山崎

君子報

月命日今朝も咲いてた月見草
ヒロインのオーラ盗んでいる呪文
力合わせて蟻もロマンの穴を掘る
西瓜食べ父母の在りし日なつかしむ
今の世はヒロイン強くたくましく
絢爛たる光源氏が迎る道
忍び寄る秋と耳打ちなど少し
夏瘦せせず処暑を迎えて気が楽に
別離とや延々戦後六十年
カラオケでヒロイン気取りでも上手い
処暑の雨空気が甘い秋つれ

川柳エスボ

山本

三郎報

余裕など有るはずがない火の車
ふところの余裕はないが笑顔よし
今ゆとりけれども何か物足りぬ
手際よく仕事済ませて余裕あり
時間には余裕を持って焦らない
余裕ある時間を過ごす心がけ

三郎 高栄 任有 ゆき子 さち子
文好

思いやる心の余裕花と咲け
こづかいの値上げを言えは余裕なし
世の中は皆あくせく余裕なし
余裕なく石橋たたく貧乏性
余裕なくどうろはすなない日本だ
ワンカップ呑める余裕がありがたい
藍ちゃんの余裕の笑顔齧を出す
ライバルの余裕感じて腹括る
ゆたかな世なぜに余裕のない暮らし
一人居の小さなゆとり花を買う
余裕なき過密タイヤの大惨事
鶏が空みて卵産む余裕
心の余裕出来ても何やらすき間風
終戦時 米は仏に見えていた
雨の日は堂堂と出す残り物
雨の日は人が恋しい蛇の目傘
雨に咲く歩道彩る傘の花
八十路四国遍路の夢を見る
子供らに夢を託して今侘し
ほろにがい青春の想い出夢に出る

川柳塔おっぱい吟社

木村あきら報

空回りして思い知る老いの自負
無言から無視へと変わる嫁姑
ライバルの傷口触れぬ事にする
雨上がり虹の向こうに亡母が居る
若い気であるのに歳をよく聞かれ
益休み休みにならぬ水管理
病床に生きる姿を見せられる

よしみ 賢 あきら いさむ 文仙 放任 八重子

星花 よねぞう 団地 たたよし 晩翔 さとし 一歩 ルイ子 一炊 れい子 はつよ とし子 とよ子 昭一朗 恵美子 鈍甲 三枝 綾子 みさと 一幸

ごめんねが言えず今夜もダンマリで
ビーポーを遠くで聞いて夢の中
活性を目指しお披露目満月踊り
合掌の指から落ちていた迷い
決断はコーヒ一杯飲んでから
打ち解けてお喋り出来る友が居る
宴会で他人を笑わす隠し芸

川柳塔のぞみ

播本

充子報

恋してるうちは寝言もまんまるい
炎天下並んで食べるほどでない
まさかまさか猿が使った販売機
いまいちの出来に努力の汗が泣く
リフォームのワンピース着て弾まない
ヨン様とさけぶ寝言のうるさ過ぎ
寝言でもまだ託びている社のトップ
いまいちの天気のをぞむ投票日
コイン入れると動き出しそうです夫
いまいちの母からいい子いい孫が
今ひとつ釈然とせぬ遺産分け
無駄な事であれと防災品そろえ
いまいちと言われサタンが怒り出す
いまいちと思いつつ来た今が好き
言い訳は無駄です妻のうす笑い
先輩の注意はデリカシーに欠け
いまいちのジョーク悲しくなってくる
貯金箱持ち出せぬほど重くなり
恐山アルミ貨が舞う風車
ぬるま湯に耽つてねごと吐いている

千恵子 清勝 典子 育子 慕情 久峰
貞月 かおり 寿々女 ひかり 初恵 輝夫 治延
千里 文子 光久 哲代 権悟 恭昌 方子 保州 円女 哲男 賀世子 千恵子 清勝 典子 育子 慕情 久峰

寝言言う体が少しおかしいね

噴水と見ればコインを投げたがる

日本中沃土にするとみみず言

正気では出来ぬ言い訳する寝言

貯金箱コインと夢を入れてる

コインロッカー一人の秘密知ってる

子を叱る妻の寝言にとび起さる

コインじやらじやらい風が吹く予感

川柳塔みぞくち

小西

雄々報

イベントの夜空を焦がす大花火

最後には花火のように消えたいな

ナイヤガラ仕掛花火に汗も消え

大山の花火天まで届きそう

地球には咲かない花が夜空咲く

メルヘンをふと思いだす花火見る

パツと咲く花火に思ふ散る美学

熟練の打ち上げ花火きそう空

花火ショー家族揃って座席とる

花火の夜想い出父の肩ぐるま

感嘆詞湧きでるように花火見る

川柳塔おとり

鈴木

一弘報

合併でふるさと村は過去のもの

戦争は過去と言えぬよつきまとう

抽斗の奥にたたんだ過去の愛

冷蔵庫の隅へ期限の切れたハム

あの時に決めれば良かった過去がある

わくわくと無一文から身を立てる

三喜夫

俣子

康子

あやめ

日出子

シマ子

由一

充子

旅支度わくわくあれもこれも詰め

初対面心わくわく孫と会う

わくわくを押えきれない玉手箱

恍惚の母のハミングわらべ歌

日差し浴び鳥に負けずに歌う朝

酔っ払いマイク握って離さない

雄弁な友はわくわく笛を吹く

健康は今日もはなうた歌ってる

ばあちゃんが自転車で歌置いて過ぎ

ふるさとを歌えば浮かぶ幾山河

川柳塔唐津

仁部

四郎報

垣根越し釣果差し出す黒い腕

井の中の蛙が性に合っている

引揚げの様を語ってくださった

うたかたの余生の庭に咲いたバラ

カラオケが終り独りで飲みなおす

どの顔も善男善女盆おどり

食べたいと先にアダムが言ったのか

渾身の脱皮哀しき法師蟬

同性を見る目厳しい審美眼

雑詠が出来れば他はしれたもの

高槻川柳サークル卯の花

龍本きよし報

うちの人片付け言っても糠に釘

五寸釘家の寿命を知っている

古い二人互いに糠と釘の仲

釘抜きで抜いてやりたい妻の舌

耳栓をして母の棺の釘を打つ

由多香

知恵

一弘

幸次郎

(若)和子

黙光

登美

以和万津

道子

風花

佳句地十選 (10月号から)

松尾和香

きんつばに御飯一膳減らさねば

詩を愛す兄の日記が蔵を出る

人類と悪魔が握手する核よ

月の夜の海た背泳ぎでもするか

天命と受け止めてはる闘病記

亡き母の糠漬け恋し夏野菜

たましいを入れる時間をかけている

刺客など恐い言葉の出る選挙

微笑みの出来る老後を予約する

ライバルと思っていないのが挑む

緊張で口からからの初仕事

脳みそが乾かないよう喋ってる

そつば向いて喋ると言葉まで乾く

言い逃れかさかさ乾くたなごころ

乾くのはまだまだ早い万歩計

愛されてはいない言葉が乾きだす

乾かないうちに蓋するいい話

出しゃばって幹事引き受け不眠症

あの一手悔し今夜は不眠症

緊急解散議員先生不眠症

不眠症終日うつらうつらです

天井の染みを数えて不眠症

秋茄子を嫁に食われた不眠症

言っていないことまで書いたひびん

ひどい目に遭って人間肝座る

和香

瑞枝

洋々

蘭幸

清史

東吉

汲香

年子

徳子

朋月

照子

典子

宏章

活恵

重人

美義

砂輝守

萬栄

高采

秀夫

稲子

恵美子

晴美

庸佑

勲弘

立ち話ベツトも疲れ座り込む
私だけに通じるものがあるベツト
盗み酒必ず猫が横に来る
実はボク社長夫人のベツトです
花柄を着ても席をゆずられる
誘い水向けるとついてくる尻尾
努力した昨日があつて今日の幸
不景気は賞味期限を貼り替える
かあちゃんに踏み付けられる定年後
葛藤の種は聞かない釣忍

川柳ふうもん吟社

夏目 一稔報

とろいから巽の匂いに気付かない
黄昏の恋に腕立て伏せをする
分別のゴミがゴキブリ迷わせる
グーチョキバーとろい手の内みな読まれ
金に湧くゴキブリ今日も天下る
川柳の森が深く立ち止まる
ざまあみろ知らぬは亭主だけだとき
ざまあみろ女を馬鹿にするでない
白黒をはつきりさせて青くなる
迷い子札つけたお化けが立っている
ざまあみろ大風呂敷がためない
金かけた割りにはとろいジャイアンツ
お化けより怖い女の深情け
失敗をすればそれだけうまくなる
出番待つお化けがメール打っている
オレオレの嘘を見破りざまあみろ
ゴキブリも幸せ探す足の裏

義一 比ろ志 孝一 八斗酸 治三郎 泰雄 武史 佳一郎 美龍 洋々 一瑠 無限 美恵子 秀四 房江 志げ緒 一京 金祥 諏訪男 はおお 孝男 昌鼓 圭一郎 秋月 章子 秀夫

お化けにも片道切符持たせてる
ゴキブリの刺客は妻と決めている
横文字の社会にお化け住みにくい
議事堂のお化けは足がついている
ゴキブリの嫌いな孫に命説く
ゴキブリのように凶太く生きたいね
ネグリジエをさらさら妻が攻めてくる
ピリ走る子どもが僕の宝物
ゾロゾロと上がる談合ゴキブリか
下積み時代お化けの役で喰いつなぎ
とろいので早めにチョコの口つける
ざまあみろ胸につきさす怖い文字
参拝をすると歴史が化けて出る

東大阪市川柳同好会

森下 愛論報

肝試し臆病者が行くと言う
辛口へ臆病者が笑つてる
大声に飲まれ何も言えぬババ
臆病な奴だな核をちらつかす
現金を添えると心生きてくる
肉親の絆現金より重い
現金に冷たくされて生きてきた
目標を決めると力湧いて来た
一も二もなく決めたのが今の妻
白黒の決着つけぬまま夫婦
老人会何かを決める決まらない
不正突くマイクは情け容赦ない
マイクには入れない母の子守唄
メモを読むマイク誠意は伝わらぬ

茂登子 毅 富士雄 節子 稔 雅女 蟹朗 義徳 はつ江 由美子 善夫 益子 一稔 秀夫 あや子 良子 克己 三重子 弥生 和代 太郎 ばっは 美弥子 典呼 高尚 シマ子 敏子

住み慣れた町見違える霧の朝
難題を抱えて霧が重すぎる
男と女の港は霧に包まれる
霧雨もあなたとならば濡れてゆく
竹原川柳会 時広 一路報

ひまわりの高さよ長女二女笑う
年収を少し高めにプロポーズ
ドームから不死鳥高く舞う平和
高い高いところで亡父母の星光る
百年樹の先で親父の眼が光る
倅せかと聞けばうなずく床柱
柱には美人の歴だけ掛かり
子の横に孫の背はかる柱傷
生きてゆく支柱となつた道草よ
老骨でも柱を自負し生きていく
頼られる柱になると前を向く
古里の森を忘れはせぬ柱
紅茶飲む少し優雅になれる時
七色の火花で夏をしめくくる
祈りとは別に朝顔咲いている
やすらぎをフツといたたくお念仏
青い札入れて心が痛むのか
夢一つ空の青さに染まりたい
喜寿傘寿青く生きたく趣味を持つ
マラソンのゲートを抜ける青い風
八十六歳父は青汁飲んでる
挑戦の青い翼が風に乗る
八月のただふり仰ぐ青い天

美子 和子 湖風 愛論 蘭幸 敬子 幸子 比呂子 半覚 菁居 淑子 栄恵 正宏 笹舟 静風 史子 千枝 笑子 房子 規枝 慶子 節夫 千代美 厚子 不朽

群青の海は戦争忘れない
海の青さに解けて心が蘇る

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

輝恵 一路

ひたすらに番番なくとも守る城
この足で歩きつづけた歴史あり

迷いからさめて私の道をゆく
背のびして夕陽見ている胸さわぎ

ちくはくはく聞きちくはくな生返事
背のびして背のびただけの事だった

失敗も追いつ風にして渡る橋
伝言の一字抜けてる走り書き

川柳大坂

高木 信酔報

清泉

コンビニが隣にある嫁いらず
忍耐を補欠の時に確とつけ

グルーブに叱られ上手一人いる
こんな近くに私見守る人がいた

どやねんな好きなら手でも握りいな
見透かさされ大風呂敷を置いてきた

指切りをしないと妙に爪伸びる
長いのはたこ焼きを待つ五分間

師を偲び永久に薫っていますレモン
叱る時そとと添えますほめ言葉

どやねんと自分で聴診器当てている
子育てでも済んでベットの叱りつけ

良かったかそりゃ良かったよ我が人生
乗せられて見せた隙間を読まれてる

その首を洗っておいで大増税

比呂志 一步

語り継ぐ九条母の心かも
真実の教科書でこそ輝ける

脳みそが近道ばかり考える
近くなる宇宙の神秘も恐ろしい

怠慢を叱るも一人の自分なり
浴衣なら少し残っている色気

老いてなお私を叱る母丈夫
ここからはキリトリ線のある補欠

叱られて眠る幼な児天使願
近道は無いと気付いた習い事

暑いからゆうとどやねんその格好
幸せになる近道はどこにある

近未来地球は息を吐けるかな
レギュラーより飯はたっぷり食う補欠

背負った子に叱られている安堵感

川柳塔まつえ吟社

三島 崋丘報

信酔

呷えてると思ひ込んてるボールペン
呷えていた過去は語らぬホームレス

月呷えてわたしも呷える夜半のペン
猪を逃がして月が呷えてくる

さききりと頭が呷えて天を突く
ラプレターますます呷える午前二時

変身のわたしに気づくポチの鼻
変身に四季折り折りの雲の彩

夫唱婦随もう飽きたから自立する
変身をしたのにだあれも気付かない

変身をしたら星屑の仲間入り
詩人になろうなろうと焦る鬼やんま

蘭水 喜美子 和歌子 多喜 桂子 畔

洛酔 美花 笑風 川童 柳弘 照月 柳昌 重人 功

ローソクが漏らした秘密揺れてくる
時刻まで胸にしまっておく秘密

天辺の秘密を暴く縄梯子
二つ三つ秘密を抱いてまだ夫婦

じわじわと秘密に首を締められる
手の中の砂は秘密が守れない

父の背は苦くて甘い道しるべ
背伸びした寡婦の子育て古日記

一歩二歩運が背中を押しあげる
夫婦でも對話が振れ背をむける

背凭れもなく八十路の向かい風
真っ直ぐに生きた背中を見せてやる

辻褄の合わぬ話に嘘一つ
愛し続ける誓った言葉嘘じゃない

仲人の話は少しうますぎる
わだかまる二人に嘘が溶けはじめ

見る角度変えれば嘘が透けて見え
嘘のない夫婦茶碗の笑い声

長柳会

村上 直樹報

空っぽの中味でうめるマニフェスト
手も足もほしいとだるまひつづけ

老いてなお心の余裕持ちつづけ
少子化で余給の老後あてはずれ

ストレスもサイフも空の旅帰る
目があかぬダルマつめたく処分され

手も足も出さずに咲いた曼珠沙華
頑張れと僕をにらんだ達磨の瞳

安全を無視したツケが大惨事

直樹 靖子 明子 美代子 正一 孝彦 靖博

直樹 靖子 明子 美代子 正一 孝彦 靖博

ブランドを捨てて余裕の低い垣
精一杯波立つ心かくしてる
定年で余裕たっぷり持て余す
通帳の余裕を調べ旅プラン
遺産分け蓋をあげればからっぽだ
解散でだるま職人上機嫌
浪費したからっぽ財布風に舞う
冥果て討死多しビール瓶
からっぽの心に届く温い声
修羅場にて水を一杯飲む余裕
驚いて手も足も出ぬたち話
コンパクトはちんと余裕取り戻す
からっぽになつて身に沁む人の情
余裕ある振りが苦しい喫水線
ブランドの財布の中はいつも空
女房には手も足も出ぬ忍の居士
人間を裁く余裕は俺にない
あの人の心宿している余裕

川柳ささやま 遠山 可住報

ほころびを縫う針だけは錆びさせぬ
今昔の先祖どうあれ盆まいり
先祖さま感謝半分愚痴半分
溶け合つて似たもの同士凡夫婦
回覧板から誘われる町ニュース
満天の星にシャトルのとぶ平和
ご先祖に報告したい事が増え
お盆だけ一年分を拝んどく
先祖さまも私も好きな豆ごはん

芳野 もこ 武男 明信 ひろし 幸雄 けい子 正子 史 正美 輝子 一慧 和代 富美子 たけし 淳司 よしお 和子

ニュース聞くテレビのお陰ありがと
小判など埋めた憶えのない先祖
青い瞳の妻を先祖に引き合わす

尼崎いくしま川柳会 春城武庫坊報

柿の実が少し色づき秋近い
すぐそこよと聞いたが遠い田舎道
処暑過ぎて昨日見ました赤とんぼ
膝の傷勲章にしてとんぼとり
黄昏の水平線を青く塗る
黄昏の月よお前も淋しかり
黄昏をよそに炎えてる甲子園
黄昏は青春の日の大ゆれ小ゆれ
自然破壊止めろと荒れるハリケーン
初さんま背筋伸ばして焼かれゆく
サルスベリ炎暑に咲いてありがとう
両の手で抱えてみたいまじゅしやげ
そっけなく乱戦を見る外野席
核心に触れず氷菓溶けてくる
ネムの木のおんが立っているような

西宮北口川柳会 黒田 能子報

交換のノートに春が目覚めする
あせているノートのめくって覗く過去
撫でてみる亡母のノートのなみだ跡
爽やかに香るすだちで味決まる
決定権持つているのは母だろ
この一手決めておもむろお茶を飲む
また決まる全員一致の先送り

富子 可住 哲男 幸子 宏一 昭三 武庫坊 寛之 純 勝巳 年代 東園 しづ子 正子 久子 紀乃 半蔵門 薫

ほめ言葉以外は耳が欲しがらぬ
ラストダンスはあなたと決めてるニューズ
まったけは国産以外しか買えぬ
寝る以外することがない老いた猫
あなた以外愛許さないバラの自負
趣味のこと以外は無頓着です
働くこと以外は知らぬ厳つい手
愛以外傷の底まで癒せない
応援が活躍をするネット裏
病院で出ない薬を買うネット
怖いもの災害以外何もない
インターネットで命の行方摸索中
居ながら旅のプランはネットから
棺桶もネット販売あるそうなお
お疲れさん人生いろいろ終電車
エプロンが晴れ着のような母でした
雀百まで赤い鼻緒の盆踊り
ローズマリーイタリア風が煮えてくる
生命線とぎれとぎれでまだ元気
秋雨前線粋な予報士一句添え
補聴器へ昔話が弾み出す
悪友の名前以外は知らぬ妻
朝顔がしほみ私も枯れて秋

川柳茶柱 板山まみ子報

重いザル至福感する庭の幸
昔から衣装貧乏クールピズ
茶ばしらが立ち幸先の良い門出
秋風が琴線に触れあわてさせ

章子 たず子 石舟 鹿太 孝一 求芽 光久 貴代子 江美 忠 歳子 哲子 文 千代 一月 五月 昭三 富喜子 順子 いたる トミエ 哲男 房子 秀水 文男 盛夫 百合

種なしにされて味ある黄西瓜
笹舟の夢大海の波に乗り
茶柱も立って揃いの渡りぞめ
後押しのある学生兼ねる主婦
船出する茶柱のゆめフェニックス

岸和田川柳会

原 さよ子報

優しいが心は強く負けぬ孫
優しい亭主気付かずつと尻に敷く
妻よりも優しいペットそばに置き
優しくも厳しくもあり父の愛
父の眼が優しくなつた老いすむ
無理せず短い余生のんびりと
短いがいくさ知つてる父の顔
しゃぼん玉命短かし空の旅
気短かで腹立てる人蚊に好かれ
ありがとう五文字に母の目がうるむ
繕えど矛盾だらけの嫁姑
胃腸薬飲みつつ今日も梯子酒
神様が見れば矛盾でない浮世
死にたいと言いつつ今日も医者通い
世の中の矛盾を笑う漫才師
核を矛に核を盾にと言つてはる
恵まれた四季を映して京の菓子
菜園の恵み分けあう両隣
恵まれた資源が招く争奪戦
地割れして恵みの雨を待つ田圃
子宝に恵まれ家計火の車
元帳の幾多のドラマ知る栞

幸子 美千代 かつ子 百合子 まみ子
ふみよ 和美 香枝 房枝 基 穰一 狸村 力子 珠子 みよ子 弘子 守 ゆい 浅子 みね代 ダン吉 みつ江 さよ子 寿海 幸子 東吉 仁緑

くたびれた手帳の数字元帳へ
元帳をゆずつてからの二人旅
元帳より母の記憶が確かです
音高く元帳閉じる五時男
たつぷり金持つていていつもけち
船乗りが陸酔いするという矛盾
元帳はこのパソコンの中にある
元帳に書いていないが銭が合う

八尾市民川柳会

宮崎シマ子報

宅急便子等の温もり解くふたり
ロボットの手は人間を越えている
指切つたロボット血がないことを知る
操っているのは人かロボットか
萩桔梗去年のとおり虫すだく
夏を耐えた虫だ光っているだろう
息子等よ飛び越せ父もハードルも
ライバルに越されてからの不整脈
ハードルをひとつクリアした自信
ドア越しに耳聞いている妻が居る
越せそうで越せない垣根君の胸
越えて来た七坂八坂修羅の坂
三度目の初恋かも月の兎
行くつ唄川面をよぎる秋の色
あつい夏へ孫の残した氷菓子
あつい日にデパートだけが秋してる
榎山へ行く日も日傘忘れぬ
熱燗を含み具に秋を読む
涙色とはどんな色かと迷う筆

岩夫 ゆり子 笑司 蛙城 甚一 洋 榎代 呂万 是じむ 秋雄 幸生 浩三 柳伸 ダン吉 ますみ 更紗 巳代一 春蘭 耀一 シマ子 あかり 弘直 加津子 レイ子 一風 欣之 欣子

健康を覚えてくれた腹時計
思い切り泣いて嵐が吹つとんだ
屑籠へはいとほり込む捨てゼリフ

高知川柳社

川竹 松風報

女には注意してネと亡母の声
注意して生きたつもりで落とし穴
猛犬に注意と書いてチンが居る
取りたての免許に家族皆注意
還暦へ赤寿の母はくどくどと
点滅へ赤信号で登る坂
仏にも鬼にもなれず老いてゆく
雨が好き母が迎えに来た昔
もう少しこのまま居たい傘の中
落書は熱愛ですか傘マーク
借りてきた傘が疑惑を置いてゆく
五十路来てなお親の傘感じる日
肝心なときに善意の傘がない
相合いの傘の相手が気に入らん
雨傘を忘れて帰る縄のれん
今更に守られて来た父母の傘
真心で育む花がきれいな咲き

川柳塔なら

坊農 柳弘報

まいどです女の意地のあまのじやく
良くも悪くも裸になって生きている
大声のまいどに弱いわたしです
まいどあり出前が尻で入ってくる
古稀越えて蛇足の道で遊んでる

宏至 弥生 民 孝雄 悦子 圭二 かつ子 功 幸 京子 てるみ 暖 えい子 まき子 圭風 美々 松風 和江 竹萌 敏子 芙佐女 信子 春雄 博一

ミスしても惚ける知恵が付きました
福娘嫁入り口の声かかり

明日もある軽いミスなら仕舞い込む
子を叱る父にもあった同じミス

少子化を尻目にミスのままで暮れ
皺とミス生きた証として保存

目と鼻の配置に少しミスがあり
若者の会話通訳の時代

お若いと言われて増える化粧品
失敗を恐れず挑むのも若さ

南大阪川柳会
吉川 寿美報

南大阪川柳会

吉川 寿美報

にこにこまんが地で行く蛭子さん
四コマのまんがで余生埋めていく

まんがみたいな人生やたと通夜の席
四コマにくすと朝が元氣つく

捨てられずタンスの肥やし増えてゆく
買い溜めにあらず備蓄という在庫

バーゲンの在庫でおしゃれ決めている
子を褒める言葉いっぱい在庫する

母さんがこれから吠える夏休み
吠えたつて後に戻らぬ電車道

妻は虎吠えて逆らう犬の僕
ほほえみが戻つてつなく手が熱い

ピアガーデンさつぱりですと雨つづき
めぐみさん老いし父母の地いつ戻る

やるだけはやつた夜空の大ジョッキ
さつぱりとした嫁さんで仕切られる

喜久子 美喜 猿杓 志洋 かつみ みつこ いさお 章司 久仁子 庸佑

喜久子 美喜 猿杓 志洋 かつみ みつこ いさお 章司 久仁子 庸佑

地下鉄でうろろうる迷う田舎もん
過去さつぱり振り切り自分の道さぐる

さつぱりと茶漬がほしい旅疲れ
満願がきれいに刺らす無精髭

さつぱりした風に出合った炎天下
さつぱりの味でもてなすのど仏

合併の祭囃子に血がたぎる
祭りには通訳なんて邪魔なだけ

祭りにはきまつて母のちらい寿し
宵祭り鱧と鰻は欠かせない

宵祭り今夜返事をすつもり
星祭り女一途なものを抱く

五人寄れば祭り気分の縄のれん
富柳会 池 森子報

写されて野に咲く花は風に乘る
逆風に触れたか影が凜とする

寂しいと言えば星みなしやべりだす
本の虫本の鬼ともなつて夏

DNAナノバイオロジーの不思議
美人よりすこしくずれた君が好き

レントゲン今日の嘘まで写される
八月の汗ひろしまの彩を溶く

小さいが親切の種蒔いている
根回りが良すぎて嫌らしいヒト科

この暑さ犬の呼吸を真似てみる
気がつけば私一人が蚊帳の外

猫まんまあと半日は哲学者
私の半身に罪と罰がある

和子 一慧 扶美代 紅紫朗 淳司 冬虹 和代 鬼焼 英子 順子 隆彦 鐘造 奈保美 アキ

和子 一慧 扶美代 紅紫朗 淳司 冬虹 和代 鬼焼 英子 順子 隆彦 鐘造 奈保美 アキ

まだ半熟半分ほどが塩からい
ゆつくりと宇宙を映す星になり

幸いに右半分が残つてる
まだ頼る家の梯子の釘の数

頼られる母は努力の肝つ玉
激流と語り丸くなった石

たましいのうす暗がりに美し恋
写し絵の中で少女がうすぐまる

哀愁を秘めた羅漢の半眼よ
棘のあるひそめ話の輪もしろい

携帯を購つて家族の輪に入る
半分も語らず溶け出した氷

沈黙の中で錯綜する本音
目覚ましのいらぬ故郷の蟬時雨

半分の虹半分は旅先だ
突風を千切つて遊ぶかざぐるま

京都塔の会
都倉 求芽報

デバ地下に派手な帽子と行くはめに
ともかくも今満足という手相

逆境を竹のしなりで跳ね返す
波頭 真夏の恋を掻く攫う

留守番へ疲れて濁る水中花
スリルかも赤いTシャツばかり着る

マドンナという刺客跋扈するスリル
身をこがす恋なら脂肪燃えるかな

水を得て油がのつた三年目
すき焼の脂身さけるヘルシー派

ゆつくりと脂汗拭く職探し
あかり 正典 深雪 夕子 伸雄 巳代一 欣之 初太郎 信子 宏至 ひろこ 萩乃 奏子 高鷲 作二郎 森子

あかり 正典 深雪 夕子 伸雄 巳代一 欣之 初太郎 信子 宏至 ひろこ 萩乃 奏子 高鷲 作二郎 森子

脱脂粉乳あのころ誰も痩せていた
脂抜けてからいぶし銀のスター
しんどいを汗を流してボランティア
しんどいを値切った服がお気に入り
しんどいと暖気に出さぬ意地がある
病名が五つも載っているカルテ
顔中にしんどいと書く夏の午後
しんどいなやせる年金のやり繰り
つき合っしてしんどいお方遠くなり
しんどいと言わない人にまた頼む
流れ星呪文唱える暇もない
セーフアウト瞬間裁く技の牙え
母の風一瞬なでる墓まいり
ごめんねと言う瞬間を取り逃がす
ドリブルと見せた瞬間Vゴール
叩いた蚊逃げた瞬間老いを知る
決定的場面へテーブ巻き戻す

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

ポチ袋小さな気持だけ入れる
知恵袋事ある毎に亡母思っ
亡き母へ託びたい事を袋詰め
本棚に眠ったままの知恵袋
欲しい物いっぱいあって袋縫う
残りわずか爪先立ちの老いの日日
残り時間少く無欲のまま生きる
あの時に声を一言悔い残す
残る人生花瓶に花を絶やすまい
残り時間神におまかせしています

求芽 啓子 きよし 典子 庸佑 正坊 弘之 満子 英子 輝美 高栄 藤重 宏子 葉子 則彦 益子 萬的

城北川柳会

吉岡

修報

子を庇い母は窓口開けておく
釣書にはブランド好きと書いてない
母さんと別れて歩く反抗期
離れずに付いて行きます言うたはず
会者定離神の掟は手きびしい
子離れが済んで楽しくとびまわる
離れてもまた極楽で会えばよい
距離のある時は光っていたあなた
プーメランあなたの心臓目がけ投げ
健やかな心音胎児の息遣い
心臓はひとついろいろある思い
奥さんの心臓たまに借りてこい
大銀行昔の名前棄てました
親の顔みたいブランドすくめの子
宴会になって正論囲まれる
第三のビール切ない冷蔵庫
大胆な意見同意に肚がいり
前向きになると見えぬ風が見え
しなやかに舞うは女の処世術
生きがいをなかに求めてよいのやら
おてもやん面があるうとなかろうと
手抜きした日々へ後悔だけたまる
ケータイで送る程度の起請文
飛行機に飛行禁止を言い渡す
どんな人が乗っているかと飛行雲
カトリック優しい名前で大暴れ
褒められると腰が自然と浮き上がる

志華子 たもつ 朝子 弘風 高栄 ルイ子 順三 恵子 求芽 柳弘 ひさ乃 正修 あやめ 一歩 重人 春蘭 典子 はじめ 桂作 とし子 萬的 和夫 叡子 達子 昭子 たんじ

よく笑う子から見つかるかくれんぼ
洗濯機妻の気分がよく回る
嫁は人に勝とう勝とうと鍛えてる

川柳塔みちのく

小寺 花峯報

待つ人が居て幸せな急ぎ足
パトカーに会釈していく北の猿
八起き目の形前方だけを見る
ゼロ歳児這うては拾う好奇心
私なりに急いでいます蝸牛
前向きに歩めと母の夢枕
近道を知ってる人と手をつなぐ
老獺な猿が糸引く舞台裏
猿の檻から覗かれてるヒト科
逆境を逆手に上り詰めた椅子
露天風呂一匹混じる手長猿
前向きに生きると朝の飯が炊け
くしゃみ三回すぐ葉屋の戸を叩く

川柳塔鹿野みか月

土橋 螢報

集一 千里 利昭 誠子 あすなろ ヒサ子 愁女 ふさゑ 花匠 黙人 岳水 花峯 慕情 一花 五楽庵 弘子 宝子 彩子 小鹿 久枝 睦子 和子 孔美子

硝子張りの中で踊っているピエロ
文字にはうとい金は貯めている
劣るちから庇って口達者

米俵むかしむかしに出た馬力
無力だが子への愛には命がけ
悪態のちから眉毛を吊りあげる

ほめてごらんこの子の力きつと出る
あまい物食べ過ぎちからなくしそ
ひたむきな河に迂曲となるちから

老いてまだ飲まずにおれぬ夜の酒
無位無冠深夜放送見にや寝れん
当選の夜はダルマが泣き笑い

雨の夜に山が動いて山が泣く
通夜の席広い人脈垣間見る
スポーツの番組全部見えています

空白のページを埋める午前二時
神秘的な夜に根が生まれ芽が伸びる
しあわせの階段夜が忍び寄る

むらくも川柳会

毛利

向い風邪魔で背中を見せてやる
風音にふっと淋しくなるひとり
さやさやと秋を感じる風の音

緑風私の身体浮きあがる
風向きを読みそこそこで唯の人
虫の声夏の終りの窓の風

シャボン玉喜び感じ風に乘る
遠い人風の便りに聞く噂

永子
幸枝
かおる

保子
房子
公子

はるお
くの子
かっ乃

節乃
菊乃
みさ子

八重
実満
汲香

きみ子
富久江
螢

幸報

幸子
彰

信夫
宣雄
義良

安男
克子

趣味の輪で知らぬ世間の風貰う
古老にも若さが欲しい長話
リハビリの優しさ嬉し手を合わす

高温で汗しぼられてなる干物
在りし日の面影今も瞳に浮ぶ
夫々に病歴語る同窓会

締め切り日あわてて検索五七五
大好きな月下美人咲き一人見る
物忘れ道づれにして生きている

さらさらとこの世の花のど真ん中
川柳クラブわたの花 井尻

五十年本音心棒古稀迎え
海にない四季を教える里の池
裏口から入ったまではよかつたが

惜しまれるうちが花よとせかされる
敬遠するがやっぱり父頼り
ちらちらと漁り火旅情なくさめる

覚悟していどめば浅い水溜り
いいじゃない結果よければよししよう
教養に裏うちされた思いやり

ちらちらと心の奥に亦火花火
リーダーにまかしておけぬこのチャンス
リターンにまかしておけぬこのチャンス

住居転てんこの身気になるアスベスト
前向きに前向きに探すべきさま
やんわりと本音をついてるジョーク

雷を覚悟で今日も終電車
負けん気の陰でこっそり花が咲く
ライバルのほめる言葉の裏を読む

惠美子
ます美
明朗

定子
寿

昭子
美保
喜美

民報
かすこ

正春
はじむ
君江

一風
欣子
幸枝

宏
晴美
俊子

浩三
浩三
浩三

(赤) 妙子
ますみ
敏男

いつぶみ
義明

指先にひよっこり秋が留まつてる
ちらちらといつの間にやら共白髪
下心出世はちらちら妻の影

さりげないあの日の言葉抱いたまま
有り難とう短い言葉何故言えぬ
寝つかれず深夜こっそりラジオ聞き

子のメールこっそり覗き安堵する
川柳ねがやわ 森

好き嫌い等で計れぬ親の愛
雑踏にモーツアルトの心地良き
遺伝子が決めてしまった好きな人

好きですと妻には言えぬ好きやから
ありがとうの言葉が好きでポランテア
好きですと妻には言えぬ好きやから

未来図はやっぱり好きな彩で描く
好きな道歩めとレール子に任す
雷雲が今日も私を攻めてくる

寝転んで雲の動きを見る余裕
雲つかむような男でにくめない
うっ溜めた雲が吐き出す稲光り

雲海の上で目覚める過疎の村
雲に乗る猿が下界をあざ笑う
眠るなど励ましながら待つ救助

救急車境界線を突く走る
人の輪の手ぬくもりにも助けられ
美しい貧者の一灯義援金

アフリカへ届け私の百円貨
リリーフもなくて踏ん張る父の汗

ふりこ
知佐子
美代子

宏至
博子
八寿子

西報

高栄
ただよし
一炊

ルイ子
弘風
一風

庸佑
典子
三郎

忠央
とし子
かすみ

博泉
頂留子
弘一

れい子
一笑
仁清

洋

娘の見合い親の心が揺れている
吊革を持って揺れてる物思い
わたくしを射るような目に揺れている
来客に茶柱立てて喜ばれ
他に行く当てもないので待つてやる
愛情を上手に返す巨玉やき
住所言わず遊びに来てと言われても
親馬鹿を描くと私の顔になる
里の駅はと心の癒ゆるむ
暮洗うさつと涼しい風が立つ

柳柳塔打吹

大森 孝惠報

選ぶのは三高ばかり玉の輿
選挙カー連呼ばかりで息切らせ
汗だくでハイゲンの夏服選ぶ
八十路坂ハイヒールでも選ぶうか
誰よりも私を選ぶ人が好き
次の世は親を選んで生まれよう
わからぬに選ぶ最高裁判事
選ぶのに困るとんぐり背くらべ
投げ場所も捨て場所もない身が一つ
小銭を投げて大きな夢の神頼み
秋風が投げていた趣味呼び覚ます
投げられずじつと支えている糸図
まだ死ぬぞ老いほれという投げことは
雲に乗り世界旅行に行った夢
流れ雲遠く住む子の身を案じ
あの雲に乗って旅などしてみたい
雲つかまような話に惑わされ

勇太郎 九好 茜 たもつ 利昭 勲 さち子 集一 朝子 郁夫 貴恵 玲子 美ツ千 完司 重忠 公恵 克枝 龍枝 京子 芳光 螢 久井代 美美子 和子 幸子

幸せな時には見えぬ母の雲
アドバルーン雲とよからぬ話する
名月を隠した雲の心意気
あかね雲今日の命を感謝する
雲行きがあやしくなつて本音言う
へりくつを通し頑固に生きている
理屈なんて満腹のとき用がない
婆さんは屁理屈爺さんは雷だ
理屈なら家の婆ちゃん一受賞
薄づくり理屈どおりに切れぬ河豚
万華鏡みたいに理屈こねまわす
理屈では天の岩戸は開かない
選ぶことできぬ親子の切れぬ縁

倉吉川柳会

竹信 照彦報

蜜蜂に刺されパワーが倍になる
背伸びする背なに視線が突き刺さる
腕に刺す注射のあとが並んでる
真つ赤なバラ情熱という刺で刺す
やんわりと吐いた言葉で人を刺す
寝ながら痛い所をチクリ刺す
一刺しが募穴掘るとは気が付かず
人刺して見たかったとは呆れ果て
趣味仲間五万とで来た川柳誌
この俺を竹島守りへ連れて行け
偉大なる阿呆が連れに一人いる
連れそつて行きつとくところまでの旅
連れのない僕はワンマンなのかなあ
赤紙に連れて行かれて其のまんま

三津子 節子 照彦 紀美恵 美知江 善江 みち子 清 禎元 博丈 玲坊 石花菜 孝恵 よしえ ひろこ 泰輔 玲子 (前)喜美子 和枝 萩江 日出子 康子 石花菜 季芳 玲坊 修 節子

白アリを悪徳業者連れてくる
お互いに連れ合いと呼ぶ間柄
寂しくて雀に宿を貸している
近づけば逃げる雀となりけり
お喋りな雀と遊ぶ芒の穂
親雀電線とまりミーティング
村雀今日は刺客にも申す
雀よりうるさい選挙はじまった
来世は鶴か亀かに生まれよう
また酒が飲める嬉しい夜が来る
何が来ようと先ずうまい飯を喰う
友の声先に西瓜がころがった
よく来たと迎えてくれる里の海
付いて来る影も時にはうつつらしい
来客に元気をもらい話し込む
浄土から初めて来たと益の客

岬川柳会

八十田洞庵報

欠負は埋めずロボット入社する
老いの日々バントマイムで明け暮れる
マニフェスト責任感はからつぽで
殊更に秘密と言われ気が重い
若き日の無茶も恋しい宵の月
秋刀魚焼け亡き夫恋しい宵の月
ふわふわと空中散歩熱気球
言い勝つた口だが淋し帰道
無茶せずにゆつくり生きる亡夫の分
口下手な女の笑顔温かい
無理無茶を皆で通して盛り上げる

重忠 鬼一 賀寿恵 螢 睦子 勝草 秋草 瑞子 次男 完司 克枝 和子 幸子 龍枝 京彦 倅子 里平 茂平 年子 洋子 富美子 幸 洞庵 令子 和香 とみ

意地はつた口元どこか淋しすぎ
無口な人その一言が重みある
異議ありと言いたげに待つへの字口
朝帰りの言い訳じつくり聞きましよう
じつくりと熟成させて出す旨味

川柳さんだ

北野 哲男報

山ぶどう今が旬だと急ぐ足
捌けない若大将は覗く魚

野歩きの邪魔をしてはいる栗のいが
名月を眺めて平和をかみしめる

買え買えと誘惑聞く空財布
胸襟を開く相手を間違える

ウエストが実りの秋を感じてる
風船よ天まであがれトラの秋

水族館で飼われていれば喰われない
故郷にもどり命をつなぐ鮭

ネクタイが今年貰った夏休み
母も娘も努力実らぬダイエツト

豊中もくせい川柳会

江見 見清報

叱られる覚悟の茶髪笑われた
食欲の秋に覚悟のダイエツト

繕いは覚悟で乗った泥の舟
ビー玉の芯に昭和の空の碧

サザエさん読んで昭和に還ります
昭和史に命刻んだ跡がある

昭和史を二ツに分ける原爆忘
路地裏に昭和の味と国訛り

みやこ 孝子 蛙城 和美 貞夫 順子 開子 歳子 雅司 一之 忠 和代 正和 朋月 章子 藤朗 哲男

背中には昭和の鎖重いまま
夢の中遠い昭和に虹をみた
山際を離れた月と会話する
親離れた子にさよならが言えぬ
団欒の輪の外に居るお父さん
ふたりの子遠く離れる世界地図
欲得を離れ我が身を守る日日
離れてはいても子のいる安堵感
あの女誘ってみるか秋の風
乱れ髪心のうつつにつきまとう
なまじつか言訳をして誤解され
軽水炉欲しさに話もちかける
情けかも知れぬ時計が止つてる
気配りが邪推されてる淋しい日
行動ののろい分だけ動く口
玄關の祭を運ぶ子等の下駄
罰当たり妻のスペアをふと思ひ
虚無感の隙間へ秒針きざむ音
国宝のお守で寺も不眠症
年金がとでも許さぬ楽隠居
交際のバロメーターは年賀状
スジがいい言われ続けた習い事

岩美川柳会

石谷美恵子報

煙突といわれる煙草やめられぬ
キューボラの街は煙突気兼ねする
人間の匂いを吸った煙突よ
汚染する煙突なのに情緒ある
ひたひたと口ポット人の職奪う

啓生 郁子 寿美子 求芽 幸雀 勇治 知香子 英子 早人 高栄 庸佑 祿骨 慶子 和子 満寿巳 美義 石舟 萬的 則彦 尚士 正坊 見清

群集がひたひた甘い方へ行く
ひたひたと少子高齢化が迫る
本当の愛は形にとらわれぬ
三角に袋を畳む癖がつき
形式にとらわれそうなる自尊心
この国の形はクラゲ ナマコ かな
形なら自由自在と言う輪ゴム
形通り彫つても虎が猫になる
体形も丸いころも丸くろう
形だけ厚く見えて水くさい
形から入り心がまだ添わぬ
過去形を今ではすべて許してる
五十年形気にせず夫婦です
感動をさせた男のあはら骨
感動がおさまるまでは歯を磨く
美人見て感極まつたお爺さん
感動を誘ひ砂丘の陽が沈む
麻酔から醒めて仰いだ青い空
感動の伝わる脳だまだイケル
感動を貰う煙突高くする
感動の笑顔涙の優勝旗
ひたひたとたかがドラマに濡れる胸

三幸川柳教室

古久保和子報

小さいヒミツ園児の胸のポケットに
内密にあればと申しあげたのに
秘密よと念押しほどでない話
虚飾捨てガラス張りです古希の坂
てにをはを誤りマル秘浮上する

孝男 裕子 圭一郎 蜜 きみ子 完司 和枝 重忠 茶郎 蟹郎 雅女 幸枝 菖子 石花菜 季芳 はお 一京 (野)節子 公乃 睦子 よしえ 桂香 みね 准一 三千子 碧

社の秘密筒抜けだった女子トイレ
釣道具せて手入れの盆休み
おおぐせで荒くまつた舞台裏
針の山とともに恋に酔っていた
父さんの怒鳴り声には針がない
葦刈袋しかと繕う木綿針
命の洗濯好きな服着て旅に出る
人間の務めとことん生きてやる
新しい命育むいい笑顔
前向きに生きて命を喜ばす
真つ白な命が駄々をこねてくる
ネガティブな命に錆が付いてくる
サルビアは命の色で咲いている
たつぷりと汗の臭いのする命
何もかも民営にして天下り
風呂敷へ三角四角何もかも
何もかも母の手を借り新世帯
何もかも許す涙が美しい
何もかも厭になったが死ぬの厭
何もかも背負いひとりの指相撲
過ぎ去れば何もかもうたかたの夢
何もかも忘れたように日は昇る
何もかも捨てれば広い四畳半
何もかも吐いたノートの誤字脱字
何もかも赦し真つ赤な陽が落ちる

うぶみ川柳会

小谷美ツ千報

智三 孝義 かずみ 靖子 武 千秀 一步 イセ 当代 幸 章子 次根 保州 朱夏 昇 和子 起世子 さち子 信子 純子 公子 徑子 登美代 町子 幹子

先着順僕の前まで来て済んだ
炎天下いとわず蟻の列続く
炎天下にこれぞわが世とあぶら蟬
この暑さ私もさすが水枝る
戸のきしみ明治生まれの父母偲ぶ
手際よくやればさすがと騒ぎたて
千巻心経さすが仏も立ち止まる
一斉にシャッター閉める音淋し
快食快眠ガラス戸開けて深呼吸
炎天下塩がふき出る黒いシャツ
博学者さすが言の葉から滲む
戸から戸へ歯を噛みしめるセールスマン
うらの戸を全部開けると日本海
お寺さんしびれて笑う盆が来る
戸をはさみ犬の言い分猫の言い分

堺川柳会

河内 月子報

静生 かつみ よしえ 龍枝 常正 あつま 芳江 天雀 季芳 重忠 ひろこ 修 石花菜 完司 宣子

勲章を持つるだけで偉くない
ポケットの底まで見せて味方です
味方ではないな時々目をそらす
聞かれたららりくりと答えごとく
偉人でも逝つたら一巻の終り
片減りの男の靴にある誇り
気前よく乗った話で困つてる
一言が偉い驕ぎを引きおこし
生き方に意味つけたがる偉い人
偉そうに女系家族の女たち
唐突に偉い人にはなれませんが
とうさんは偉いえらいと立てておく
後で来てお先に帰るお偉方
住所録に棒線を引くクラス会
砂時計減る度旨くなる紅茶
十五歳たったひと言腹減つた
弱音吐く相手が欲しい偉い人
昨日見た野仏様はコンギツネ

日の出 扶美代 千代 梓 八千代 文 舞夢 半銭 伸子 よりこ 公誠 かりん 玄也 朋月 りつえ 幸雀 潤子

川柳塔のぞみ12月句会

日時 12月13日(火) 13時から
場所 人形町区民館
(地下鉄人形町A1出口5分)
宿題 「やれやれ」「臨時」「変」
以上各2句「自由吟」1句
欠席投句 12月10日必着 播本充子宛
〒193 0832八王子市散田町2-31-3

第47回豊中市民川柳大会

と き 11月23日(祝) 正午開場
ところ 豊中市立中央公民館1Fホール
阪急宝塚線曽根駅東100米
会 費 1500円(軽食、記念品、発表誌呈)
落 語 桂 三若さん
宿 題 出句締切 午後1時
(順不同) 「悟 る」 板野 美子 選
「奥 」 上野多恵子 選
「憧 れ」 奥田みつ子 選
「そのうち」 住田英比古 選
「枯 れ葉」 中田たつお 選
「テスト」 本田 智彦 選
「時事雑詠」 前田 咲二 選
各題2句(選者五十音順)
賞 豊中市長賞ほか各題に賞呈
主催 豊中川柳会・豊中市立中央公民館
連絡先 〒560-0015 豊中市赤阪1-6-9
石川 勝
TEL・FAX 06-6854-1990(石川)
または 06-6303-7297(本田)

10月号掲載の締切時間がまちがって
いましたのでご注意ください。

第57回 大阪川柳大会

と き 11月19日(土) 11時開場
ところ 大阪市立北区民センター
(06-6315-1500)
(地下鉄「扇町駅」、またはJR
環状線「天満駅」から3分)
会 費 1000円(発表誌呈)
宿 題(各題2句・12時30分締切・席題2題)
「袋 」 前 たもつ 選
「戦後60年」 前田 咲二 選
「牛耳る」 吉川 卓 選
「油 断」 前田美巳代 選
「鳥 」 上野多恵子 選
「テ ー プ」 嶋澤喜八郎 選
賞 各題の秀句に大阪市長賞贈呈
主催 番傘川柳本社・川柳塔社・川柳
文学コロキウム・川柳グループ明暗
川柳天守閣・川柳瓦版の会
後 援 大 阪 市

平成17年 尼崎ザ川柳

(尼崎川柳協会合同句会)

と き 11月26日(土) 午後1時15分開場
ところ 尼崎市総合文化センター
7階 第2会議室
会 費 1000円
締 切 午後2時
挨拶 尼崎川柳協会会長 長浜 美籠
宿題と選者 各題2句 席題なし
「浅 い」 田辺 鹿太 選
「闇 」 大堀 正明 選
「頃 」 中野 文擴 選
「サーブ」 西出 楓楽 選
「笑 う」 村上 水筆 選
「都 会」 長浜 美籠 選
北野 哲男
お 話 2階レストラン
懇親宴 男性3000円 女性2000円
主催 尼崎川柳協会
連絡先 尼崎川柳協会事務局
房安 志激 06-6422-6164

第17回 兵庫のまつり

ふれあいの祭典「川柳祭」開催要項

日 時 11月27日(日)
10時30分～16時30分
会 場 加古川市民会館小ホール
TEL 0794-24-5381
(加古川市加古川町北在家2000)
内 容 事前投句入選発表と講師
アトラクション
当日投句入選発表
当日投句(各題2句 欠席投句拝辞 12時締切)
「並 ぶ」 山路 節子 選
「橋 」 矢沢 和女 選
「舟 」 長島 敏子 選
「清 流」 石井 冬魚 選
「握 手」 泉 比呂史 選
出句料 1000円
賞 文部科学大臣賞ほか多数
主 催 ふれあいの祭典実行委員会・
兵庫県・兵庫県教育委員会ほか

京都塔の会 秋の吟行句会(ご案内)

日時 十一月二十八日(月) 十時半
 集合場所 地下鉄東西線「蹴上」駅②出口
 会場 名庭と京料理「洛翠」
 昼食 十一時半から終わり次第句会
 開催します。
 兼題 「当日雑感」「乱」「あべこべ」
 「愛着」各題三句
 会費 四千五百円 当日いただきます
 申し込み 十一月二十日迄に求芽宛
 ◎洛 醉 京都市左京区二条通白川
 TEL 075 (771) 3535
 明治四十二年七代目小川治兵衛作庭
 池泉回遊式
 現当主小川治兵衛の言葉「難しいことは
 考えなくていいのです。ただぼーっと眺
 めて心が癒される、そんなあくびのでき
 る庭がいいのです」
 京都塔の会 都倉 求芽
 京都市下京区諏訪町通松原下がる弁財
 天町 TEL 075-351-4109

第24回鳥取県没句川柳供養大会

作者の分身の没句を迷わず成仏させて
 やりましょう(数珠持参のこと)
 施主挨拶—両川洋々 祝辞—鈴木公弘
 弔辞—松川行男 読経—藤木大善
 焼香—各川柳会会長・参加者全員
 と き 12月11日(日) 9時受付・開場
 ところ 全労災ビル(電話22-8234)
 J R鳥取駅南(駅裏) 一分
 参加費 精進落しの宴 4500円
 (昼食・懇親会・作品集呈)
 川柳大会のみ参加2500円
 (昼食・作品集呈)
 兼題と選者「敗者復活吟」(昨年中の没句)
 酒井路也・「聖書」宮西弥生・「天皇」
 田中道博・「どっぶり」石谷忠良・「正
 面」谷 季芳・「火の輪」両川無限・
 「オレオレ」中宇地秀四・「手の内」
 中田房江
 席題 なし 各題2句 締切11時
 表彰 総合10位(出席者優先1句1点
 欠席没句 1000円(切手可、作品集呈
 (12月5日メ切り)
 投句先 〒680-0033 鳥取市二階町3-102
 植田 一 京 宛
 後援 鳥取県川柳作家連盟

川柳マガジン川柳大会(ご案内)

日時 十二月四日(日)
 10時開場 開会 十二時半
 会場 新潟グランドホテル
 交通 J R新潟駅万代口より車で五分
 TEL 025 (228) 6111
 第一部 「現代大衆川柳論」は是非か?
 第一線川柳作家らによる台本なしの
 パネルディスカッション
 基調トーク 斎藤 大雄
 パネリスト 菅原孝之助・鈴木 如仙
 竹本瓢太郎・尾藤 一泉
 コーディネーター 大野 風柳
 第二部 05年センマガ句会王座決定競吟
 事前没句 「水」 大野 風柳 選
 当日課題 「冬」 雫石 隆子 選
 「友」 川上 大輪 選
 「米」 長谷川冬樹 選
 「里」 西來 みわ 選
 「時事川柳」 尾藤 三柳 選
 各題2句 11時30分締切
 参加費 四〇〇〇円(記念品昼食付き)
 懇親会費 六〇〇〇円(五時二〇分)
 参加希望者は事前投句用紙を川柳マガジン
 編集部(06-42259-3777)へ
 請求してください。
 事前投句締め切り 十一月十四日

柳界展望

幸せの窓は自分の手で開ける
喜田 准一

☆川柳研究社創立75周年記念川柳大会は、9月18日池の端文化センターで開催された。当日参加者219名。当日入賞句は次のとおり。

バスタブの中で方程式を解く 播本 充子

☆第9回川柳展望全国大会は、9月24日ホテルアウイーナ大阪で開催された。当日の秀吟は次のとおり。

☆第57回西日本川柳大会は、9月4日岡山県久米南町文化センターで開催された。事前投句391名、当日出席328名。本社関係の成績は次のとおり。

〈天位〉

日の丸を仰ぐと腹がすいてくる 西内 朋月

〈久米南町町長賞〉

岸本 孝子

〈中国銀行弓削支店長賞〉

新家 完司

☆第13回和歌山県川柳大会は、9月11日和歌山J A会館で開催された。事前投句197名、当日参加160名。当日の本社関係者天位。

善人で飾る言葉を持たぬまま 川上 大輪

出版。(B6版 上製264頁 序文・天笑主幹 頒価1200円) 句集紹介は次号以降に掲載予定。

○山岡富美子さん(理事・河内長野市)は、朝日新聞なにわ柳壇入選百句集「賛歌」を発刊。A5版変型・90頁。

▼同人動向▲

○中宗明氏(同人・大津市)は、法務行政に長年尽した功により、5月20日に瑞宝雙光章を受章の栄に浴された。

○9月18日、川柳研究社創立75周年記念川柳大会へ出席のため、みつ子副主幹ほか4名東京行。

○高杉千歩さん(同人・八尾市)は、八尾市高齢クラブ連合会主催の、平成17年度「豊かな老後主張発表会」のエッセイに応募、480篇の中から最優秀賞を獲得した。「老春」と題して日常

☆平成17年度川柳研究社誌上大会での本社関係受賞者は次のとおり。

〈第一位〉 高瀬 霜石

☆川柳「路」吟社500号記念誌上大会での本社関係入賞者は次のとおり。

〈第一位〉 高瀬 霜石

新同人紹介

森もり

元もと

ふみよ

林はら

力りき

子こ

―呂万・蛙城推薦

―呂万・蛙城推薦

阪神タイガース優勝記念川柳大会

とき 12月11日(日) 14時~17時
ところ 道頓堀くいだおれ5F
セミナー 浄福寺住職 西村哲夫師
兼 題(全題事前投句・各題2句・11月20日締切)
「トップ」鶴田 遠野選・「風船」赤松ますみ選
「球」久保田元紀選・「兄貴」新家 完司選
「旗」森中恵美子選・「景気」磯野いさむ選
「阪神タイガース関連句」 河内 天笑選
披露14時10分
要 項 便箋たて2つ切りに2句 無記名
投句料 1000円(宴会不参加 投句のみの方)
当日参加 投句料プラス宴会費 合計7000円
投句料は投句時に前払い。会費受取りと同時に領収ハガキを送付します。
投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2丁16-3
河内天笑方 堺川柳会
主催 堺川柳会 後援 川柳塔・(社)日川協

生活を、川柳を入れて紹介。川柳三昧、絵三昧の充実した日々感謝しながら、この平和が何時までも続くようにと締めくくった。表彰式は9月14日に開催された。

▽御芳志御礼△
 常任理事会 10月17日(月)出席18名 ①まつり会計報告 ②総会・句会反省 ③常任理事役割分担 ④18年度行事について 950号・代表者会・特別常任理事会他 ⑤同人承認2名 その他
 次回常任理事会 11月7日(月)9時30分、於アウイナ

□故橋高薫風名譽主幹の御長男、橋高充氏から亡父供養として金一封を拝受。

▽訂正とお詫び△
 10月号 35頁上段19行目、土橋房子→土橋房枝

直原玉青画伯は9月30日、心不全のため逝去。101歳。画伯は昭和40年「川柳塔」創刊以来、本年7月号まで表紙絵を揮毫いただいた。岡山県生れ、現代南画第一人者、俳人、僧侶。91年日本南画院会長。92年勲三等瑞宝章。著書多数。

▼ 報 ▲

お知らせ

先般配布、送付した川柳を始める人のための小冊子「川柳しませんか」をご希望の方は、一冊一〇〇円(送料別)で販売します。ただし十冊単位でお願いします。川柳塔事務所宛お申し出下さい。

川柳塔社
 電話 06-66629-6914

常任理事役割分担

10月17日の常任理事会で、役割分担が次の通り決定しましたので、お知らせします。
 (太字は部長・各役員五十音順)

総務部	企画事業部	編集部	句会部	同人・誌友部	渉外部	会計部
前 ともつ	坊農 柳弘	西出 楓楽	大内 朝子	長浜 美籠	米田 恭昌	鶴田 遠野
村上 玄也	鴨谷瑠美子	木本 朱夏	村上 玄也	川端 一步	西内 朋月	井伊 東吉
松原 寿子	井伊 東吉	籠島 恵子	河内 月子	穴吹 尚士	河内 月子	籠島 恵子

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 わかやま	13日(日)午後1時から 靴・交替・モダン (日本の人名)	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
西宮北口 川柳会	14日(月)午後1時から 教室・主役・こめかみ・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南西出口徒歩3分 プレラにしのみや 〒663-8202 西宮市高畑町2-82-308 西口いわゑ
高槻川柳 サークル 卵の花	17日(木)正午から 触れる・多数決・せっかち アンケート・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1118 高槻市奥天神町1-26-17 瀧本きよし
岸和田 川柳会	19日(土)午後1時半から 見苦しい・無意味・珍しい 求める	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0807 岸和田市東ヶ丘町808-307 長谷川呂万
川柳 藤井寺	20日(日)午後1時から 頼る・句	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
岬川柳会	20日(日)午後1時半から 海外・誤算・鋭い	岬町 みさき苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
もくせい 川柳会	21日(月)午後1時から 無事・文化・握る・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曾根駅南東徒歩5分 〒561-0801 豊中市曾根西町2-8-4 江見見清
南大阪 川柳会	22日(火)午後6時から ポーズ・くすぶる・理屈・種	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
川柳クラブ わたの花	25日(金)午前9時半から 幸運・スタート・手応え これから	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
東大阪市 川柳 同好会	26日(土)午後6時から 叩く・凡人・そして・笛	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
はびきの 市民会 川柳会	27日(日)午後1時から サンダル・主・毛布・「映画」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川柳 ふうもん 社	27日(日)午後1時から あの日・デリケート・無免許	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京
京都 塔の会	28日(月) 吟 行 当日雑感・乱・あべこべ・愛着	11月号 (P.119参照) 問い合わせ先 〒600-8428 京都市下京区弁財町328 都倉求芽
川柳塔 みぞくち	28日(月)午後7時半から 酒・今年の出来事・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所 (06-6629-6914) へご連絡ください。

11月各地句会案内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳ねやがわ	3日(祝) 正午開場 第29回寝屋川市民川柳大会	10月号 (P.57参照) 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
川柳塔な	4日(金) 吟行 11時から 佇む・心・達者	問い合わせ先 〒636-0311 奈良県磯城郡田原本町八尾62-6 渡辺富子
尼崎いくしま	4日(金)午後1時から 似る・終点・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
堺川柳会	4日(金)午後1時から 助ける(共選)・想像 こ・い・も(折り句)	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
城北川柳会	5日(土)午後1時締切り 眠る・収穫・サンプル・自由吟	旭区 老人福祉センター3F 地下鉄千林大宮駅3番出口の左隣 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8 神夏磯典子
富柳会	5日(土)午後1時から 熟れる・台風・自由吟	富田林中央公民館 (近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m) 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池森子
倉吉川柳会	5日(土)午後1時から テレビ・原因・戦う	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡大栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳塔唐	7日(月)午後1時半から 犬・暦・変わる	唐津市 栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517-13 宗水笑
尼崎尾川柳会	8日(火)午後1時から 奇跡・キャリア・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 事務局 〒661-0976 尼崎市潮江5-2-47 田辺鹿太
ほたる川柳同好会	8日(火)午後1時から パン・名前・黒い	豊中市立蛭池公民館 阪急・モノレール 蛭池駅駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒鬼
川柳塔打吹	12日(土)午後1時から 世帯・役・温かい	倉吉市上灘町 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光
川柳塔まつえ	12日(土)午後1時から 哲学・呑気・煮る・底	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木9-23-22 三島崧丘
川柳塔みちのく	12日(土)午後4時から 絵・遊ぶ・むかし	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ2階「川柳道場」 〒036-0161 青森県南津軽郡平賀町杉館字宮元53-1 小寺花峯
八尾市民川柳会	13日(日)午後1時から キャリア・外・破る・雑詠	山本コミュニティセンター内3F学習室(近鉄山本駅) 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子

編集後記

ます。

☆10月10日の第11回「川柳塔まつり」には、20名のご出席有り難うございました。☆ご存知のように平成7年から「川柳塔まつり」が開催され、六賞が表彰されるようになった。それ以前は路郎賞・川柳塔賞の二賞と、他の四賞は別の月に発表、表彰式が持たれていた。その後、平成11年から二賞の選考方法が変わり、それまで1句対象であったのが、作品群の自選応募となった。☆これらの画期的な制度を整えて下さったのは薫風名誉主幹である。いつまでも守り、盛り立てて行きたいが、二賞の応募者数の低調なのが気にかかる。鬼に笑われるのは重々承知の上だが、来年は同人・誌友の皆さんの全員応募をお願いし

☆9月の日川協の常任幹事会で、四枚綴りのプリントが配られ、読み上げられた。文化庁文化部長芸術文化課から、各関係公益法人宛の事務連絡で「文学・活字文化振興法の施行について」という公文書である。☆いつも言われているのだが、この手の文章は実に解りにくい。辛うじて理解できたのは、前記の法律が第167回通常国会で成立、施行されるということ。それと国民に広く文学・活字についての関心と理解を深めるため、10月27日が「文学・活字文化の日」に決定した、ということだけであった。☆察するに、今問題になっている国語力低下への対策の一つらしい。この日の制定によって国語力が伸び、川柳を楽しむ人が増えたら嬉しいのだけど…。(ふ)

ひとこと

よるべき家庭規範

戦後民主主義の下、自由と平等に個人の尊重が強く強調され、よるべき規範をみうしなつて、正しいのか否かの認識に混乱がみられた。特に家族の役割が著しく軽視され、子供の権利を主張するあまり、これを否定する思潮も表れ子供にとって「親」という特別な存在すら意識しなくなりつつある。文化庁の「これからの敬語のあ

りかた」の調査でも、親には敬語を使って話すべきと思う子供が二十三％に対し、そう思わないと答えた子供は三十一％という調査結果がでている。

よるべき家庭教育、家族との絆を断ち切つて、個人が手に入れたものはなにか。自らを映す鏡であるのに、これを見失えば自分の生の根柢の輪郭がぼやけて、不安でとらえどころのない存在となつてしまふ。

(井上桂作)

○神戸のさるホテルで犬の結婚式が行われたという。新郎犬・新婦犬それぞれタキシードとウェディングドレス姿。出合いは犬同士の集団見合いだったとか。犬のお見合い・結婚・披露宴ハネムーンまで……。景気はようやく踊り場とはいえない。本当に豊かと言えるのか。○『ビッグイシュー』という雑誌をご存知ですか。「ホームレスの仕事をつく

り自立を応援する」を謳い、文句に、月二回発行。販売員(自立を目指すホームレスの方)が、JR大塚駅前交差点や、地下鉄淀屋橋周辺など決められた場所に立つて販売している。

○『ビッグイシュー』はイギリスで発行され、日本版は二年前に創刊。表紙はロナルド・ディカプリオ、キアヌ・リーブス、マライア・キャリー、矢井田瞳など充実している。

○一冊およそ三十頁、二百円のうち一一〇円が雑誌販売者の収入になる。販売員をきっかけに、社会へ復帰したホームレスもいるとか。街角の販売員を見かけたら『ビッグイシュー』を手にとってみませんか。(朱)

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(1月号)地名

都道府県
市
姓雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒545-0005 大阪市阿倍野区三明町2-10-16 ウエムラ第2ビル202



檸檬抄投句用紙

「呼ぶ」 (11月15日締切)

1月号発表

藤田 泰子 選 — 共選 — 仁部 四郎 選

B A

--	--

B A

--	--

地名

市都
県道
府

姓
雅号

地名

市都
県道
府

姓
雅号

切らないで下さい

左右に同じ句を書いて下さい



作品募集

初歩教室 「願 い」(3句) 三宅保州担当
 一路集 (3句) 「変わる」 大橋鐘造選
 「犬」 山原道夫選
 「暦」 山中康子選
 檸檬抄「呼ぶ」(2句) 藤田泰子選
 「油断」 断
 「呼吸」 夜寒
 「じれる」
 初歩教室 「プレゼント」

1月号発表 (11月15日締切)

川柳塔 (8句) 河内天笑選
 水煙抄 (8句) 板尾岳人選
 愛染帖 (3句) 新家完司選
 檸檬抄「呼ぶ」(2句) 仁部四郎共選
 藤田泰子選

2月号

檸檬抄「油断」
 一路集「呼吸」夜寒
 「じれる」
 初歩教室「プレゼント」

本社11月句会

とき 11月7日(月) 午後1時開場・2時半締切り
 —開催時間が変わりましたので—注意下さい。
 ところ アウイーナ大阪 4階 金剛
 天主寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441
 おはなし
 兼題 「動く」
 「芯」
 「絹」
 「浅い」
 「焼く」
 北野哲夫選
 山岡富美子選
 板東倫子選
 米田恭昌選
 八十田洞庵選
 河内天笑選

席題 1題 当日発表(各題2句以内)
 会費 1000円 投句料 500円

本社12月句会 6日(火) 午後1時から
 兼題 「床」「損」「粘る」
 「旅」「握る」

第24年度 夜市川柳募集

第6回「発見」赤松ますみ選
 ハガキに3句 11月末締切
 投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3
 河内天笑方 堺川柳会

定価 八百円(送料84円)

半年分 五千円(送料共)

一年分 九千八百円(同)

二〇〇五年(平成十七年)十一月一日発行

編集兼 発行人 河内権治

印刷所 美研アート

〒545-0005 大阪市阿倍野区三木町二一〇一六
 ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話(〇六)六六二九一六九一四番
 振替〇〇九八〇一五三三三六八番

「川柳塔」への投句について

- (1)川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌誌込みの投句用紙を使用してください。
 - (2)愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱い)、檸檬抄は本誌誌込みの投句用紙を使用してください。
 - (3)各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4)各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

全日本川柳誌上大会の「案内」(平成柳多留第11集)

日本の全柳人が、だれでも、どこからでも参加できる「全日本川柳誌上大会」(平成柳多留第11集)を開催します。日川協年次大会・国民文化祭文芸大会と並ぶ(社)全日本川柳協会の権威ある三大自然行事ですので、こぞつてご参加ください。

課題と共選者(各題2句・連記)

「宇 宙」 丸山しげる 田頭 良子 共選

「反 川」 横村 華乱 牛尾 緑良 共選

「哲 学」 あきたじゅん 安永 理石 共選

「 穴 」 中澤 恵生 小槻 忠雄 共選

第二次選者 板尾 岳人 近江あきら 齋藤 大雄

酒井 路也 塩見 草映

参加費 2000円(投句料・『平成柳多留』第11集代金含む)

賞 平成柳多留賞・川柳大賞・NHK会長賞・

(社)日本青少年育成協会会長賞・(社)全日本川柳協会会長賞

全日本川柳誌上大会賞・秀作賞(予定)

締 切 平成18年1月31日(火)(当日消印有効)

発表・表彰 第30回全日本川柳岩手大会(平成18年6月)

参加方法 参加用紙(雑詠1句)と出句用紙(2通1組)

に記入し、参加費2000円(振替又は小為替)

とともに左記へご送付ください。

〒530-0041 大阪市北区天神橋二丁目北1-11-905

社団法人 全日本川柳協会

電話 (06) 6352-2210

FAX (06) 6352-2433

医療法人社団

湯川胃腸病院

・日本医療機能評価機構・ISO9001-2000認証取得

健康保健取扱 看護2A・緩和ケア病棟

・消化器科・内科・外科

・放射線科・ホスピス

・デイサービスセンター

診療時間

月～金 8:30～16:00

土 8:30～11:00

JR桃谷駅徒歩3分

<http://www.yukawa.or.jp>

電話 大阪 (06) 6771-4861(代)